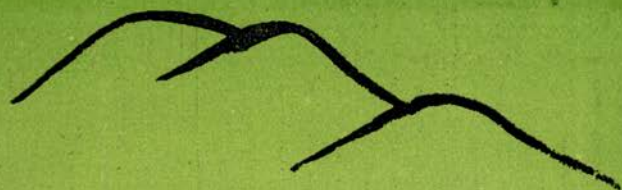


麻生路郎主幸

川柳雜誌

五月號



大正十三年三月三日第三種郵便物認可

昭和八年五月一日發行（每月一回一日發行）

第十卷 第五號

川柳雜誌社發行



川柳雜誌第十卷第五號目次

題字 麻生路郎 表紙繪 橋本木象

言

近代川柳進化過程の一考察

吳陵軒と柄井川柳とは同一人なりや

合評

武玉川初篇研究(十二)

騷

十七字音字檢討

僕

武玉川輪講補説

肱枕

白髮を抜く

トビツクス

或日の奉天

四月號偶感

春の出雲路

鐵下地

柳集

近作

光耀抄

座席

寶物

各地柳壇

西之町 MEMO

緑

雨(七)

編輯の窓

町

二(九)

阿部閑生(七)

松盛琴人(三)

木村半文(五)

省山路雨樓水車(四)

丹路一本屋杉(三)

梅本秋の(五)

森西省二魚(三)

安西乱三(三)

住田三亂(三)

山本東(三)

森本東(三)

梅田水車(七)

西田柳路(九)

吉田柳路(三)

岩崎柳路(三)

葉田柳路(三)

生田柳路(三)

麻生路郎選(六)

麻生路郎選(四)

長崎柳秀選(四)



川柳塔

路郎選

西田 艸樂

雪洞や東京壽司は握り立て
深爪を悔ひて宵を誘ひに來
閑な店にラヂオを聞いて春の遅々
厚司着て名だけ重役とかなり
緋の夜具が硝子に映る拭そうじ
郊外へ黒い息でも吐きに出よ
閑人が覗いて過ぎし舟世帯
保険金死の綱束はいと淋し
眼をだるく十錢漫畫の顔になり
借物の書物の角をいたはりぬ

貴郎の勝利よと夢に來て呉れた
散髪鏡未來が捨て難し

吉田 水車

歌舞伎座寸感

助六は足の方から批評され

在満將兵へ感謝

山賊にしてはものゝ具揃ひ過ぎ
サーカスは生命の綱をふと見上げ
シヨウ翁も富士へ皮肉はなかりける
チンドン屋ふと足どりをかへてみる
久々の便り寫眞機買へと言ふ

天王寺彼岸風景

出開帳春の埃に在はしまし

福田 山雨樓

新水兄へ

満開へ君は儲けてゐればよし
鹹首の發令櫻満開
太陽を學ぶ長男六年生
脱稿の見れば寝た兒は地藏眉
子等の母髪は括ればそれでよし

だんくゝに死ぬなあと煙草見つめぬ

楊井 二 南

甲子園風景 (三句)

三振の歸るベンチは皆だまり
作戦と知つてはゐるが打つて欲し
就職へ散々素性聞いて置き
頼もしい人の眼鏡をかけてゐる

佳田 亂 耽

わが友日の結婚 (三句)

まことしやかにけだものら式を擧げ
居間の廣さに寄り添へぬ新妻よ
妻の妹の新鮮な香を怖れ
いつか頭株になつてゐる彼氏

阿部 閑 生

遠くより來しが無言の對座なり
世界地圖なほもの足らぬ形をし

病 床

休むことにきまりて妻の懷爐借り

中 耳 炎

世の中の嘘を半分聞いて臥し

朝田 新 水

妻が壊して慰めてやる
善後策寄宿舎からの青い顔
妻の部屋春の氣分に夜が沈み
いづれ又櫻咲く日の近からむ
聞かしては悪い文句はお茶をのみ
三面を讀んであげるも孝行よ

永田里 九

松盛 琴 人

京洛の春 (三月三十日)

柿色の暖簾にお輕出て來そう
京間ひろくと脇息へもたれ
圓山は暮れて妓の顔白し

岩崎 柳 路

此の邊に居る標札ヘライタ點け
學良へ軍樂隊の音も淋し
ハルビンへ行つたそうです其れつ切り

橋本 綠 雨

花曇り二度目に會へば酔うてゐる
黒襟に昔の若さうしなはず

○ 姫田 夕 鐘

父と娘の重い空氣は添はされず
茶を濁すことのみ好む友さびし
待ちぼけの軽い嫉妬を持ち込まれ
寄り添うた娘の體臭を逃がすまじ
あるだけの首を延ばした春の龜
張學良の顔で易者の待ちあぐみ
ひつきりなしに酌いでくれるは俺の酒
靴の底むづかゆうなつて櫻咲く
恥かしい素足にさした春の川
見てとつて紹介たのむ姉藝妓
中 西 おさむ

酒のしみ舞妓は坐りやうをかえ
踊りませうと出られいささか弱るなり
主義者とは髭の生え方からちがひ
新聞を斷る文字はやけに書き
満員御禮禮を言はれてはじまらず
罐詰の蓋切らされて居候
生活へこんな鼻血を出してゐる

婦人國防デー

國防へ女メガホン持つ日なり

市場 食子

報酬に我勞力を見くびられ
これからが通夜ウドンが行渡り
評判の吝ン坊なり家主なり
人世をぼかし利潤を上げてゐる
人形のような親子でいたはられ
借りられる恐れがあるで泣いて置き
人妻となりても派出な身形りせん

西 村 明珠

米の値が上る米屋は靜かなり
食ふ事に事なかれ主義疲れたり
櫻咲く岡に淋しき下戸と子と
決心を鈍らす雨がふる様子
失望をしても男は煙草吸ふ
座敷には滑り臺置き育兒法
物尺の様な男に困りはて

大 西 八 步

人並と云ふは淋しき言葉なり
終點は賣地もあつて青い風

肉身と會ふ日の鬚をゆひかへる
辻一つ折れて心の變る春
ふだん着のさげすまれてるパーの畫

江戸みつる

大阪にて（四男）

五十錢渡して女と別れたり
考へますと女は強く返事する
初戀の女がやはり親切さ
待つ弱さ袂かんだりいぢつたり

滿洲旅行にて

別れ來し戀の痛手は宵寝する

石曾根民郎

三月も末か色めく沙汰はなし
でかめろん哀しい唇を見せに來た

蒼太兄へ

浮世繪に縋る自嘲を共にせむ
非常時に凝つた背中が痒くなり
色彩にすぐれし女事務の指

喜多春秋

讀んでゐて誰か來そうな畫の雨

たのしく桂馬が利いて居てくれる
笑うてはならぬ御主人様の戀
朝を寝てゐて大至急女給募集
豆炭を焚くこちとらのくらしなり

首藤竹楓

避雷針鋭く春にふれてゐる
主張せぬ男の膝は影になり
下女一人二人の市場水を撒き
笑ふだけ笑へ女はそんなもの

尼綠之助

匡救事業風景

儲けるは誰か利權がありはあり
パンクしたとこで雲雀をきかされる
頼まれてする投票と思つてゐ
心中のやうに母子がよく寝入り

石森靜太

更生の道は暗いな冷めたいな
商賣は女給だんがと子をあやし
まあ汽車が行きますわと二人
櫻ンぼ掌にころくと君思ふ

陳列に好みの品が有りは有り
岩垣日本村

僕の長女

操行が甲で云ふこと聞かぬなり
談笑の内にワクチン代拂ひ
植物も芽をふく俺も靴をはこ

村松夢裡

見違へて呉れてうれしい女連れ
横柄な人間味なり金が鳴り
うろたへてみたが五十の齢となり

生田翠夢

けだものゝ匂ひ女の枕から
感情へ紫煙が亂れ亂れ立ち

一畑薬師

眼病へこの石段はつらからう

宮岡白峯

ライオンに似てゐるモガの姿なる

長女の初誕生日

鯛の目と子の目と光る誕生日
歌舞伎座の時間がほしい二三入

妹尾變人

久しぶり呑めないなど言ふとれす

割り切れぬ敷に眼鏡をはづすなり
素晴らしい事が嫌ひと言ふでなし

廣江天痴人

救農土木工事

肥桶をかつぎ道幅たゝえ行く
草の根の白さもまつ晝間の春だ
凱旋の歩調に闘志残りをり

水谷鮎美

子の尿がにはふ阿彌陀さまのまへ
路傍の種が實をむすぶ氣樂さだ
夕べかなしき子の泣き聲は隣の子

熊谷紅

頬紅淋しくウエトレス三十二
丸火鉢もみ手を一人割り込ませ
灯の方をむいて盲も何か食べ

奥野禿山

コンパクト容器が浅い春の宵
心せば我れも埃の一分子

谷村稔

長男雅美病む

寝かしても抱いても泣く兒みんな起き
酒の香のこゝにも在つた足袋の裏

萬葉集買ひつばなしで春になり
春元紀太

學生の新就職

奉公に馴れたがキング讀み耽ける
荒井英賀夫

落ちて来る髪へ坊主になれと言ふ
一番の誇りは踏切り越すにさへ
松下小柳子

なまけてはならぬ身なれど四月の陽
春が來た女の前が長く見え
奈良井柳人

春淺く髪の毛の匂ひも娼婦たち
新開地生きる力の音がする
水田光哉

いきなり愛を示すもとこなる
八木美夜路

脊の君の名前に光る婦人會
平塚亂笑

翠夢氏を松江に迎へて

山陰のほこり嬉しい眼鏡ふき
岸上錦石

胸算の足りなきまゝで歸りつき

粒々集

―路郎撰―

松山 前田五健

女給税新設 (エヒメ懸)

税金のタシにはならぬコーヒ客
菜の花の向ふ眩しく子が隠れ
案内者脱帽させる聲を變へ
非常時 非常時 非常時 其の中のジャズ
逆へぬ車掌の弱さ花見時
先なんか考へず春の日に當り
御影 長崎柳秀
主義は主義金は多いがよいのなり
着飾つてゐても妾に寒い影
ルンペンに好きではなれぬ雪の夜
むつまじう親の金食ふ新世帯
人格はさうであろが食へぬなり



か

た言

阿部 閑生

疑問符

十年前と今日とを比べると、わが川柳も實に於て際立つた進歩を示し、量に於ては更に著しく増加してゐる事は慥かである。されば川柳に携はる我等はこの現状を謳歌すべきかと云ふに、卒直に答へて否である。進歩した句を示す人は極めて少數であつて、多數の追隨者は依然として舊態を脱せず、その多數と雖も、日本人の三分の一は句を詠むなど、威張る俳句に對して比較がとれず、議論や批判は随分微に入り細を穿つても、句を作る態度句を扱ふ態度が遙かに是に伴はず、現状を通觀して口と手との距離幾千尺なるを知らぬ忪みがある。

×

日本文學の固有財産である短歌俳句に就いて、古へと今と評價して何れが優れてゐるか、との愚問は如何にも愚問であるが爲めに明確なる賢答は得られないが、この問を川柳に應用して讀書好きの一友人に試みた所、奇答天外と云はうか、思ひきり簡單に片附けられて了つた「今時川柳でもあるまい」と。

そしてこの憐むべき答を笑殺した積りの笑ひが、何うした事か逆に質問者である自分を嘲笑する笑ひに變つてゐやうとは。

×

一、川柳の世界は何故にしかく狹隘なのか、二、大津繪や浮世繪のやうに川柳は一時期に於ける時代趣味の産物に過ぎないのか、三、古い傳統を遵守し過ぎるためか、四、或は川柳の本格から離反し去つた故か、五、指導の宜しきを缺くのか、六、作者が粗野に過ぐるのか、七、現代の句に冠するに川柳の名稱がそぐはないのか、八、川柳結社には何故秀才が集らないか、等、々、々。

×

眼脂なして打眺めたる川柳の行く手は盛か衰か、興か亡か、迷へる眼を靜かに誌上に落すと、變り榮えなき凡百の句の中に必ずや七句六句、或は三句四句、異光を放つ優秀な珠玉が見出されて、隨喜渴仰、讀ます誌の使命はこれにて盡き、讀む者のこころはこれにて足る。けれども再び全句を通讀するに及んで灰色の雲が青空を掩ふやうな濁つた感が湧くのは何うした故か

×

定型、非定型

感情の異常な躍動を現はすために、字音の制限に拘らず同語を重複して用ゐ、重厚味を加へるために五、七の音數を六、八と増し、亦時に期待外れの効果を擧げる目的で四、六とこれを

減じ、或は句調の安定せぬまゝを愛し、其の時の内容に應じて變化ある作句を試みることは、よしその結果一句の長さが二十音以上になつても十四音以下になつても、ある程度まで調が亂れても、それは吾人が日常句を作る範圍内のもので、所謂定型に即する特別の場合に外ならぬ。

×

こゝに謂ふ非定型句とは、從來の句が通有的にもつ一率の平凡さを嫌ひ、休止型では生きた句が作れないとし、常態の句では腕の振ひどころがないとし、ものゝ太初に立歸つて、自由なる感情を現はすに自由なる形式を採らうとする者である。

既に定型を非とする以上、感情の發露、想の構へ、表現様式など出發點から全然行き方を異にするもので、理論では竝立しても、實作では對立すべき性質のものであつて、同一人が定型句と非定型句とを同時に、亦是交互に作つて効果を擧げやうとすることは、不可能でない迄も至難な事である程、兩者の間には溝渠のあるものである。

この區分に用意を缺く點からも、微かに灰色の靄が湧き立つ

×

由來詩歌には夫々自らなる形式と制限があつて、限りなきものを限られたものゝ中で現はさうとする所に微妙な誇達があつたのである。近時自由詩亦是自由律なる名稱が盛に用ゐられるが、全くの自由は美文に外ならず、詩歌となれば必ず何程かの制限が伴ふものである。所謂自由律なるものが時に散文のばらばらなる觀を呈するのは自然の理とでも云へやう。

×

乍併一句の内容は表現によつて定まり、表現は作者の性格によつて異り、性格はもとより千差萬別であるから、舊來の型を破つて新しい型が完成するか乃至新しい型など成立しないと決

定する迄、非定型を標榜する筋の太い人達によつてがつちりとスクラムを組む一團の存在が別にあつてもいいと思ふ。そして兩者刺戟しあつてゆく事は過渡の道程を華美にする事と思ふがそれにしても一つは刺戟を受けるには大部分沈滞し過ぎてをり一つは刺戟どころか注意を惹くにさへ餘りに粗野であり、水澱めども未だ淵をなさず、風騒げども枝を鳴らさず、春日遅々として旦暮を辨ぜずと云つた現狀をどう揺り覺ますか。

×

短歌では非定型派は際立つて口語體を用ゐてをり、古い歌人も二三若返つて新人と轡を並べてゐるが、局外から見ても容易に斷言のできる事は、どんな形式を撰んでも結局拙い人は拙いといふ事である。

巧拙はこの場合別個の問題ではあらうが、川柳にあつても興亡の根底をなす問題は、形式の改廢ではなくて、素養ある作者の多いか少いかで決すると思ふ。型にはめても、自由に唸つても、うまい人は常に相當に巧く、拙い人はいつも相當に拙い。こゝを考へさせられる。

×

現狀と雖も川柳は必ずしも盛でないとはせぬ。機關誌は少きを憂ひず、各誌には優秀なる主宰者（選者）と幾百の投句者を擁して、形はまさに整備してゐる、たゞ川柳は富力でもなく權力でもなく、無論武力ではないから、優れた一人とこれが率ゐる多勢とだけでは勢力とはならない。率ゐられる各自の力を養ひ各自の力を發揮し、詞華燦然と咲き競ふのは何時の日か。

×

表現の技

吾人の日常生活は瞬間創作の連續であるが、これを藝術形式

に表現するには、技術と訓練を要する。

一句の内容は材料の撰擇よりも、表現の技能によつて定まるといふよりも内容は表現そのものであるから、修練を缺いた句に含蓄を求めるのは、雖に卵を強ゆるものであらう。

×

萬葉の短歌長歌もその盡くが名歌ではなく、芭蕉の俳句も七割は駄句と云つて差支へなからう。吾々は修練と習作に長い時を惜んでならない。修練中の大部分の句は葬つても、その中からほつりと自信の句を拾ひ得れば充分苦心に酬ゐられるであらう。疑惑の雲を吹き消して、ひたすら川柳にいそしむの道は、やはり古今の常道を歩むの外にはない。

×

粗野、荒削りの藝術は天禀の技巧であつて、技巧の省略ではない。たま／＼名工が斧鉞の痕を残さないのを見て、直ちに無技巧と喜んで輕卒な未成品を陳列したり、出發の初歩から大家氣取りで、例へば生れるなり親と大きさを競うて泳がうとし、三年たつても五年たつても耐にも耐にもなりやうのない目高の一群となつては、まづ救はれやうがない

×

道はおほみち、術はこみちの義、これに象つて句は大膽に細心に、型の自由を叫ぶ前に文字を自由に使へ、發表慾を刈り取つて創作慾を培へ。名前をかくした古川柳に凝り性の句を見、名前をむき出しにした現代に粗雑な句を見るのは、正直に考へて合點がまゐり兼ねる。

×

至人の虚にして鈍なるは、よく火に入つて焼けず水に入つて

溺れず、巧智、果敢のよくせざるところ、と云ふ事がある。川柳にもこれに似た味のある句を見出すことがある。鋭鋒を露出した句は案外鋭さが少い。

×

川柳は何處までも主觀描寫であるだけに、一步誤れば墮落期の俳句のやうな臭味を脱せぬことになる。安價なる主觀は警戒する必要がある、況して思想や主張を混入した主觀を以て句を成さうとするのは、理智で句を作るのと共に無理とせねばならぬ。

嘗て局外から川柳を見た場合、この主觀の暴露と理屈の混入が著しく目に立つた様に思ふ。

×

句修業の道場は云ふ迄もなく句會であり、句會の旺盛さは毎月の會報欄に現はれてゐる通りであるが、會場の興味を主とするためか、矢繼早な出題で極めて短時間に多數の作句をする、その方法は是非はさて置き、斯うして作句の習慣が養はれてゆくものとすれば、今にして一考する必要がある、川柳の傳統にしてみれば改革すべきものありとすれば、むつかしい議論の方面より、まづこの邊から手を下しては何うか、ものは全然異なるが碁や將棋で二十分一局主義の練習法を採つたら、一生やつてもその効果は知るべきのみである。

×

即興輕妙の句、捨てがたい句、一癖ある句、眞實の句、考へさす句から更に含蓄、妙諦の句へ。

奥行を深めれば、間口は随つて廣められて行く。

近代川柳進化過程の一考察

松 盛 琴 人

川柳は明治に復活して、大正時代に至る約半世紀間の苦闘を経て昭和時代には早くも一躍して、詩壇の最高位を占めんとする意氣を示した。従て昭和初期時代四五年間は、スビド的川柳進化と共に空前絶後の柳論時代であつた。然もさうした結果は、各派の分裂對峙を激成し、將に柳界を擧げて、群雄割據の狀態にまで押進めた、今茲にそれ等の狀態に視野を放ち、其歩み來れる過去を顧れば、限りなき興味と、參考資料を得ることに難くはない、されば僕の知る限りに於て、川柳詩の性能より説き起して之を詳かに検討してみやう。

川柳が限りなく進化發展する途上には、自然其内部に、分裂作用が行はれる、それは人體の細胞組織が分裂して發育する如く。川柳も内部の分裂を生ずるは必然にて、然も其分離し、形成されたる個は夫々の特徴に従ひ、其システムを異にする川柳を成長せしめんとする。之の特徴を今少しく詳かにすれば斯く生れ出でたる個の素質が他のものより優れてゐれば、其物には吸引力が旺盛である、個なる詩に魅力を發揮する力が強いと云ふのである、然もそれは互に吸引作用によつて、相寄らんする傾向を多分に持つ、此如き個が多數集合結成すれば、自然一詩壇を形成する、併し此集合体にも、やがては進化の爲めの分裂作用は生じる。他の劣等分子の過程も、同一經路を踏む、而して此如き集團が二個以上對立する處に、新派、舊派、漸進派等々の區別を生む。又如斯分裂の要因は、互に相容れられぬ思想の衝突であり、進化せんとする、自然の攝理でもある。

故に若し其集合體が、最も劣等分子のみで形成された場合は、之を流行病に譬へて見れば、悪性の病原菌保持者に等しく、従て其集

團は恰も、コレラ菌貯藏所の如きものとなる。川柳がバストや、コレラに罹つて、毒素を社會に撒布する、之に感染すれば、健全に發達すべき川柳も、忽ち流行病者の仲間入りするは必狀で、直ちに川柳進化向上は停止する。

以上川柳の個なる性能はさうであるが、茲には進んで分裂集合化されし、各派の特異性と對立の分布狀態に於ける、其動きを眺めることにする。

優れたる集合體は、其實優秀なるがゆへに、熾烈なる勢を以て既成川柳の殻を破つて、更に新らしき川柳を形成せんとする。又劣等分子の集合はいよゝ舊思想に捉はれ、因襲的固執性は、過去の殘骸に膠着して、墮落階梯へと急ぐ。其他天才的なるは、急激の進化を望みて、自己の才能にまかせて、社會の最尖端を歩み、他の詩壇をリードせんとする、慾望のもとに飛躍する。

如斯各々異なる道を辿れど、要するに自己保全を川柳道に確立せんとする努力に外ならず、又それが川柳の一進化を示し行く、現象でもある。

斯くて柳界の離合集散は、其實質の良否如何に不拘黨派的陣營を組成するに至る、それが益々廣大すれば遂に群雄割據時代が出現する。是ぞ集合體の行きつくべき性能で、動き其ものゝ實狀で、今一步進めば、全統一といふ野心に成るのであるが、其處迄はゆきつくせぬのである。

斯ふした、狀態を柳界の最も華かなりし時代の、昭和五年度に於て見るならば、例へば關東に久良伎派、劍花坊派、キヤリの〇丸氏一派、角戀坊氏の草詩派、其他飴ん坊、三太郎、雀郎、五萬石氏等

々、それ／＼自派の柳誌なり、グループを持ちて一黨を形成してある、又之を關西に見るなれば、彪大なる讀者と智識階級の愛讀者を有する川柳雜誌社、番衆社あり、たまむし吟社、三味線草、大大中等々、神戸にふあうすと、京に川柳衛、川柳京其他、地方的には東京川柳社、饒鋒東北川柳影像、北海に水原、かむる等々數へ来れば大連撫順と、海の彼方迄伸びて、枚舉に達なき有様、其如く地の利に據て各々覇を唱へ、主義主張を異にし、相譲らざる有様は、將に群雄割據の英雄時代と稱すべきで、從て柳誌の刊行も全國の大小併て實に七十餘種に達したのであつた。

昭和五年は川柳黄金時代であつた。併しそれ等柳壇の實質の如何は、其勢力の甚大と同時に川柳に影響する處も大にして、將來の川柳を墮落に導くか、より以上の進化を辿らしめるかの、岐路でありパロメーターとなる。然も最も恐るべきは、其實の粗惡と共に數の點である。現代に於て數の力の偉大さは、實に川柳の進化を左右する如きは、易々たるものである。茲に最も皮肉なるは、實質の粗なるもの程、量の力を多く所有する事であつた。

そは何故となれば、天才的才能ある者は、何時も先頭に立ちて、最新川柳を主張する故にいつも最少數派であつた。又漸進派なる中間派は、其思想堅實なる柳壇として、多分の優良分子を抱擁しれど數の點に於ては、矢張り保守派の大なるには到底及ばぬ。其如き保守派なるもの、實質は如何、頻りと過去の遺産に執着して、之の保護と揶揄と娛樂趣味に没頭し、初心者や自派圈内の病者として終ふ依て彪大なる數をいつも獲得するのである、此事實は何を物語るものか、賢明なる諸氏は、最早之以上記述する迄もなく、賢察せし事であらふ。依て之等の大体的考察は茲に打ち切りて、更に昭和初期の柳界を、保守派、中堅派、急進派、の三派に大別して、各派自ら主張する立前を具体的に述べ、其當時の色彩を明らかに、此紙上を借りて躍動させてみよう。

A、急進派の立前

先づ川柳の最尖端を標榜する急進派とは、一体どんなものか

彼の常に言ふ處を以つてすれば、過去の川柳即既成傳統川柳は皆陳腐にして、新時代に應ずる詩としては、餘りに舊套的で、現代川柳詩としての、詩的要素に乏しい、故に斯る過去の遺物の跋扈は、柳界の進歩發展を毒するのみにて、何等の益は無き存在である、故に彼等は速に其傳統性を清算せよ。我等は、傳統既成の二潮流を徹底的に排撃するものである。と所謂自派の急進的川柳を、尖端藝術、若くは、新詩派、新興派等々と銘打つて、其創作へと焦點を集注し、青年の血潮を漲らせて、保守派其他へ勇敢に反旗を押し、吾々こそ現代に於ける詩的價值優秀なる川柳を、創作する使命を與へられた、時代の先驅者也と自から許し揚言して、聊かにても過去の形態内容に臭味ある川柳は、最早斯る川柳は時代藝術にて、如何に現代に盛んなればとて、其生命は其時代の背景を持つ上に於てのみ有するので、此進化する新時代の背景の前には、何程の價値も見出されぬものである、要は同好者に極限された、標準價値、一般普遍的なものではない。故に吾人の柳壇上より之を見る時は、非常なるアナクロニズムであると言ふ。

其主張其如であれば、自派以外の川柳は傳統既成の二字を冠して、葬るかに清算を迫り、絶へず銳角度の筆法を以て、他派へ攻撃の征矢を放ちて挑戦した。從て其グループは少數孤立の狀態に置かれた、然も其主張は益々生硬に、詩論も作物も著しく、藝術至上主義の傾向を帯び、幾分の觀念遊戲へ走りし向も、見受けられるに至つた。

以上急進流の立前からの云ひ分によつて、其色彩は明瞭になつた筈、尙こうした新進を、柳界へ送り出した當時の社會狀態は、文壇に於てはマルキシズム旺盛の結果、プロ文學が勃興し圓本時代、大衆文藝時代より、ジャナリズムを生み、新感覺派

あり、アメリカニズムあり、ナンセンス、エロ、グロ、獵奇と果てしもなく、目まぐるしき迄の轉廻を、短時日の内に示した従て新派柳壇中に於ても、それ等が影響して、プロ川柳、左翼川柳、曝露川柳、新感覺派、神秘派、王道、中道、純藝術派等々生じて、川柳界は混戦状態を出現したので、事實當時は柳界多事なりの感を深からしめた。

B、保守派の立前

更に保守派の色彩を見るに、之等の派は謂所急進派から、傳統既成の二字を冠せられて、時代の進化に目覺めざる、因襲派なりと、常に有難からざる名を、眞向より浴びせかけられてゐる。茲に其派の色彩を全柳界より、キヤツチすれば、既成傳統と云はるゝ柳壇は、凡そ急進新進を除く、殆んど全部がそれであると、斷言しても差支ない程の、最大多數者であるが、併し其中には、種類系體の異なる、半左翼中間ともみなされる、數十派が介在するので、必ずしも其全部が、陳腐廢類取るに足らずと、近視眼す事は出来ない、今之等を詳細に亘り記述したいが、餘りにも多種多様に、反て煩雜となる惧れあれば、大體此内にて、最も時世に遅れたる保守的、因襲的、頑迷固牢の舊派を捉へ來りて、其色彩を検討し、謂所保守派の立前を明らかにする。

同じ柳界に覇を唱へてゐる柳壇にしても、舊思想に囚はれてゐるは、總てが保守的なれば、其集合體も、自然沈滯安逸主義遊戲的、享樂的に蟠居してゐる事は、止むを得ない。従て其作品は、柳樽の拙き模倣が乃至狂句式の、皮肉、滑稽、穿ち、駄洒落の類を、好んで作句し、常に遊戲と享樂の閑事を追求し、

安住者の群となつてゐる。

斯る柳壇なるが故に、川柳に對する主義とか、正しき主張とかは持たぬのである。併し自然の進化機構は、斯ふした集團内にも、多少新らしき傾向を生ましめる、なれ共舊派の信條として新を好まぬ、政に切角芽生へし川柳の新芽も用捨なく團體的重壓を加へて、之を摘み去り、いつの間にか人爲的迷路へと川柳を導く。則ち技巧に依て句を粉飾なす、工作者とする。彼等は之を川柳の進化なりと信じて居るが、實は自己が益々遊戲化へ墜落して、川柳をいよく、非詩的に導くものと悟らぬ。怖ろしきは迷妄である、併し低級なる享樂は無知者の好む處である、依て其柳壇は多くの安逸者の集合體と化す。

此如き不眞面目が、一時の氣粉れより成されしならば、やがて更生の望みあれど、夫が目的であり、念願であるに於ては、到底救ふ可からざる分子である、従て彼等は、川柳の研究や、理論を悉く嫌惡する、斯く研究心も詩的良心の何ものも持合はさぬ爲、斯らしき川柳詩に出會ひても、之を理解する能力がない、正しき認識無ければ、觀賞の明はない、故に夫等に對しては、殊更に難解句とか、川柳らしく無しの一言で、多くは其句に觸れざらんとする、然も他派より、非難追求に會へば、内心深く之を怨嗟すれど、外面に微笑を浮べて、何氣無き風を粧ひ恰も「此家只今留守」の札を張つて、逃避する事に於て甚だ巧妙を極めてゐる。斯る狡猾千萬なる狐狸に等しき所業も、彼等には通とか、と粹か、苦勞人の成す業と云ひて、飛んだ穿き違をして納まらんとしてゐる。彼等舊派には、川柳の理論も、川柳の進化も無いのである。

それは餘りにも極端なる見方なりと思はゞ、彼等舊派の自から

の云分を引例しやう。以下數行は保守派が、他派に對して投げ付けた、文章の一節を描寫したのである。曰く、「彼等の川柳は既に古人が云ひ古したものである」(斯く云へど反證は擧げてなし)。「武玉川の燒直しである、唐詩の翻譯の様だ、外國の詩の受賣の様だ、」何れも反證を擧げてなし)。「趣味に乏しい面白くなし、觀念遊戲だ、一人よがり、自己陶醉」等々。之等は新派の創作物に對してなされた、舊派の批判の一節であるが、多くは句に解剖のメスを振つてなされしものではなく、只だ漫然と口から出まかせの、惡口を吐いたに過ぎないことは、明らかに如上の數言で察せられる、又柳論の方面では、多く啞の如く、默殺主義であるが、偶々論をすれば、理論を戰はずには非ずして、大方口穢き惡罵か中傷的文字の羅列に過ぎぬのが常であつた。曰く、

「半可通なり、薄つペラ、理屈ばかり、近代の過激思想にカブレた言、青二才、若輩者、中學生の寢言、川柳を知らぬ奴だ、田舎者、古川柳を知らずに古川柳を排斥するは無知だからだ、鼻元思案、一知半解、川柳は川柳である、」

等々、凡そ色々の云ひ分理窟は、何にでも付けられるとは言へ、随分迷妄なる罵倒毒舌もあり、又部分的には多少聞く可き言も在るが、總じて正しき柳論には、少しも必要が無い文句が多く、甚だしきは、馬鹿野郎、間拔けの文字も散見する、以て其人格なるものも想像させられるのである、斯くて大方の論争は感情論に終始してゐる、之は根底の無き證左で、言はず自己の弱點を糊塗せんが爲めに、敢て虚勢を張り、鬼面人を脅すの類で、卑劣極る心理であると、疑はれても致方がないであらう。

以上は決して捏造文字ではない、舊派の色彩を検討しつゝある間に、突き當りたる不快の文字で、皆舊派の論文、句評中より拔萃せしもので、敢て恩怨の許に曲筆せしものではない事を斷つておく、併し文字の上とは異り實在の人物は、案外好人物、善人であるかも知れないが、今は作品と、書かれたる文字を透して、考究してゐるのであるから、舊派の結論はどうしても餘り香ばしくなさそうである。

舊派の川柳はそれでよいのであらう。敢て手を廣げ、或は川柳の向上進化を、企圖するなどの必要は無き程多數であるから従て多數は制すと云ふ、舊派の世界はそれで安泰ならしめてゐる。不安さへ無ければ、反省や考察を必要とせぬ、川柳が墮落しても、人間が享樂遊戲出來得るなら、それでよしなのである實に彼等の一部では言ふ、川柳は遊びなんだ、楽しみなのである、川柳で飯は喰へぬと云ふ事を知らぬから、新興派などは、理窟ばかり言ふのだ、吾等は理窟では、腹の飢しさは除かれぬ誰が川柳なんか買ひに来るものか。と之を聞いたお仲間「嗚呼至言なる哉吾等の御大」と。「働けどく我くらし樂にならざり」の現實相を目先にチラツカせて、迂攔り手を叩いて、傍觀者「川柳たら面白そやよつて、ワイもやつて見まはか……、と早速保守派は空餌差で雜魚一疋釣る、之も數の内である、其處に主義主張などの必要は斷じて要ら無い譯である。

遊戲的川柳派の云分でも、之に反感を持たず局外者として冷靜に、味ふ時、中々妙味ある眞諦に觸れた、言葉も折々飛び出して來るが、結極は進化を無視せんとする態度が、滅ぶる者の悲鳴としか聞くことの出來ぬは、甚だ遺憾であるが、どうにもならぬ事と、舊派は之にて筆を擱く事とする。(續)

近作标准

路

郎

倅せなうち娘をやりませう
手も足も入れてしまつた棺桶よ
恵れぬ男倉庫で髯を剃り
看護婦も櫻の花が好きと言ふ
ミレ一の繪僕も農夫の一人です
詩に唄に春は俵の輪が動く
落ちぶれて金齒いよく光るなり
廻り椅子降り出したので庭へ向き
號外の戻りの鈴のなまけやう
差し上げた子から離れる靴の泥
わが門へ乞食にほひを置いて行き
アパートに今日の彼氏は米を磨ぎ
ヨーヨーに髭のあたりが痒くなり
立見席ひがん戻りは珠數をさげ
そのゝちの彼女に厚司みおらされ

25

大
阪

5

選

同同同 沐同同同同大同同同同同同春

水

門

天

地六鐵

白髪を抜く

西田 艸 樂

川柳光頭會に招かれる僕だ、白髪が生えても不思議ではなからうが、まだ大丈夫、その心配には及ばないが、此の上白髪にでもなつては、川柳白頭會なんて集りが出現せまいまでもなく、その曉には兩方のメンバーにでも引入れられては、逆も廻り切れやうまい。白髪だけは當方眞つびら御免である。

處が人間の身體には、一日何力ロリ
の貴重な營養を攝らねばならないのに、
いらざる處に營養が消費されるもので、
三日目に爪を削らねばならず、髭を剃らね
ばならず、その上白髪の養ひまでとは誰
が心づくしで食をとるものか、だのに、
此の俺に斷りもなく、いつの間に二三
本が発見される。

併し僕の白毛はまだ正直者と云はうか
愚者と云はうか、生える場所に全く心を

弟熱河へ進撃

5

五池

大阪

大和

大阪

神戶

人

方

三

峯

米

養

—(15)—

人格の裏を女に握られる
今更の更生でない指の節
算盤を持てばそれてく戀心
咽喉くびを巻いて背廣の哀れなる
獨り言ふて愛人氣がまざれ
ブルなれやスキーに行くを見送られ
長屋での喧嘩は職をけなし合ひ
出世はしたが青春は遠く去り
戀に勝ち子まで儲けてすぐ死なれ
槌振上げた鍛冶屋の影が心うつ
涙もてつなぎ得ざりし戀となり
スリッパのぬく味もプロのものならず
木の芽みなひかりて朝の家並ぞや
自己を棄てゝ聴きゐたる木魚かな
おゝ彈力のある春風に土かへす
相續税どころか貰ひたい生活
就職を頼まれてたに計の報らせ
出征はまぬがれ齒車に嚙まれ
カーテンの向ふは何をしてるやら
ひよいと振り向けば従ふ者はなし
金があるから學校に行きました

長野

大阪

大阪

長野

島根

大阪

八幡

柳 同 同 無 同 同 春 同 同 有 同 同 羅 同 同 夜 同 同 十 同 同 同
兒 鬼 光 郎 門 王 八 七 八

同じ場所に次の後繼者が見參する己れ憎
いやつと抜かれる。又生へる。こんな争
ひを僕は茲二三年續けて來たが今に後續
の跡は絶へぬ様子で、まるで白毛の方が
ら擲擲はれてゐる形である。一番眼にか
ゝり易い溝の中に生へる白毛に何か惡戯
氣でもある様に、愚者は白毛の方でなく
年甲斐もなく此のいちぢつこを續ける
僕の方が愚者に見えて來たのである。併
しまだく僕は頑強に抵抗するつもりで
ある。

かう云ふと、僕はよほど見得坊か、色
氣の多い人間の様に思はれるかも知れぬ
が、

名を捨てゝ十七八の戀もせむ
路郎師と年なら六つ七つ若い僕だが、僕
にはそんな心境はない。何を隠さう、今
年の新年號の本誌で意地の悪い編輯者が
僕の歳をはつきり公表してしまつた事で
もあり、近頃光頭會の創立句會に招かれ
た一人であるから、恐らく川柳人仲間では
ボマードの光澤をいくら強く發輝して
も年は相當に見られてゐる譯だから、此
の上若く見せたくもない。

併し僕は正直な處、今年四十歳とは、
なんと取る年の足並の早いのに自分なが
ら一驚を喫してゐる位でもあるが、僕が
此四十年の地上生活で何をしたかと思ふ
時——いやそんな固苦しい事は他で言は

マダム今日寢巻で手紙書いてゐる
 銀行で粗品をもらう未亡人
 清算をするにわ惜しい良い女
 男一匹死んだらくれる二千圓
 すき焼でなく玉葱をたく匂ひ
 宿題へ母は六年まで行つた
 別荘の庭に藤椅子差向ひ
 散髪屋眠れる椅子をそと廻はし
 ソファに掛けた寫眞がお氣に入り
 酒を論じダンスを論じ無い同志
 接吻を避けて女の肩細し
 滿蒙の議論課長は無視せられ
 春愁を知れるヒトミの窓硝子
 吹雪する中に瓢箪山を下げ
 人情の極致の中に氷雨する
 世の中のことに閉いだ象の耳
 疲れてる顔だ俺もか粗朶が燃え
 正直をほめて短氣がきづと言ひ
 新婚の友へ
 若夫婦あなたとお前と仲がよし
 大阪へ着くとスキー邪魔になり

伊 豫 今 治 堺 大 阪 同 同 同 同 同

芳 岸 同 同 曉 同 同 同 同 一 同 同 九 同 同 新 同 同 勝 同 同 方 同 素 同
 柳 波 市 街 二 眠 月

う。兎も角、僕の妻はまだ湯上りに乳房の邊から白粉を塗らぬと承知が出来ないのだから、ほんの生へ際が少し上部に浸入しかけた位でも、そろ／＼前額部に電光を反射させたり、折角の太い黒い頭髮に銀線を交へたりしては、もつと／＼働いて貰はねばならぬ妻君に對して甚だ申譯がないから、白髪とも鬭争は飽く迄も續けねばならない。

トピックス

吉田 水車

一、路郎師と同姓の漫畫家麻生豐氏は「從來の漫畫は簡單な思ひつきとか駄洒落とか卑近な野趣などでも描くものゝ筆が冴へてゐるとグングンこなしつゝ、筆しかしこれからの漫畫は作家の睿智、感情、意思などの閃めきかビチビチ生洲から上げた魚のやうに畫面に刳ねてゐる」とが第一要素である云々」と朝日紙上で言はれてゐるが字の漫畫となつてゐた川柳に此言を當てはめて考へるのも無駄ではない、味ふべき事柄ではあるまいか。

二、お馴染の忠臣藏劇の内で寶井其角と大高子葉との兩國橋會見の場で其角、子葉のと交はす俳句は「年の瀬や水の流れも人の身も」協句「明日待たる、其寶船」でかなり有名？なものであるが、しかしこれは根もない戯作であると斷じ

戦争を喜ぶ八百屋伍勤なり

病床吟

しすかにゐればしすかに窓が呼吸する
死にたくはないかと春の鐘が鳴る
ひとり子を死なせて家主少し折れ
心にもない追従は喜ばれ
満腹の子の一言が眠むい事
妻の趣味ゆるすかぎりの金の事
また明日へ酒の力を借りる身の事
狡猾と言はれて人の運強く
匂ふばかりの高島田の壓迫
松を吹く風に無情と言ふひゞき
落第へ暗示のような花吹雪
コノワタに其後の君がなつかしい
没落を死んだ親父は知るまいぞ
共鳴を固めるように猪口をくれ
お別れの握手人生みつめたり
酒のめば今日も女給に圍はれる
苦勞して家出する子に育てあげ
カフェーで張ったお乳を何とせう
落籍された當座丸髷よく似合ひ

變ヶ池

大坂

神戸

大坂

變ヶ池

京都

變ヶ池

大坂

島根

變ヶ池

同

噴兒

同

菊路

同

吉左

同

四五

同

吞吸

同

竹雅

同

蛙念

同

あや

同

汀雨

同

世都象

てゐる俳史家の言を待つまでもなく興味
本位のものである、これがもし俳句の分
野に容れられるなら川柳よりも劣つてゐ
ると思ふ。

三、筆者は不幸にして「柳樽」の原本を
未だ手にしたことがないが複製を見るの
に極一部を除いては皆無記名である、こ
の夥しい句が無記でずらつと並らんだと
ころは如何様權威に缺けた觀がする、句
の内容はしばらく措き古俳句同様記名で
残されてゐたなら今少し第二義的效果が
あつたに違ひないと考へられる、何所の
誰が作つたのやら判らぬ餘りにも軽く扱
つた此句集は編輯者の責任にもある。古
池の句が芭蕉なるが故に意義ありとする
は失禮にして認識不足の言ではあるが
かりに其を許されるなら柳樽中にもそうし
たものが埋もれてゐるかも知れない。
四、剣道と柔道とは等しく武道である
ことに論はない、川柳も俳句も同じ短詩
即藝術である。甲と乙とが競ふのに甲は
剣道乙は柔道ではちががあくまいやは
り剣術は劍術同志柔術は其道同志がやつ
てこそ眞に斯道の意義があらう、武道に於
て兩者が立派に認められて居る如く短詩
界に於ても川柳、俳句と並び立つべくし
てしかも川柳は藝術にあらうとされるや
の觀あるは果して審判人の錯誤によるも
、か又は立合人の罪であるのか考へる要

悠くりとお飲みなさいと妻は風呂
世を一步先きんする氣をにくまれる
不義の富つゝむに白い塀ができ
戀なればせめてマスクを取つてほし
デパートのこんな所に判こはる
袖長く五月の處女にして
偉ら過ぎる人へ細い事言へず
父さんの居ました頃へ泣けて来る
盛り場へやはりボーンとなる鐘よ
薄情な眼鏡の奥を自覺せず
街五月近代色にさんざめき
やみ夜だねバイオリンがころがつてゐ
愛をしめすのに硝子の指輪とは悲し
蒼白い月をたどつて海へ出た
君の睫毛に赤い灯がつく春よ
食ふだけは持つて義理の固い事
鉢の梅不和の家庭と思はれず
新聞に父の事業が失敗し
豆腐屋は時雨るゝ中に待たされる
霜のこと道のこと父草鞋解く
未亡人扱ても美事な脂肪過多

岡山 堺 大阪 京都 大阪 松江 同 島根 三重 尼崎

同素同慈同い同波同荷同草同巷同鴉同迂同虚同
木 來 雨 を 樓 平 乃 二 天 均 白

がある。

或日の奉天

岩崎柳路

熱河討伐前の奉天は餘りにも兵隊さんが多かつた。錢湯の歸り私に、モシ／＼ダンスホールは何所でありませうか、はいあの向うに見える青い灯がブロードウェイと云ふホールです、有りがたう、モシ／＼遊廓へ行くのです、此の洋車夫に通譯して下さい。よろしい。と云ふ譯で戦線に出る數日前の奉天は兵隊の街であつた。奉天の錢湯では兵隊さんには無料であつて何所の風呂へ行つても芋を洗う様であつた。命令一下熱河へ進軍せばダンスホールも遊廓も風呂どころでは無い待期休養中の兵隊さんを思へば市民は皆相當便宜を計り喜んで居た。或夜私のアパートの外路で日本人らしい大聲で人を叱つて居る様子外へ飛び出て見ると中年の洋服男が四名の兵士にヒドク叱られて居る、事情を聞けば洋車錢を滿人に支拂す今此處で乗り逃げする所を餘りの不都合さになじられて居るのである私は洋服男に日本人であり乍ら君はよくない早く金を拂つてやり給へと口を入れたら其の男は洋車夫に白銅を抜げる様にして横町へ走つた兵隊さん等は曰く「日本人であり乍ら吾々犠牲をはらつて建設した新

臨時雇となりて

ひとり身の頃は人魚がすぎでした
本當に泣いた所は W G
同性を結んで逝くも女氣の
よい氣持になると女房は子を委し
秀才の死も新聞に出せたまで
遅刻した男が異議を申すなり
見送りも見送られるも女郎なり
泥濘を踏まして過ぎた好い女
待望の春へ巢立つた小倉服
寝不足な目で會葬の禮をのべ
出來合ひの粥をお客に所望され
疲れてる身体へ夜着の重すぎる
淋しさは獨り彼岸の鐘を聞き
生者必滅やつぱり人の死は哀し
ドライブの二人にスマレ摘みとられ
春夏秋冬かくて人間なりにけり
鉛筆をねぶつて請取申候
戦争は勝つた話にしてしまひ
參觀の市議はマスクをかけてくる
おんぶした子の難問に母あきれ
雪解けに地球のあらが見へて來る

松江 藤井 松江 大坂 同 愛媛 愛媛 泉南 愛媛 愛媛 大坂 大坂 愛媛 大坂 大坂 愛媛 愛媛 松江 松江 愛媛

同哲 同藍 同砂 北詩 黑天 一南 露鯉 巷巴 狂雨 松美 佐津 愚寵 政郎 春信 沙門 鹿奈 承春

傷して今鐵嶺の衛戍病院に居る便りが來たので同君の好きなロシヤ飴を送つたら傷が浅いからすぐ退院出來るとの知らせがあつた同君の全快を祈りつゝペンを置く。(旅行中の撫順宿にて記)

四月號偶感

葉光生

發行日の早かつたのを嬉しく思ひます表紙の裸婦は赤く刷つた方がよくはなかつただらうか。

天痴人氏琴夢氏等の支部便り式な文章もよいと思ひます。

裸人氏民郎氏のエロ文章もさりながら羅門氏の散文詩も感じがよいと思ひます琴人氏の作爲と言ふ事に就ては例句つきで嬉しいです。町二氏のむづかしい感じがします。句を味ふはもつと多くの句を語つて下さい。亂耽氏の文章は實に朗らかで嬉しいです。吉高氏の縁に就ては私はこのんで縁と書きたいです。誤字に就いても活字の正誤同様に寛大であつてほしいと淺學な自分は暴言でないまでも哀れで笑うてもらひたいと思つてゐます。鹿山氏の短文も懐かしく讀んでゐます。半文錢氏の千日前今昔史の終つた事を淋しく思ひます。僕の家のものはこれが大變嬉しがつてゐたからです。改めて新世界今昔史的なものを續いて書いて下



武玉川初篇研究

(三)

梅 本 秋 の 屋
森 子 東 魚 二

(321) その時を見事に武士の衣かへ

秋の屋 四月一日には、千代田城に登る武士一同、袷衣を着たのである。

東 魚 官服へ規定の通り夏か来る(映絲)が見當つた。全く同じイキである。

省 二 みごとであつたであらう。

(322) ちといたわつて返す羽衣

省 二 御姿を見たてまつれば、餘りに御痛はしく候程に、衣を返し申さうするにて候ふ——朝鮮にも羽衣傳説がある

秋の屋 いたはる處か、舞を所望したではないか。

東 魚 天人も一度人別帳に付き等々、えらいいたはり方をしたものだ。

(323) 夜伽の客のかた付て居

秋の屋 病人の夜伽をすると云つて、他より來た女客などは少しも手助をなさず、座敷の隅にかた附いてゐるものである。

東 魚 片附けて「か附いて」か何れだらう。「けて」でも同じ意味にとれる。自らを片づけてゐるの意味)

省 二 くだづいてと思ふ。「病人を笑はせるのは伽上手」(ケ二十二)には、なかくなれぬものだ。

(324) うそか溜て本堂かたつ

省 二 地獄極獄一手の説法お談義で、善男子善女人の財布をしぼり、壯嚴な本堂を建立。

秋の屋 元來、釋迦が嘔吐きの本家である。

(325) 我髪と思ふ時なき女かた

秋の屋 女形は平時に於ても、鬘下地といふ髷に結び、男鬘に結はぬから、自身の髪とは思はれないのである。

東 魚 面白い觀察をしたものだ。

省 二 〥 そして「疝氣をも癰にしておく女形」では、我身と思ふ時もないかもしれぬ。

(326) 四月八日は葬禮の花

省 二 〥 死ぬにも時期がある、酷暑酷寒などは喜ばれない。四月八日の葬式なら死花が咲いたも同様。極樂往生も請合ひか秋の屋 〥 釋迦の誕生の日に、葬禮を舉行されるのは、佛縁が深いので、死者の花とも云ふ可きだといふのであらう。

東 魚 〥 彼岸に死んでも佛縁が深いと云ふ。四月八日の葬式などは佛門歸依者の本懐である。

省 二 〥 誕生の喜と葬禮の悲を、いつしよに考へる事は、御幣擔ぎは嫌ふのもある。支那では夫れがために四月八日としたのだそうで、印度では十二月十五日即ち誕生も成道も成佛も同日なのである。印度流なれば四月八日の死は釋迦に愈々あかるわけだ。

(327) 蜀漆の虫に親の鶴亂

省 二 〥 臭木は根を常山、葉を蜀漆といふ。臭氣があるから名。株に宿る虫を蜀漆虫と稱し、六七月頃捕へて薬用とする小兒の疳の藥。「葑賣に常山木の虫をたのみけり」(紫堂)。尙ほ瘡を治し吐瀉病にも用ふ。霍亂とは胃腸カタル日射病式の病の總稱。丹波より出づるを最良とする。

秋の屋 〥 子の病を癒する爲に、蜀漆の虫を採りに行つて、親が霍亂したといふが、哀れでもあり可笑しくもある。

東 魚 〥 前説で盡されてゐる。

(328) 障子越引たい袖はかけほうし

省 二 〥 現代科學文明を以てしても、これ文だけは致方がない影法師は心をそゝるものではある。

秋の屋 〥 加藤左衛門繁氏は、妻妾の影法師をみて入道した。戀も無常も己の看やうである。

東 魚 〥 ても、肝のいれる事であらう。

(329) 時雨する出雲の空は表向

秋の屋 〥 時雨はひそくと降るものだが、毎年十月、八百萬の神が集まる出雲では、甚賑かに降るとでも云ふの歟。

東 魚 〥 神々の集ふ出雲は、流石に異例でなく、時雨月に時雨がふる即ち表向きと、それを云つたのであらう。

省 二 〥 時雨月の句「朔日をわざと曇て時雨月」(ム八)。「朔日はまた割膝の時雨にて」(ム八)。「二日目に雨だれを見る神無月」(ム四)。

(330) 松ケ岡男をしらぬ唐からし

省 二 〥 金砂子下に「尼寺の石灯籠へ唐からし」があり、尼寺(松ケ岡)と唐辛子は關係がありそうだ。が……

秋の屋 〥 男性のやうな老尼でも食ふの歟。正解を下し兼ねる東 魚 〥 男を知つた女が逃込むでくる松ケ岡、そこにも男を知らぬもとよりの尼僧が居る、それに唐辛子を配したのであらう。はつきり喰つてゐると云ふ場合でもあるまい。又「唐がらし」にも比すべしとはつきり云つたのでもなく、ばんやり「唐からし」を配して餘情を連想に訴へやうと云ふ手段ではないか

(331) 舟岡を戻る薪屋も五十年

秋の屋 〥 七月十六日京都舟岡山に點する、舟形の火の焚木を五十年間、一つ薪屋から納入すると云ふので、「五十年」は只永い歲月といふ意であらう。

東 魚 〥 生靈を送る意味で焚く火であるから、「五十年」は永い歲月と云ふ外に、「人生五十年」にひかけた趣向であらう。(何れはこの薪屋自身も送り火を焚かれる仲間に入らねばなら

ぬといふ心持を匂はして)

省二 人生五十年を意味してゐよう。船の送火も大文字の火同様、薪に就ては多くの者が預つてゐたといふ。

(332) 不斷櫻は観音の伊達

省二 不斷櫻は謡曲にもある。伊勢白子観音境内の櫻樹、「不斷櫻境内にありて、年中常盤に花を開く、日本の一奇樹なり。歌人文人佳作多し。平城の都の時、稱徳天皇禁庭に召されしに、一夜に枯れぬ。帝御製をそへてかへし植させたまひしかば、枝葉又生茂りもとの如く成りしとぞ」(伊勢参宮名所圖會卷三)武玉川十五篇来る春も不斷くらは常の貌

秋の屋 賣物には花を飾れといふ俗諺がある故、白子の観音も、不斷櫻を伊達にするのであらう。

東 魚 伊達は自慢にし得る言はば、看板ものといふ意味合ひである。

(333) 迄と云ふ心の反りの不奉公

秋の屋 主人が何か無理でもいへば、直に暇をとる迄だ、と云ふので「心のそり」は、心が真直でないといふ義であらう。

東 魚 反りは反抗的な嬌慢な心持を云つたのであらう。巧み云ひ廻したと感心する。

省二 就職難の現代ではあるが、こんな心持の者が、甚だ多い。

(334) あみ笠の赤く成時おもひ知

秋の屋 親に勘當されて放浪する息子、冬編笠が赤く色附くと、漸くに山海の恩が想ひ知られる。

東 魚 あみ笠の赤くなると云ふのを捉へた處が、機智的で面白く思はれる。

省二 放浪の旅は深い教訓になる―此句に列ぶべきものが

後出する。

(335) 買水をうついやなやつ哉

東 魚 飲用に賣りに来る清水を、見てくれがしに撒水にする。見得張りな所謂いきすぎな奴ではある。

秋の屋 ブルデョアの奢侈を、罵倒したのであらうが「いやなやつ哉」は、少し面白くない。

省二 然り、餘りにも苦しい表現、稚拙だ。

(336) 鬼門の方のふとん折込

東 魚 敷布團の一隅恐らく裾の一隅が恰も鬼門に當るので鬼門へ出張らぬ様に其一隅を一寸折込むで置くと云ふので、多分泊り客に對する家人の心遣ひであらう。

秋の屋 昔、斯る迷信が有つたの歟。文献に徴すべきものはないやうである。

省二 一老婆から、そんな事もした様であると聞き、前解の如きを鯁鉾誌に書いた事はあるが、未だ確心は得られない

(337) 六月のつめたい物に損はなし

東 魚 暑中は何でも冷たいものに限る冷たいものなら何でも御座れ結構だと云ふ意

秋の屋 洗鱸、水貝、沖鯔、奴豆腐等々、一酌の好下物は尠からずある。

省二 冷たいものでないと咽に通らぬ。

(338) 道心者我と覺ておとこ山

省二 悟入して佛道に歸せし者の心境であらう。古今集の今こそあれ我も昔は男山を踏むでゐるかの心地がする。

東 魚 よく句意が呑込めぬ。「おぼえて」さとして「何れであらう。多分前者の方で、昔は自分も天晴男一足押しも押され

もせなんだが、今は浮世をよそに道に入つた者だといふ意であらうか。

秋の屋Ⅱ「さつて」で差支へないと私は思ふ。

(339) 反かへるのを見るやうに鐘の聲

省 Ⅱ 鐘聲が遠くへ消えてゆく、自ら心も澄み、撞木をひいて反返つてゐる鐘樓守の姿が頭に浮ぶ。反返るのが呼吸もので、そを詠むだ句が後出する。

東 魚Ⅱ 巧い事をいふものだと思ふ

秋の屋Ⅱ 前出の四手網の反かへるよりも、此句の方が立勝つてゐる。

(340) 不破の大功の一生の恥

東 魚Ⅱ 不破の關といつて板屋洩る月とか、何とか、鬼に角破損した場合のみを歌にも詠まれてゐる。不破の文字に對しても、關係した大功の耻ではないかといふ諧謔的の句ではないかと思ふ。

秋の屋Ⅱ 關屋の破損は時の爲で、大功の恥などといふのは不當である。

省 Ⅱ 飛彈の匠をはめた句をみた後だから、此大功さんに一層同情する。「呵られそうな不破の屋根ふき」(金上)

(341) 雪折も千鳥も枕してのもの

東 魚Ⅱ 雪折れの音、千鳥の鳴音、何れも冬の夜半の目覺めに、適はしいものであるとの意であらう。

秋の屋Ⅱ 夫れで歌にもなり、又句にもなる。

省 Ⅱ 枕してのものは巧みだ。

(342) 正直な方かやつる飛鳥川

省 Ⅱ 飛鳥川の淵瀬は常に替る。人の心も移り易いものだ

やつれる方に正直性が多いわけ。

東 魚Ⅱ 不真面目なものに、失戀自殺などはない。

秋の屋Ⅱ 和歌に詠まれる、變約戀であつて、一人物案じをしてやつれるのだが、失戀自殺などといふ野夫な事は、昔の人は爲ぬやうであつた。

(343) かいどりに隠れて居たる不孝者

省 Ⅱ 搔取は襦袢の事、花魁は用ゐた。不孝者に相異ない。(助六は此句のような所作をして、間夫待遇をされてゐる)

東 魚Ⅱ さりとは又冥加な奴でもある

秋の屋Ⅱ 助六が聯想されるが、彼は本名曾我五郎で、不孝者と云へぬのである。

(344) 齒の抜た子の屋根を見て居

省 Ⅱ 小兒退齒、上齧者置床下、下齧者抛屋上、云使齒速生、但し鬼の齒と替れと、呪ひいふは強よからむことを願ふなり。(鼠の齒にかはれといふ地方もある)。

東 魚Ⅱ いらぬ事だが、私は上齒は雨落に捨てられた記憶がある。

秋の屋Ⅱ 私の幼年時代にも、斯る事をしたのであるが、上齒は縁の下にも、又軒下にも捨てたのである

(345) 黒雲の晴る筑波は有の儘

省 Ⅱ 晴るれば男女兩峰峰の雄大な姿を現示する「快晴さ筑波の麓都鳥」などは、その快晴を物語るもの。

東 魚Ⅱ 筑波と日光ときたら雷鳴の本場である。夕立晴に一時見えなくなつた筑波が又現れる。遮るものなき野の中に兀として現はれる光景

秋の屋Ⅱ 信州邊の群山は、夕立雨が過ぎて後も、猶麓には雲が残つてゐるが、常州の筑波は平野にあるので、夕立が一過した

後は、全然赤裸の雄姿を現はすのである。

(346) あふない道て熊野節買

省 二 紀州熊野産の經節は有名だ、日本山海名産圖會にも堅魚は土佐、阿波、紀州等を擧げ、殊に鎌倉、熊野多くと云つて居る。土地柄關西方面に供給した。なまりぶし熊野の奥で見らるる(金下)。

東 魚 熊野参りの往復の險阻には、經節の用意も賢い事である。

秋の屋 旅行の用意ではなく、家苞にするとして買ふのである。

(347) 帳屋の笹に二度雲か降

省 二 「其中に帳屋の門トは竹の奉(ケニ二) 東 魚 「青々と竹に帳屋の奉霞(ケニ三)

省 二 繪本御伽品鏡に帳屋見世の繪あり、大福帳を賣つて居る店頭に笹がたてである。大福帳讀て見たれば文字數の三つありとても帳の帳なり」と添えてある。

秋の屋 御説明に由つて句意判明した。

(348) 唐から渡る繻子も空解

東 魚 繻子の帶の空解などは一寸味な情趣があるものだがあの野暮らしいパア／＼の唐からくる繻子でも矢張さうした味があるといふ洒落氣分であらう。

秋の屋 唐繻子は上等品で、一端に如源の文字が織出してあるのは、特等品であるが、現今では其文字が有つても、模造品ばかりである。

省 二 唐織物の珍重された事は、西鶴の好色本で判かる。

(349) 五月雨袂の下に付木の火

東 魚 ほかから附木へうつした火、しめり勝ちな風にと

られようとする火を袂でかばう——五月雨頃のうなづかれる風情である。

秋の屋 「袂の下に」の下が、少し判然せぬ。風を防ぐのならば、袂の蔭にであらう。

省 二 「蔭に」の場合を、下に」と用ゐたのである。

(350) 寝起に分て光る金屏

省 二 寝起には一寸眼の錯覺もあつて、分けて光るであらう。殊に特種の寝起の場合は一層。

東 魚 新夫婦の晴がましさといふ心持と考へられる。

秋の屋 金屏風は平素使用せぬ様であるから、結婚の當夜であらう。

(351) けむい所へ這入袖笠

省 二 此句丈けでは場合が少し判然とせぬ。袖笠は袖をかざして笠の代りにする。袖笠雨の語もある如く、雨雪の折りに多くは用ゐられる。デ、煙にむせるので、袖笠をし顔を覆うてはいつたのである。

東 魚 薪の煙の時雨れ時分の趣きが想像される。

秋の屋 野中などで夕立雨に遭ひ、袖笠をして駈込む一軒屋では、蚊遣火を焚いて煙が立昇つてゐるので、時雨としては煙が利かぬと思ふ。

(352) 豆腐にむかひ是からの智恵

省 二 豆腐といへば、あの單純な品物で、豆腐百珍などと稱し、色々な調理法もある。「料理好豆腐さるさへ奇麗なり」(ケ世二)。本當の智恵は豆腐の如きものに對してであるかもしれない。

東 魚 茶氣満々とした愉快な句だ。是からの智恵はうまい秋の屋 作者が智恵の働を賞す可きである。

僕

山 本 三 巴

○僕ひとりの考へを述べて見たい、朗かに笑へることの次第に尠なくなつて行く今、やつぱり川柳でも作つてせめてこいつとしんみり楽しむ時間でも有たぬこと

には衛生にわるいと思つてことしの春から返り新參として始めたが昔惚れた女にも一度惚れ直したやうな味はあつて呉れた。よくも川柳に歸つたえ、ことしたと今悦んでる。

○併し返り新參は常分返り新參だけのことしかやれないことに氣がついて思はず昂然として頭の下るのをどうすることも出来ないのに僕は嬉しく思つてならな

明だ。川柳は益々その力を世に示すだらうことに一切の懸念を要しない。川柳萬歳樂だ。

○川柳家として一番悪い態度は人をなめることは是れだ。今僕は斯うした考へを持つてゐる是を句にする、句に現す方法は無論僕の最善と信ずる手段でやつてやろ併し是がみなに判つて貰へるかどうだ。

他人のことは知らぬ僕としては茲で屹度自惚れが出る、笑ふな斯うなんだ。僕程恐らく進んだ考へ、そして明朗で元氣で尖鋭で剛健で、現代の川柳家として必須の條件を備えた僕が斯んなに苦しんで作つても、果して句意を汲んで呉れるかどうかを危ぶむことなんだ。僕だけの話だ人のことは知らぬ。

○そして折角の走りのやうなピン／＼した奴を一點でも取らな損だ、後になつて

は詰らない、斯うした物欲しい乞食根性から醜い妥協を取つてして低級の句にしてしまふ事がかなりあつたのだ。單的に云へば職人(昔の)根性から商人(今の)根性に賢そうな顔して骨折つて墮落したのだ○それが川柳として活かされた時、始め嬉しいがそれは瞬時に夢散、變つて襲ふもの悔恨と苛酷の鐵鞭だ、後になつた時ホツと救はれる。だがこんなことを経験しない君らに誓ふ、僕斷然此の態度はやめた。下を見ないことにする、上ばかりにらんでやるんだ。

○現代は僕らの上に最も鋭い目を放たねばならない時なんだ。非常時かそうでないかは知らぬ、併しみな非常時／＼と云ふから非常時だと云ふのも確に一つの見方なんだらう。

○非常時には非常時川柳を要すること空腹に飯の必要なが如しだ、君らみな非常時川柳を作れ 僕今君らに示すべき恰好の非常時川柳の持合せがない止むなく舊作(小康時代)一句で諸君へのお辭儀のかり代りしたい。

目に見えぬ天 一 ばい の 磁石

武玉川輪講補説

森 東 魚

湯舟の煙黒い六月

此の句の解に私が、湯舟を浴槽の意味に取つたのは全く誤であつた。矢張り蛭子氏の述べられた舟の湯と解すべきである。それは俳諧體に次の如き例句を見出したので考へ直した結果である。

朝の時雨に湯舟呼び 舟

湯舟一艘 朝の堅川

江戸の自慢の舟で浴る湯

枯葦の中に舟湯の火影見ゆ

これ等を見ると、湯舟と稱して、水上生活者の爲の、云はゞ移動風呂があつたのであらうと想像される。又夏などは納涼を旁々舟の湯を浴びたものもあつたのかも知れない。で、頭書の句は、六月の炎天に黒々と湯舟が煙をあげてゐると云ふ光景を詠んだものと解すべきであると思はれる。

安弔の蓮の あけぼの

此の句は私の所蔵本に依つて、「安い望の蓮のあけぼの」であるらしい事を申述べたが、最近手に入れた原本は甚版の奇麗なもので、明かに、「安弔」となつてゐる。尙花岡百樹氏も其御藏書によつて調べて下さつた處が、矢張り、「安弔」と「ヒ」があるさうであるから、「安弔」に間違ひはない。私の舊藏書のは昔の持主が、「安イ」と「イ」を書入れたものであるらしい、その爲大變迷はされたのと思へば、罪な記入をしたものである。

松脂匂ふ 清見寺前

此の句は秋の屋翁の教示で、藤の丸膏藥をよんだ事が分つたのであつたが、其後俳諧體から左の句を得た補記して置く。

膏藥も うす霞せし 清見寺

膏藥も 氏は母なん 藤の丸

(昭和八、四、一〇)

飛 燕 往 來

私信のごときから公開を望むやうなことは、前略、中略、下略、又は××の伏せ字にしました。御詠水を乞へ。

中島 鐵洲 (鳥取)

私の趣味、川柳とも一つの玩具創作に貴君が關心を持つて居て下さると云ふ事は全く嬉しい事です。

スクラップ有難御座います。

農藝藝術とローカルカラーの點は、私も餘程以前から唱へて居る處です。

正月から川柳を休んで、商工展出品に精進しました。去る十日の發表で漸く三等を得ました。

挽物にのみ求めたるボン／＼入十種

1 兎、2 ヒエロ、3 鷺、4 熊、5 狸、6 河豚、7 雪達摩、8 鶏、9 梟、10 兎守

一本の鋼管より形成された電燈具

外電燈具、玩具では11 因伯種中、12、13、14、糸巻應用の變り雖で何れも入選しました。

昨夜祝賀會も半官半民でやつてくれまして、いゝ氣になりました。

そろ／＼川柳も初めます、何分にも二兎は追えません。

五月申頃は上阪したいと思ひます、今度はお目にかかりたいものと念じて居る次第です。

社の方にも新進が揃ひまして、何により的事と存じます。(山崎規矩)

中澤濁水 君 (高知)

昨年の今明日はいろ／＼御世話様でした。入浴、住吉踊、茶白山、次から次へつきぬ思出にぼんやりしてゐます。皆様よろしく。四月三日報 (藤南野)



騷

川柳味とは何ぞを讀みて

音

安 西 杏 三

松丘町二氏が現代に於ける有數な作家であると共に卓絶せる柳論家である事は今更私の喩々を要しない處であります。氏の柳論は議論のための議論でなく、川柳を創作される指針であると共に又一方氏の創作過程に於ける様々な経験が柳論を編み出す原動力となつて居るのでありますから、氏に採つては其の柳論と句作とは糾へる繩のやうなものであつて其の何れをも缺く事の出来ないものである處に鬼に金棒と云つたやうな強味があると思ひます。

殊に氏が本誌三月號に於て「定型非定型」を論ぜられ、四月號に於て、川柳味並に川柳に對する定義を與へられました事は同じ川柳の道を進む私共に採りまして喜びに堪えない次第であります。實に川柳に對する定義こそは、斯道に携はるものに對つて、アルファでありオメガであります。川柳と云ふものに對して興味を聊さかでも覺えた人の先づ發する問ひは「川柳とは何ぞや」である、又長年作句に精進して居る人々の頭の中に絶えず往來して惱ますものも又この「川柳とは何ぞや」であります。而し一應も二應も心得て居て、口で定義を下す事が出来るやうであつて、さて此を口にし筆にする事の困難さを嘆かない者がありませうか。大抵の人々は「川柳とはまアこんなものだ」と云ふ「まア」附きで落付いて居るのではないでせうか。然

るに今町二氏が敢然として之に定義を下された事は畢竟同氏の川柳に對する熱情と誠實さの並大抵でない事を示すものとして深く敬意を拂ふ次第であります。

扨て氏は川柳味とは「滑稽、皮肉、穿ち」であるとし、續いて川柳とは「一口に表白せられたる滑稽、皮肉、穿ちである」と定義されて居ります。此の定義は從來種々な人々に依つて様々に下されて居る何れよりも簡明であり妥當でもあるやうに思はれます。此の一應は首肯出来る定義も一歩深く考へた時に種々な疑問が生じて參ります。今私の頭に浮ぶまゝの疑問を述べて同氏並に大方各位の御教示を得たいと思ひます。

最初に氏は「一口に表白された」と定義されて居りますが、此れは多くの人々に採つては餘り漠然としすぎる様に思はれるでせうが、既に非定型をも定型同様に認める同氏の立場から云へば別段差支のない當然の事でありませう。この「一口に」と云はれた處に長詩ではない短詩としての川柳の特長を表はされたものだと思ふのであります。

併し「一口に表白されたる滑稽、皮肉、穿ち」であれば川柳だと云ふ事が出来るか何うか？例へば

「犬も歩けば棒に當る」
此れは確かに「一口に表白せられた滑稽であり、皮肉であり

又穿ちでもありますが誰も之を川柳だとは斷言しないでせう。勿論氏は「表白」と云ふ文字の中に「詩的表現」なる意味を含めて居られるのでせうが此の儘では不完全たるを免れないでせう。

次に氏は川柳味として「滑稽、皮肉、穿ち」の三つの要素を擧げて居られますが、川柳味は此の三要素に限られて居るか何うか？もつと重要な要素がありはしないか？此れは大きな疑問であると思ひますが、此の點については何れ後から詳しく考へる事として、先づ第一に考へなければならぬのは、從來川柳を野卑なもの、和歌や俳句等の短詩より下等なものだ、と云ふ觀念を大多數の人々に抱かせた重なる原因が此の「川柳とは滑稽、皮肉、穿ち」であると云ふ觀念であります。

處が此所に面白い事には、川柳をして野卑なもの、下等なものと誤解せしめた、此の觀念が一部川柳家に採つて、此の上もない有難い金城鐵壁であると思はれて居る事であります。彼等は之の三要素あるが爲め川柳は他の短詩より獨特なものであり勝れたものであると自惚れ又思ひ上つて、遂には野郎尊大に構えて他を白眼視し、お前達田舎者に川柳が解るかい、等と云ふ自稱江戸つ子迄出て来るやうな有様で、彼岸が如何に川柳道の向上發展を阻害してゐるかは思ひ半ばに過ぎるものがあります。氏は此の定義を下す前に「川柳の革新を志す人々も、それ／＼の觀點を守つて其の角度から滑稽、皮肉、穿ちの精神で物を眺めて居るのに過ぎないのだ」と云つて居られますが果してさうでありませうか。私は從來の川柳に飽足らなく感じ何等かの意味で革新運動を起した人々は此の「滑稽、皮肉、穿ち」の三要素に新しい生命を吹き込もうとするより以上に、此等の要素を無視して自由に生命の躍動、魂の叫びを表現する事に努力されたのではないかと思ひます。今この事を論證しやうとするならば中々大變でありますが、少くとも我が川柳雜誌の内でも最

も進んで居る一群の作家の一人である町二氏の創作を見ます時に、評論家町二氏の定義された川柳味即ち「滑稽、皮肉、穿ち」の範疇に入れる事の出来ない句が多く、而も之等の句が作家町二氏をして柳界に重からしめて居る事を思ふ時に、微笑を禁じ能はずです。此の事が私の強辯でない證據に、町二氏の最近の俳調から氏の所謂川柳味を持たない句を列べて見る事も無駄ではないでせう。

冬の抒情詩のボブラやボブラ 町二

冬の火事へ並んで立ちし妻句ふ 同

ふところで泳ぐ二匹のさかなよ 同

波は吸盤を持ち音もなく吹雪吸ふ 同

波被を追ひ波波を追ひ裸の漁夫ら 同

石榴の花しきりにゆるゝ眼の疲れ 同

或る皮肉な毛唐が「世の中の進むに従つて神々も進歩する」と云つたそうですが或る觀方からすれば確かに神も進歩しつゝあるののでせうから、ましてや文化の所産である川柳が、其の進歩に従つて進展して行くのは當然な事でありませう。もしさうだとするならば「川柳味とは等々々々」と其の要素を列擧して定義する事は假令各要素の觀念に開展があるにしても更に重大なる革新は新たな要素を加へる事に依つて遂行せらるゝ事の多いのを思ひます時其れ自體危険な事ではないでせうか。

扱以上の通り町二氏の川柳並に川柳味に對する卑見を述べて見ましたが、然らば君の川柳に對する定義は何うかと聞かれる方に對しては、いや此處では單に町二氏の定義に對する疑問を述べた丈だと一應は逃げて見ましたものゝ、それでは餘り卑怯だと思ひますので説明は一切抜きにして私の定義なるものを下して見ますれば

川柳とは「生命の躍動、魂の叫びを川柳のリズムに依つて表現したる短詩である。」



十七音字檢討

住田 亂 耽

我々は花を見て喜ぶ。——花の性質によるのではない。その形と色とに喜びを感じるのである。これは卒直な事實である。

私は謙遜しながらいふ——存在とは形式である。——形式を離れて凡てのものは存在し得ない。花の形なくして花なく、パイプの形なくしてパイプなく、人間の形式なくして人間は存在し得ない。——軍艦の形式なくして軍艦は存在し得ない。——形式を與へるといふ事は存在を與へるといふ事である——（中河與一著形式主義藝術論より）

私は劈頭斯様な文章を引張つて來て、その論法を借つて先づ叫ぶ。川柳の形なくして、川柳は存在しない。と。然らば川柳の形とは如何と詰め寄られるならば、私は普通十七音の短詩形を以てそれだと答へる。

こんな風に書き出してゆく私は、賢明なる讀者諸君から「何んだつまらねえ。いまごろかびの生えた形式主義のお題目なんか耳がたこになつてゐらあ」と眞向から卷舌で默殺される事を充分承知しながら、私の信ずる所を信ずるが儘に、私の頭のブラダが發火不良とならない限り、私は持前の饒舌的なペンを進

めて行くであらう。

川柳は觀念傳達の手段として、我々日本人のみのもつ特殊文學であり、それと同時に十七音字の文字の羅列と構成とによる一つの藝術である。そして川柳が與へる感覺、表象あるひは心理的反應が我々の精神に及ぼす一種のリズムを私は川柳味と呼ぶ。

川柳味と川柳の形式とは切り離しては考へられない。即ち川柳の形式を通してのみ、川柳味を感じるといふのである。こゝに素材がある。作家はそれに形式や附與する。こゝに始めて内容なるものが、この素材と形式とを通して第三者に放散する。斯の如き経過を持つたものに對して、それが川柳の形式を與へられるものに對して、それから川柳味を感じるのである。今假りに川柳全體論としての川柳味を、穿ち・皮肉・滑稽と大ざつばに定めたとする。

柳樽の味は、十七音字が放散するこの三つの心に觸れる琴線である事を許容しても、近代の川柳のもつ川柳味は、この簡單な言葉では説明し得ないものを持つてゐる。成程川柳は、穿ち

説明・滑稽を主眼としてはゐるけれども、時にはその濃淡と交ぜのヴェールを被り、あるひはこの三つを別れた妻の如き感じで、冷やかに之を見ながら、その時代々々の複雑な社會感情をもつて、わがダンディな川柳は登場する。

かくの如き川柳味を、素材の内容（この場合の内容は、素材と形式とより放散する内容ではなく、自ら判然たる區別をもつてゐる）が持つてゐたとしても、作者がそれに緊密なる川柳形式を與へなければ、その作者の先に意圖した如きものは、それから感ぜられない事は當然の事である。結局作者のひとりよがりを感じるのみである。

こゝで私は一寸瞑目する。そして私の頭の中のどこかに残つてゐる諸先輩の句を思ひ出す事にする。

光明の中に浸つて餅をやき	路 郎
大阪に住む嬉しきの繪看板	水 府
辭職して何をか言はん植木鉢	五 葉
運轉手君赤靴もよごれたれ	山雨樓
てれくさく父の妾の子を葬り	かほる

私は之等の句から、溢るゝばかりの川柳味を感じる。十七音字の形式が私を動かす。

それと同時に、この形式が與へる感覺、表象あるひは心理的反應が私の精神に一つのリズムを及ぼす。かくして私は之等の句を川柳だと考へる。形式を通じてのみ、内容を感じ、素材の方向をも知り、作者の意圖を知る事が出来るのである。

重ねて言ふ。素材は如何に川柳的なものを取扱つても、之に

附與するに緊密なる形式を以てせねば、その句に川柳としての存在を要求する事は無理である。緊密なる形式といふ語を使つた。素材を川柳として生かすに最も効果的な形式を云つたのである。そして古人は我々に十七音字といふ無難なるよき形式を遺して呉れてゐる。然しあながち十七音字形式でなくともいふ俗に破調といふ。然し破調勿論、緊密なる形式をとつてゐれば結構である。破調は往々川柳の墮落を意味する場合が多い。惧しきドグマに陥る場合が多い。十七音字への周到なる検討を怠つての破調は、墮落である。

破調は特殊の場合、特殊の偉才にのみ許され、之を濫用する事は結局川柳をコンヒュージョンに導く以外の何物でもないのだ。

ある人は、言葉の時に伸ばしたり、縮めたりして、歪めて十七音字にまとめる事は悪いといふ意味の事をいつてゐる。この意味はよくわかつてゐる。十七音字に捉はれる事は悪いとの謂である。この悪い事は勿論私も認めるに吝かでない。然し翻つて私は考へる。

我々が川柳を作る場合、極言すれば何時でも言葉を歪めてゐる。ある角度から見れば十七音字なる形式は歪んだ形式であるときへ思つてゐる。この言葉は誤解を生み易い性質を多分にもつてゐる。はつきり念をおしておく、之は決してこの形式が悪い事を言つてゐない事は、今迄私が述べて來た所によつても充分わかつて貰へる事を私は知つてゐる。

で歪めて十七音字にするといふ事、伸ばしたり、縮めたりし

てむりに十七音字にするといふ事は悪いに違ひないが、その人の言ふ如く、伸ばしたり、縮めたりせず、無理に歪めないで、その人の氣持通りにのび／＼と句を作つたとして、たとへその作者がいかに効果的な形式を附與したと考へてゐても、川柳の形式として正しき眼で見た時に、多くの場合形式的、破滅を來してゐる事が多いのを怖れなければならぬ。句全體が歪んだものとなつてゐる事を、作者のひとりよがりとなつてゐる事を怖れねばならぬ。

十七音字川柳は決して窮屈でない。十七音字といふ制約されたものに、最も効果的な言葉を盛らうとする事こそ尊いのである。

音律の上から見ても、文字の構成から考へても、十七音字なるものゝ正體は却々複雑である。私は寧ろこの形式の強力さにおどろく。

ごの汽車も冒袋を運んで來たよ 愚 陀
奇才縦横に酌婦の社會觀 亂 耽
問ひ直せごも院長の悲觀說 二 南
箸紙を父おちついて書いてやる 路 耶
うるこもうへら／＼と沈むなり 山 雨 樓

夫々皆同じく十七音字であり乍ら、違つた音律を持つてゐる以て十七音字の正體の複雑さの一斑を知つて貰へば良い。

十七音字にせねばならぬといふ氣持は、排せねばならぬ。然し十七音字にするといふ氣持は尊い。この二つの氣持は自ら違ふ。即ち前者は、捉はれる事を意味し、後者は尊重する事を意

味する。

凡ての素材を新らしく生かす爲には、その素材に、現代の形式を附與しきへすればいい。

川柳に於て、現代の形式とは、十七音字破壊を決して意味しない。十七音字の中に於て新らしき現代を匂はせばいい。前掲の句の何れを見ても、現代が匂つてゐる事は否定出来ないであらう。之を古句と較べる時、同じく十七音字の中に、時代の動き、時代の差をまざる／＼と見る事が出來やう。かくして川柳は十七音字の牙城に據つて永久に、その時代々々に鋭き社會批判の鋒先を向けて行くであらう。私は此の川柳のよき成長を樂しむ。

こんな事を考へながら、いゝ氣持になつてゐる私を乗せて疾走するタクシ一のエンジンがこの時くすん／＼と止つてしまつた。運轉手君にきくとプラグがくすぶつてゐるのですといふ。之をきいた私の貧弱な頭のエンジンのプラグも急に發火不良となつてしまつた。こゝで筆を擱く所以である。

川柳 東區々人句會

日時 五月十四日午後七時
會場 實業會館 中集會室
兼題 「町内」二句 路耶選
會費 二十錢

幹事 生田翠夢

大阪市東區粉川町一六

肱・枕・艸・紙 (五)

梅 本 塵 山

(四十五)

文字鎖、一名尻取文句といふものが、慶應三年より四年に亘り、江戸市中の大流行をなし、兒童等はこれを口々に歌ひたり。此れは「牡丹に唐獅子竹に虎、云々」といふ文句の有るものにて、其文句を合せて繪を描き、紫繪具を以て一枚摺にして賣出したるが、愈々流行を極むるより、亦新に文句を作りて出版したり。予は其文句を悉く暗誦しむるが、六十餘年を経たる今日にては、全部をよく記憶せず。前版の方は世に知る人多けれど後版の方は知る人少ければ、忘れたる文句は〇〇にて填め、茲にそれを記すなり「津輕合邦外の濱、濱の真砂は石川や川北問屋は木綿店、棚機短冊貧燈籠、雪論より證據の出た時は、常盤の操は雪の松、松井源水獨樂廻し、廻し合羽に三度笠、葛西金町半田の稻荷、稻祭の太鼓の音、鼠を踏はへた縁の下、縁の下には斧九太夫、〇〇〇坊やはい子だねんねしな、信濃の國の善光寺、

當時はやりの羽左衛門、門訴をするのは宗五郎、吳紹は羅紗の筒つほう、鰯鮎にかながしら、〇〇〇、内に亭主は浦里を、佐藤忠信源氏車、車で走るのは唐の船、船は稻荷丸船頭衆は狐、狐忠信大明神、明神様は將門で、門出を祝ふ酒肴、高輪牛町十日町、町々巡る獅子の曲、曲亭馬琴の八大傳、傳法院は浅草で、草薙小僧は牛の上、〇〇〇川崎權ちやん河原崎、さきくはやる尻取文句」

此文句の中の、川北問屋は、堀留にて有名の木綿問屋、松井源水は獨樂を廻して人を集め、齒磨粉を賣りたる野郎、半田稻荷は正一位半田稻荷大明神と染出したる轡を擔ぎ、數人一團となりて、葛西金町半田の稻荷、痘瘡も輕いな、錢輕いな、と歌ひて、市中を踊りながら錢を乞ひたる者。羽左衛門は十三世市村羽左衛門にて、後の五世菊五郎、吳紹に羅紗の筒つほうは、吳紹亦是羅紗にて、西洋館に擬して作りたる筒袖羽織。山崎權

ちやんは、河原崎權十郎にて、後の九世市川團十郎なり。

(四十六)

童謡も、明治維新前後に、創作されたもの多く、孰れも時事を題材となしたり。「宮さん」の如きは、今も人の知る所なるが、會津征伐の時に、左の如き童謡が流行したり。

「往きにや官軍還りにや佛、とても會津にやかなやせぬ」。

「一夜どまりのでんでんでんに惚れて翌は〇〇〇〇の泣き別れ」。

當時の東京市人は、なほ幕府の舊恩を忘れかねて、會津藩を褒め、官軍を貶しめたる也。「でんでんでん」は軍樂隊の太鼓の音にて、當時はこれを歩兵の渾名とされたり。

(四十七)

慶應の冬、江戸市中の諸所に、神佛の守札、小さき木像金佛などの、天より降るといふ噂あり。駒込團子坂下町の番太郎の宅に、三尊の彌陀の木像が降りしと

て、それを拜みに来る者多く、甚難沓したるをすも看たり。其頃、或る人が某町の陶器店にて、小瓶を一個買求め肩に懸けて歸る途中に於て、過ちて其瓶を地上に落したるを、往來の人が見て戯れに、

天より降りたりと叫びしより、其處へ多數の人が群集して、その破片を拾ひ行きたりといふ笑話あり。

(四十八)

市中を呼賣する行商は、今日よりも昔の方多かりし也。其多くの行商の中にも初夏の頃來る、苗賣ほど美聲なる者は無かりし。昔の欄賣は美聲なりしと云へども、予は一回も其聲を聴かず、其姿を看す、江戸の末期には、欄賣は來らずなりしもの歟。

(四十九)

紙幣といふものは、我邦に於て古より發行されたるが江戸時代には、諸藩より銀札と稱するものが、甚多く發行されたれども、其藩内のみ通用して、江戶市中には通用せざりし也。明治元年、始めて明治政府より二種紙幣發行され、一を太政官札、一を民部省と稱したるが、

當時の人々は、紙幣は金銀の硬貨よりもその價值少きものなりとて、物品の賣買取引にも、紙幣を以てするを嫌ひたれど後には携帶に便利なりとて、汎く通用するに到れり。此紙幣は、厚き日本紙に、



後、粗惡の天保錢のみ通用したる事ありしが、此錢は薩摩藩に於て多數鑄造して軍資に充てたるもの也と、當時の人は噂したり

(五十)

東京第一繁華の地と稱せらるゝ銀座街と、明治初年に、新政府に於て、煉瓦造の家屋を新築して、此れに市民を住居せしめたれど、商人の住むものは甚尠くして、多くは興行物の小屋となり、現今の淺草公園の如き、遊覽地と變りて、晝間は稍賑ひたるも、夜間は燈火の光も疎にて、甚寂かりし故、下町の賣春婦は此時を俟ちて、柳の蔭暗き邊に佇み、頻りに行人の袖を曳きたり。これをひつぱりとも白首なども稱して遽に銀座街頭の、一名物となりたるが、此ひつぱりと稱する賣春婦は、江戸時代の夜鷹に等しく、横丁の明地亦是路地に於て、賣春行爲を敢てしたるもの也といふ。今日にては、洋装の白鬼面鬼が跳梁

するものゝ如し。

(五十二)

江戸時代に有名なりし料理店は、明治

以後、漸次に廢業して、現存するものは甚稀なり。今日にては廣大なる座敷を造りて、一時に多數の客を迎へるを旨となし、肝心の料理に少しも注意せず、食通を喜ばせる料理は、却つて市内に散在する、小料理店に多く有る也。鰻屋も有名なるは尠くなりたり。而して市内に多くある小鰻屋にては、養魚場にて飼養せるものを用ひる故に、蒲焼としても臭氣ありて、その味美ならず。

(五十二)

新年の松飾は、昔も今も大なる變化なけれど、今の東京市に看る如く、丈高き

葉附の竹を、戸毎に立る事は無かりし。

近頃の市中の新年の光景は宛然、竹林を望むが如し。江戸時代の新吉原遊廓の松飾は、他と大に異り、仲之町の兩側の家

(五十三)

昔の新年の禮者は、正月二日より出た者にて、中流以上の町人は、社袴を着けて、脇差をさしたるが、年玉の品物を入れたる行李などを、新しき風呂敷に包みたるを、頸に懸けたる小僧と革羽織を着て、挾箱を擔ぎたる處の者を従へたり予も八歳の時より父の代理として、禮者に出でしが、扮装は前に記せるが如し予の家の年玉の品物は、上等半紙一帖、中等鼠半切三十枚、下等附木五把なりしが、他家の年玉もこれと大同小異なり、其中に萬歳扇として、粗製の扇に鶴龜、松



々にて、道路の中央に吾が家の方に向けて、松飾をしたる故、自然に背中合せとなるより、世に背中合ひの松飾と稱したる也。

竹梅、蛭子大黒などの版畫に、丹青を施したるも有たり。此頃この萬歳扇は絶えて無し

(五十四)

慶應二年の九月、江戸市中の諸所に、貧窮人騒ぎといふ事有りし。此れは米價騰貴せるに由り、細民等が寺院の境内などに集合して、富商に米錢の施與を強請なし、それを聴かざる時は、忽に住宅を破壊し、或は家人に暴行したるもの也。谷中の天王寺と三崎町の予の舊宅の眞向にありし、新幡隨院法住寺の境内にも、多勢の細民集合して、大釜を持來りて焚出しをなし、茶飯を塵紙に包みて、其れを一同に分配し、示威運動を開始したるに由り、予の父が近隣の地主等を説き、各自應分の寄附をなさしめて漸く事無きを得たるが、僅か二日ばかりにて、細民は一同解散したり、中里介山の小説「大菩薩峠」の中に、此騒動を貧窮組と稱せし如く書かれたれども、當時斯る名稱などは無く、只貧窮人騒動とのみ稱したる也

(五十五)

小学校といふものゝ無かりし、江戸時代に於ては、手習師匠一名寺子屋といふものが、兒童教育の唯一機關なりし也。

寺子屋に入學する時には、肴代と稱して

若干の束修を納れ、先入の弟子一同に土産と稱して、煎餅菓子之類を贈るを例となしたり。授業料は年五回にて、五節供の日に支拂ふ規定なり。其外、新年の書初、年末の大浚、夏は疊替料、冬は木炭代等の出費あり、亦毎月二十五日に天神講と稱して、錢若干文を納めしむ。新年の書始には、兒童一同に赤飯を饗され、年末の大浚には賞品として、紙筆の類を與へられたり、此大浚といふは、一年唯一回の試験にて、當日師匠の手許に手本を差出し置き、暗記にて文字を書き認め而して審査を受ける也。寺子屋は習字を旨とすれど、兒童の請求に由り、讀書をも教授したるが、實語經、童子教等の如き、低級の書なりし。亦、珠算をも教授したり。明治初年に、寺子屋の授業料は一回金一朱、書初、大浚、疊替料、木炭代等も、これと同額なりしが、兒童の身分に應じて、此金額よりも多く納むる者も有りし也。就學する兒童の年齢は、七八歳より十六七歳までなるが、これより

以上の者も稀に有りたり。

(五十六)

昔の江戸市の各商は、點燈の頃より、一齊に表戸を鎖したるが、偶々買物に來る客の有る時は、店頭の臆病窓と稱する小き窓口に、賣買取引をなしたり。晝間は股賑の商業地域も、夜間は燈火の光も無く、全く暗黒なりし故、往來する者は、皆悉く提灯を携帯せり。此れは、「伊勢屋稻荷に犬の糞」といふ俗諺の有る如く、無數の野犬が街頭を徘徊なし、到る處に糞の堆を成すゆゑに、提灯を必要としたる也。晝間には上野淺草の廣小路其外往來の繁き所に、露店を出す者有りとれど、今日の如く多くは有らざりし。神社佛閣の祭禮縁日の外には、夜間に露店を出す者は無かりし也。茲に最可笑しきは、古本の露天にて、路傍に數枚の筵を敷き、それに諸子百家の經書を羅列なし、其間には必ず〇畫猥本類を開展して人の目を惹きたる事なり。予が幼年の頃母に伴はれて外出する時、古本の露店が有ると、其前を駆走にて通行したる也。

光耀抄

葎乃選

篠山富士子

編棒へ玩具に飽いた手を延ばし
誕生の目方を親へ書き送り
おとなしい坊やは紙を食べてゐる
ウエトレスその腫の蔭に五人生く
今うつす寫眞へみんなしてあやし
ダイヤなどはめて故郷の土を踏み
春の日をあやしつゝ行く乳母車
五年目はみな母と云ふなりで會ひ
ホネームン高野の井戸の水鏡
結ひ立ての髪へ悋氣の手が伸びる
胡麻鹽は悋氣もされず淋しがり
雛祭り彼の山を越へて國の母
オモチヤ箱誰方が來ても出して見せ
キユービーさん一時間後にヘコンヌ
姦しさ物干臺に續くなり

大阪茂代

大阪美和子

燃ゆる春神のみ愛を知りにけり
櫻から子等の笑ひの聲高き

大阪一羊

キング喫茶室一週年
葎乃女史の勞苦を想ひて

春雨を恨んで歸へる紙芝居

堺道子

一坪の庭の草ひく閑があり

駄菓子屋に母の附添ふ一人つ子
元結の金銀の屑しまはれる

大阪公子

氣兼ねて開ける硝子戸さしむなり
サイレンが鳴るよ君等の正午なり

口笛の其の頃の友の寫眞帖
借りに來たと四月の空の色

大阪愛子

幸福の二人ベンチの春の日よ
笑はせて命を繋ぐ萬歳師

大阪美津女

錢湯に青空嬉し土曜の日
幸福にめぐまれないとすねて晝

新女性強く相手をはねつける
兄の結婚を祝して

大阪機見女

よろこびのくさりまばゆくもみゆ
時計とめて支配をされぬ夜を笑む

合評

省二 水車路 丹一 山雨樓

キヤリ四月號より

▼二人で酔へば女も足袋を脱ぎ

壽山

省二——壽山君に關しては、川柳家外の二三の友人から噂を聞いて居る。君は花柳界吟専門、ご迄も一本調子な事は珍らしい。従て流石に巧みな作も拜見するが、近時のものは以前より見劣りがするかの如くして淋しい五句發表された内の一作である。「二人」と數へたてゝしまつては、「女」を指摘する説明になり、且更に環境が描かれて居らぬ。「差向ふ」「四疊半」とでもしなくては情趣が出ない。女が足袋を脱ぐのは、かなり内容をもつ表現であるが、「四疊半」としても、遂に常套墮して寧ろ嫌や味も覺える。何んとか工夫がして歎しい。

水車——第三者の立場からスケッチ的に

見たものであるか、或は四疊半に女と對座する彼氏が作者自身であるかに大いに迷つたのです。

一杉——主人公は作者自身と女だ。

山雨樓——この二人は、勿論さうであらう

水車——一面エロティックな匂ひが巧みに扱はれて綺麗な句になつてゐるが、状景が莫然としてゐる。

山雨樓——環境は寧ろ分りすぎぬ。必ずしも「差向ひ」或は「四疊半」でなくとも、免に角女と二人で呑んでゐると言ふ事は明らかだ。たゞ女も足袋を脱ぎ」が一つの着想であつて、情味は勿論浮き出てゐる。

だが、さう言ふ見方では所謂花柳吟のマンネリズムの域を脱してゐない。實感とか生活とかを抜きにして「足袋」「差向ひ」「四疊半」等々の課題で樂に作れる句である。自分と言ふものが何處にも顔を出してゐない。所謂拵へて出来る句だ——と云ふ見方が出来るので、着點そのものに自分は不満を覺えてゐる。

丹路——この句に表現された作者の感覺には、少くとも私達若い者は何の魅力も感じられないと思ふ。内容もさうないしたものでもあるまい。たゞこの句の「足袋をぬぎ」と云ふ川柳的着點がものを言つてゐるのだ。

一杉——しかし、人生の淋しさをしつとり

と感じてゐる程の年輩の「二人」と思ふ時眞實の人間味が、句にあらはれた情景の中ににじみ出てゐませんか。けれど作者はそこまで意圖してゐないかも知れません。

山雨樓——其れは句がもたらす聯想と云ふ事はある。事件を物語つてゐる句であれば、一層その聯想をたくましくし得るであらうが、さう云ふ聯想は一つの陶酔であつて眞に句がもつ藝術味の發動ではないと思ふ。

川柳家は川柳を多作する事に依つて、種々の材料や句語を待ち合はしてゐる。それで句を觀賞する場合でもさう云ふ頭が敏感に働いて、その句が表現するもの以上に買ひ被る事が少くない。「女も足袋を脱ぎ」と云ふ着點は軽い穿ちの範圍を出てゐないと思ふ。尙作者が「きやり」に五句とも花柳吟をものしてゐると云ふ事は、眞に川柳を自分の生活感情から生み出してゐるのではない事を立證してゐて、その態度に賛同し得ない。假令花柳界に交渉の多い者であつても、眞に自分の川柳に忠實な者であれば、もつと深い人生味を捉へて貰ひたいものだ。

水車——作者獨りの陶酔だ。讀者にはさう感興がない。

山雨樓——つまり樂に作りすぎられてゐるのですれ。

ねこ柳誌より

▼鐵瓶を撫づるぬくさに寒は明け

久流美

省二——四十を越さぬと氣づかぬ句では
ないかと思ふ。寒さを覺えて鐵瓶を撫でる。

然し茶人は尤も嫌ふ。鐵瓶を好むものは、決
して手で撫でるような事はしない。鐵は驕氣
を思ひからだ。以て撫でる人も想像が出来、
自ら環境も浮ぶ。

山雨樓——省二氏の評は、作者久流美氏が
理解された結果、さう云ふ詮案された見方が
出来たのでありませうが、——と言つて當つ
てゐないとは言ひませぬが「撫づるぬくさに
寒は明け」と云ふ表現に微溫的な低調さを免
れないと思ふ。感覺的にもう一つあきたらぬ
ものを感じる。

丹路——この心境にして高調とか感覺と
かを求めるのは無理だと思ひますが、——そ
れとも「撫づるぬくさに寒は明け」と云ふ敘
法に微溫的に低調さがあると云はれるので
すか。でしだら——

山雨樓——敘法の點が微溫的だと思ふが、
結局川柳を孕むべき内容が十分つかまれて
いない結果ではなからうか。これは餘談です
が、一体僕は生活と川柳を考へる時我々がも
のする川柳素材としての生活の一斷層は極
めて稀な場合に限られてゐるのではないか
と思ふ。川柳として何處までもその藝術味を

詠へやうと云ふ生活感情は、そう頻繁に湧く
ものでない。最も選擇された場合に限るのだ
と思ふ。それを川柳家は、大抵の場合が川柳に
なる様に過信してゐるのではなからうか。と
言つても川柳味そのものが限られてゐると
云ふ意味では無くて、或る素材を捉える場合
平凡な脱し低調に救ふために、川柳の感受性
を極度に選擇し充分に洗練してかゝる必要
のある事を思ふのである。この句の場合「寒
は明け」と言ふ迷惘、冥想は、我々の生活感情
として眞實なものには違ひないが、川柳とし
て載くのは一片の挨拶を聞く程にしか感
じられない。川柳として切迫する感度が弱い
それを低調だと思つたのです。

水車——深みのある句ではないでせうが、
老巧ですれ、四十過ぎて感ずる靜かな心境だ
寧ろ調子は俳句的で舊派に層する。而も川柳
でなければ出ない味もあります。

一杉——省二氏の評に戻りますが「撫づる
」は直接手で撫づる場合のみと限りますまい
鐵瓶の上につけられたぬれふきんで撫づる
場合もありませう。敘法の點で「ぬくさ」と
「寒」と並べられた處がくどい様に思ひます。

山雨樓——この句は感覺を基調として生
れた句であらうと思ひますが、「寒は明け」と
無難作に結ばれたことによつて、鐵瓶に對し
て覺える愛着と觸感が作者の生活から游離

した寧ろ俳句の季感的な聯想に追やられて
行くやうである。

本誌三月號より

▼抜毛をてのひらにのせてひとりばち

羅門

省二——三月號近作柳樓中で一番氣にい
つたのであつた。夜中目醒め讀むだ直ぐ認め
たのも、處が私はぬけ毛でなく「毛ぬき」と
信じきつてゐた。「ぬけ毛」では餘りに詠み古
され寂しさを誘ふに當套材料ではないか。私
は

毛抜をてのひらにのせ獨ほツち
と替えてみる。何を抜いたか、その事柄よ
りも「獨ほツちで毛抜を使つた後の感情は何
にかを見極めようとして見極め得ない佻し
さに襲はれてくる。毛抜のもつグロ味が、そ
の感情を崩壊しそうである處にも、一層孤獨
であるとの氣分がつきまとひ、こちれた寂寥
感が自ら頭をさすや學に上せて、みつめて
居るうちに運命的な内省も起らう。「獨ほツ
ち」の強い言葉が吾等に返らせるものもあ
る——「ひとりばち」では悲觀的に終る——
川柳塔に

日を吸つたので日が匂ふ子の頬べつた

町二

でも「子の頬」では情熱がない、「頬ツベた
であつて卒直な朗明な映寫が、自然的に色
を美化してくる。町二君の作は良い。日

本に生れて目を吸ふ子の幸を祝福せざるを得ない。

水車——句境は我々がよく体験するし、從つて誰でもが詠ひ、また詠ひたる境地です。勿論ひとりは「留守居の意味でなく孤獨の意でせう」羅門氏としてはおとなしい句だ。

一杉——昔「夜の机男の拔毛 見せろなり」と詠つた頃の句境に似てゐるなあと、思つて拜見しました。拔毛はさう言ひ古されてゐますか。

丹路——僕は羅門氏の「秋は秋は煙をつなぐ青空や」「悲しき批判のくされたる酒よ」等々に表れたすぐれたセンチメントを愛好してゐるんですが、この句はたゞのセンチメントにとゞまつてはゐやしませんか。てのひらにのせた拔毛を凝視して、孤獨な人さ、孤獨な自己を深く考へ込んでゐる作者の姿が見えないではありませんが、そこまで想像を逞しくすることは、この表現を以てしては弱すぎはしませんか。若い處に東洋流の諦觀を感じるのですが、羅門氏にそれを望みたくありません。

一杉——鐵瓶の句よりは深みがありますよ。

一同——同感

山雨樓——省二氏の評で、毛抜とするのと拔毛とするのでは大いに句境が相違する毛抜きであれば毛を抜く爲めの道具で、それをしてのひらにのせた寂寥感は何れも味はあつても得休の知れぬ川柳になる。且つ作者は青

年であると思ふが、毛抜きを使用する場合は餘り無いであらう。原句の如く「拔毛」でこそ寂寥感がよくうかゞはれるし、味のある句になつてゐる。しかし非定型に賛同し得ない僕は原句が破調の形式をとつてゐる點に、且つ作者が破調を好んでものする點に、多大の不満を抱く。破調の句は詩としてリズムの點から見た時に、荒削りな素材そのまゝ露出されたやうな肌ざらひを感じて。只この句は全体の字音数が十七になつてゐるので、その點は幾分救はれてゐるし「掌に拔毛をのせてひとりとほち」と定型に嵌め込んだのとは自ら響きが違ふ。「ひとりとほち」と獨ぼち」は省二氏の云はれるやうな語感の差異を認めませぬ。

本誌三月號より

▼住めば都の雀よぐれて

雅 幽

省二——大阪の新聞に、大阪の雀は毒煙のため黒いとなつた。(滿洲の雀は黒い、寒い時季が長いと石炭が安いので、ごこの家庭でも用ふるから、その煙のために、)作者は大阪のお方だと思ふ、違ふかも知れぬが、大阪の事柄を詠むだとすると、大阪は立派な都なのだから、

鳥も通はぬ山なれど住めば都よ我里よ

松の葉

で諺が適確にこゝで大阪の雀ではなくて、田舎の雀として土の中にもぐれたりして、雀が面白そうに遊んで居るのは見受けられ、それなのだから、武玉川風の句だ。もう少し浸透

力が欲しい、情趣の融合が欲しい。
一杉——省二氏の言だが、「住めば都一を殊更用ひて効果が出てゐる。やはり大阪の雀でせうね。

山雨樓、水車——同感

水車——かほろさんの「大阪は轢かれかけてもよい所」の句と併せて考へて對照の妙を感じて。前者は横の一斷面、本句は縦の一斷面であるとも言へる。「住めば都は必ずしも諺言に結び付けたものとは思へない、つまり居年にして美衣飽食と思ひ込んで來る都(大阪を指すもの)では無邪氣な雀でさへあんなによれて居る。しかも住めば都ではあると言ふ處世苦と都官への愛着をうたつたものであつて、句主の色彩がハッキリうかゞへる。

山雨樓——古い諺に拘泥して觀賞する必要があると思ふ。と云ふのは「住めば都」と云ふ諺をその儘用ひてゐるからである。諺がもつ意味を言外に含ませて句を面白く仕立てると云ふ事はよく用ひられる手法ではあるが、餘程表現が巧みでないといふと、この事はかつて路郎師も述べられたし、この句は諺を巧みに使ひこなしに取つて付けたやうな難がない。都の雀がよれてゐると云ふ發見は、省二氏の言はれたやうに或ひは大阪の雀でない様にとれるかも知れぬが、それは觀念的な見方で、その觀念を突破して現實を捉へ大阪に住み乍ら黒ずんだ雀を見つけた處に煤煙都市の憂鬱を物語つてゐるのではないか。句に餘韻がある。

丹路——之は近代都市が生む膨大な小市

民曆、群小雀のかなしき自畫像だ。この句と同時に二南氏の「風よそんなに押してくれな」の句が浮ぶ。中年作家のや、沈靜した自嘲がかつた社會觀照と、青年作家の、未だ敏感な神經に觸れる時代の流れに、對する苦悶と。

山雨樓——一脈の哀愁味が漂つてゐる句

本誌四月號川柳塔より

▼稼ぐ指のよごれをなめてしまふなり

民郎

省二——稼人自らは氣つかないのかも知れぬが、多分に生活意識が織込まれてゐると思ふ。些事として見逃せぬ味ある作だ。

一杉——私達忙しいと言つてもそれは誇張して言つてゐるんで、手を洗ふ餘裕は事實あるこの句を讀むと恥しい氣がします。意味深い句です。

水車——感じの句だ。生活苦と言ふか、汗と脂をぬぐふ間もなくまた明日への行進に疲れた精神を呼びたてればならない。その境地をもした手腕に敬服する。一種凄慘にして莊重味ある中七に對して、下五は餘りに軽い様と思ふ。併し之は一つのあきらめがみとめられる。

丹路——下五で句主の自嘲的な淋しみが出て、そこにこそ察される。誰かに言はせれば古いと言はれるかも知れないが、好きになれる句だ。(或る歌人から今頃啄木でもあるまいと言はれた事がある)

山雨樓——「なめる」と言ふことは殊更になめるのではなくして、無意識に頁を繰るとか物を扱ふために指先を頻繁に使ふ結果

つひ唇へ指がゆく事があつて、よごれがぬぐはれる意であらう。であつても決して不潔な感じがない。諸君の述べられた如く生活感情が淋み、中によく浮きよゐる。

本誌四月號近作柳塔より

▼泊る氣になつて見つけに落し針

大門

一杉——他所の家で泊る時の風景ですか。

山雨樓——さうです。

水車——句意は、泊らうか、歸らうかと云ふ錯綜した不安と焦慮から逃れて、落ちついた心へ、見廻すとそこに針の一本を見つけた。かう言つた句境です。いゝ句だ。

丹路——俳人ださうだが、他所島の方がよく之だけの川柳味を把握されてゐるのに敬服します。併しかうした句境にのみ安住して満足することはどうかと思ひます。

山雨樓——この作者は決して安住しては居ない。四月號には「誕生」の前書で「嚴寒におちんぼつけて出て來たり」の句があり多方面に句の進歩に努力精進されて居ます。

丹路——その句はいゝ句です。僕はその方を斷然と前掲句は餘りに在來の川柳味が顔を出しすぎて居る。

山雨樓——此の句は泊める家の主婦の姿が聯想される。俄かの來客に問訊つて縫物の針を落してゐたといふ處から、相當とり込んだ背景を含ませてゐる。一見穿ちの句である様だが、決して拵らへた想像やなんかでない。何處までも實感に根ざした眞實味が第三者を惹きつけてゐると思ふ。もう一つ心理と云ふ方面から見てもこの句は、かなり鋭くつ

かんでゐる。

水車——巧みな自分の心理描寫です。山雨樓——まとまりすぎる程まとまつてゐます。少々甘い處はあります。

丹路——それは素材が素材だからでせう

ルビーワ

シロトシンボリ

飲清 飲利

社合式酒造大日 通商部省内閣

れ。それが僕は物足りないんです。「嚴寒に」の句の方が新鮮味があつて好きです。大門氏の人柄が浮彫されて親しまれます。

山雨樓——ではこれ位で——おそくなりましたから。



座席券

座席券柱が邪魔でもしようが
 おちついてゆつくりは座席券
 座席券買とわぐ汽車で来る
 希わくばシヤンの邊りの座席券
 座席券隣の席を期待する
 座席券人相悪いなと思ひ
 座席券繪封筒にはいつて來
 知り合ひが隣合はした座席券
 來客へしびれを切らす座席券
 こんな好い椅子が空いて座席券
 座席券見物固く座るなり
 座席券二枚續きで誘はれる
 座席券一人が出るとみんな出る
 座席券別の財布へ入れ忘れ
 ルンペンに歌劇の座席買はさ
 座席券端役の名まで知つて去に
 座席券皆一様に咳をする
 花道の傍へと恨み座席券
 早過ぎて座席券一人隅にゐる
 座席券不意の旅行へ忘れられ

旅

急病の知らせを受けた旅戻り
 泉

高橋かほる選

未亡人淋しい氣持の座席券
 笑くばある事を見つけた座席券
 座席券隣の席を期待する
 座席券お茶と火鉢がついてゐる
 末の子が一人切ねてる座席券
 座席券早賣り切れの旅の人
 座席券ひつたくる様な大人氣
 うどん屋の此所座席券を賣り
 座席券約束の娘が來てくれず
 (佳)座席券二枚會社を早引し
 (同)座席券見せて笑ひ社退ける
 (同)速達を聞いて見れば座席券
 (同)入口が軽く受け取る座席券
 (同)十時には宵切れて座席券
 (同)座席券ハンドバツクへ樂
 (同)一幕は椅子に見せ座席券
 (人)タクシの中に見直す座席券
 (地)座席券氣輕義兄と家を出る
 (天)座席券机に二枚ならべて見

長崎柳秀選

日常の範圍を越えた旅の酒
 阿鴻

川柳家戸籍調 (續)

係、山雨樓

(1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日
 (4) 出生地 (5) 現住所 (6) 職業及又は勤務先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以外の趣味 (10) 配偶者及子供の有無 (11) 嫌ひなもの (12) 川柳に手を染めた年月引續き戸籍調を始めて下さい。掲載順序不同であること御諒承下さい。

(115) 高島玉兎朗

(1) 高島鐵之助 (2) 玉兎朗、喃喃堂 (3) 明治二十一年七月二十二日 (4) 東京市 (5) 東京市日本橋區松島町四四 (6) 現在は煙草商 (7) みつめても戀しい足しにならぬ空 (思ひ當るまゝ) (8) 逝く春を近衛師團の寝る喇叭 (花の四月の句として) (9) 芝居、相撲、落語、將棋、麻雀、清元、常盤津、哥澤其他何に依らず、右は代表的なもの (10) 妻あり子なし (11) 面倒な俗事と俗語サノサ節、是れは柳友間にも不思議がられて居る程嫌ひなもので胸先が痛み氣分が悪くなる (12) 明治三十七年八月頃。

(303) 吉田水車

(1) 吉田二郎 (2) 水車、俳句に乙二郎を用ひ (3) 明治三十五年九月十五日生 (4) 京都 (5) 大阪市東成區片江町四五三 (6)

旅愁ふと情緒の灯をばなつかも
長旅の車中で替る國訛り
旅日記大神戸市の港の灯
團體の着いて宿屋は一ト騒ぎ
ネオンの灯旅愁一入身にしみぬ
初旅へ母が情けの頭つき
永遠の別れと知らず旅へ出る
聲色が名優に似て旅役者
不運な旅から旅へ五十年
南米へ旅立つ今朝の知己の顔
行つて見たい旅のプランへ病が
驛の雨旅館へつゞく人力車
待かねて封切る父の旅便り

古扇遊 白帝子 秃山 白蝶 三郎 星城 葉光 孤鶴 汀雨 世都象 慈雨來 夢人 鐘生

旅愁の窓に俚諺聞いてゐる
旅の垢流して妻の酌を受け
子供等の旅は面白かつただけ
母の計を圖らず宿で渡される
旅すれを宿の女中に見透かされ
旅といふ意識が生れローマンス
東海道五十三次空の上
トランクが過去の旅を物語り
趣味の旅神社の判や寺の判
祖國なき猶太の民のさすらひよ
旅戻り己が手紙をなつかしむ
旅に居る心朝露などに觸れ
罪な戀残して一座つきへ發ち
俯向けば旅に疲れし影がある
はつきりと友情を知れる旅の空
饒別(ニ)に女文字も交じる旅
寝かへりの敷布冷たき旅の宿
ホネムーン松の名所とうつて來
大阪のラヂオ南紀の湯に浸り
年賀狀旅で懇意になつた人

感 吟

旅幾年母國の容れぬ主義を持ち
旅の朝俺の氣持になつて晴れ
ブラツトの校歌に遠征首を垂れ
小ぎたない基盤が一つ山の宿
旅先は黄金の山もあるらしく
旅先で主人に濟まぬ金が要り

富士雄 鴉天 無鬼 青波 利生 一晚 富美 山月 法泉子 水車 勝二 沐天 柳人 方眠 青兒 錦石 明珠 沒食子 一柳

機軸商山武商會大阪支店(7)先輩の句は
みな好きです、暴力はよしキリストも殺
される、路郎。三井でもちやりん／＼と
はした金、劍花坊。(8)未だ自脣の句を
得ません(9)多趣味、それが却へつて禍
ひかも知れませんが(10)無し(11)純洋樂
(12)昭和二年サンデー毎日へ投句以後中
絶昭和六年より繼續

(305) 市場沒食子

(1)市場徳次郎(2)沒食子(3)明治三十
四年七月九日(4)大阪市東區岡山町(5)
大阪市東區大今里町三九五(6)藥劑師
大隈選信診療所勤務(7)妬かれてた其頃
は未だ金があり。なあちろりこれから秋
に親しまう(路郎)澤山有つて書きつくせ
ません川柳雜誌の句は好きです(8)残念
乍らありません(9)大底が遊び事は一寸
だけ嚙じります(10)あり、子なし(11)豪
ばる人(12)昭和二年二月

(306) 岩垣日本村

(1)岩垣俊雄(2)日本村、舊號奇可愛
(3)明治廿五年九月一日(4)德島縣(5)
大阪市東區川區天神橋筋七の十三(6)藥
劑師(7)俺に似や俺に似るなと子を思ひ
路郎(一體子に對する句が好きで反逆的
な句や悲觀的な句は嫌いです)(8)満二
歳父に威厳も何もなし(9)僕の子煩悩は
趣味に近いです(10)妻一人、長女一人、
長男一人(11)酒と酒飲み(12)好きになつ

寶物

寶物に興味のもてたモボにモガ
 寶物へ先生だけが指を觸れ
 寶物殿邊りは鳩の糞だらけ
 寶物は屑屋も買はぬ品に見へ
 槍一ツ寶物に持つて失業苦
 寶物へ錠をおろして不眠症
 寶物を三越からも借りに来る
 寶物へ歴史案内いゝ行儀
 國寶の塔を圍んで花盛り
 寶物の祟りが怖い繩を張り
 妻や子の眼に寶物のつまらなさ
 家寶まで皆もち出して落選し
 國寶になつたと聞いて口惜し
 高宮へ寶物別に列らべられ
 骨董屋寶物殿で値踏みする
 肝心のところが國寶讀めぬなり
 國寶になつて俄に垣が出来
 これだけが寶物さといふとねむる
 寶物の拜觀うす氣味悪い部屋
 そう言へばそうとも見える寶物
 寶物に時代の臭ひかいで出る
 見る人が見て寶物の値打が出る
 寶物のいつち終ひは拜まされ
 寶物へ靴すれ痛くくゝなり
 寶物に鐘が響くよ東大寺
 寶物の藏を出た眼に青い空

選 千代吉 元山 吳竹 鯉遊 星城 沐天 阿鴻 新市街 紅人 柳路 菊子 法泉子 世都象 利生 紫陽 白丘土 比左夫 波樓 鐘生 鐘生 方眠 慈雨來 青兒 春光

吉田水車共選

見學の寶物を見る靴をぬぎ
 寶物の觸れくばくだけきに見へ
 寶物になるまで泥にまみれてた
 山陽の偽筆もあつて旅の宿
 寶物を南無阿彌陀佛と拜む母
 寶物成り上りをば淋しませ
 國寶の前案内の身繕ひ
 國寶といはれも一度ふりかへり
 祀られてゐる寶物の青い夢
 寶物の拜觀素足が冷てくる
 寶物に苦心の見へる乃木神社
 寶物の前は賽錢別に置き
 閣下の反古がわが家の寶
 國寶は戰禍に遠く運ばれる
 現世に適せぬ家寶もてあまし
 寶物は思ひがけないものばかり
 そういへばそうとも見える寶物
 腑に落ちぬ物がやつたり寶物
 猿が押し雄がひき出す寶物
 薄暗い中に國寶寂びてをる
 寶物が破れて出てをる展覽會
 高宮へ寶物別に並べられ
 寶物名も無き寺に掘出され
 寶物なるほどのなあと見て通り
 寶物見る子の列がちと亂れ
 幸平 荷童 曉光 同 孤鶴 同 豆秋 同 山月 同 喜由 同 天痴人選

たのは昭和元年、作りかけたのは昭和四年、投句は昭和六年。

(307) 小島 草村

(1) 平岩士郎 (2) 司郎・白狼・(3) 明治四十五年五月十三日 (4) 京都市車屋町竹屋町南 (5) 京都市嵯峨天龍寺前 (6) 同志社大學經濟科三課程在學中 (7) みなつと立つ葱畑へ落付かう、山雨樓。戀の畏あゝの眼だらうか眼たらうか、路郎。足跡の凹みに蟻は重傷だ、鮎美。春が來た溝がいちいち泡を育てる、町二 (8) 火葬場はカナリヤが居て立つ煙、母に似たあきらめ勝ちな兒で弱し、あまりありません (9) 飼鳥・ラグビー・「青ノ光」・白銀ノ亂舞」等の歐洲映畫觀賞 (10) 無・十四五の弟が欲し (11) ミリタリズム・酒に呑まれた女・男・猜疑心、12 昭和四年其の頃の崇拝句、瓶の肩一點光り迫り來る、天井へ壁へ心へ鳴る一時、秋さらり銀の襖のもの思ひ

(307) 小島 草村

(1) 小島與三吉 (2) 草村、折にふれ變名用ふ (3) 明治三四、七、二三 (4) 滋賀縣八日市在 (5) 京都岡崎疏水畔 (6) 米穀問屋業 (7) 松窓句集、近作柳樽なぞにちよいゝあります (8) 飛石の上でこゝらの地價のこと、その他あるやうで無し (9) 俳句、語ること、ぶら／＼歩くこと (10)

寶物を團體二割引きで見ると、戦死した子の軍刀を家寶にし、寶物を見ても神社は金を取り、さらに有りさうに煤けた寶物、國寶を並べ、神社は昇格し、寶物裏返しても見たくなり、寶物へ視線吸はれて聞かされる、寶物の臺りを知らぬ顔では、國寶の仁王の鼻に紙つぶて、寶物になるまで泥にまみれて、滿洲の寶もプロの物ならず、こんな物どこがよいのか、寶物、國寶の觸れればそこが崩れそう、寶物が日本の春の塵に浮き、寶刀で座敷の風を切つて見せ、

豆柳 秋人 吉左右 方眠 六郎 比左夫 法泉子 元山 八歩 孤鶴 葉光 同蝶 白鶴 天

薄暗い所に寶物素直なり、意のまゝに出て来る夢のたか、寶物は金十錢の風を受け、寶物どつかで故人嗤ふやう、六疊の長押しに土旅の槍が錆び、寶物の紐は主人の手で結び、風流な人が太古の徽を賞め、團體の義務で寶物見て通り、祀られてゐる寶刀の青い夢、

(人)鼻缺けたまゝ、國寶に指定され、(人)國寶の埃拂へば疵があり、(地)寶物に飽いて寝る、奈良の芝、(地)國寶の塔を圍んで花盛り、(天)農民の意識に遠し、寶物、

留秀 沐天 白帝子 三郎 勝二 同 沐天 青兒 同 豆秋 法泉子 白帝子 紅郎 六郎

六厘坊忌

天才で夭折された小島六厘坊の廿五回忌を営みます。當夜故人に關係の深い當百、松窓、半文錢の先輩諸氏が出席されて追憶談を語られますから誘ひ合せて御出席を願ひます。

日時……三月五日(金曜) 夕六時半

會場……道頓堀俱樂部

追憶談……齋藤松窓、西田當百、木村半文錢、麻生路郎

兼題……「故人」三句 路郎 選

會費……三十錢(鉛筆御持參)

(記念品) 出席者に繪葉書を一組贈呈致します。

(幹事) 鶴峯・新水・變人・忝山・稔
主 催 川 柳 雜 誌 社

大阪市南區日本橋南詰東入南側
天牛書店(電話南二七四八番)

妻、二女ありて女護ヶ島の感有(11)損をする(12)昭和四年一、二月頃なり。

(300)

大西 八 步

(1)大西英雄(2)八歩、平和亭(3)明治四十年六月十四日(4)鳥取市(5)大阪府東區博勞町一ノ八、(6)竹中帽子店方(7)大佛の鐘杉をぬけ、戀の良あの眼だろ(8)夕櫻とんぼがへりがしてみたし、(9)後悔の後姿にある圓味、時計の音人の仕事と思はれず、(9)謡曲(10)無し(11)口論、安物の天ふら(12)昭和四年四月。

(300)

明 石 柳 次

(1)明石博(2)柳次(3)明治四十一年一月三日(4)丹後四辻(5)大阪府東區北久太郎町四丁目(6)株式會社藤井商店(7)その日ぐらしも軒に雀がこぼるゝよ、夕櫻とんぼ返りがして見たし(路郎)(8)一句を残したいと努力してゐます(9)讀書觀劇(10)なし(11)見榮坊(12)昭和四年春

前號の正誤

五七頁(天)結東は妥協の手で出るブルジョア磨須雄の誤リ

六五頁の彼岸の句の中に草の句が、十句混じつてゐますから訂正致します。

吳陵軒と柄井川柳とは同一人なりや

木村 半文 錢

(一)

「通」三十四號で湯本白庵氏が「旬腹瓦片」と題して書かれた短文中に、川柳の史實的研究に重大な問題を含む意見が述べられてあつた。それは初代柄井川柳と、柳樽編輯者吳陵軒可^有とは、同一人ではないか、といふ興味のある問題だつた。

氏は先づ、柳樽初篇の吳陵軒の序文を引用してから「考ふるに吳陵軒の外に書肆即ち本屋のありしこと明瞭にして若し今の制度に稽ふるも少くとも書肆は印刷人にして編輯人は吳陵軒なるべければ舊年の前句附の摺り物をさがし出す云々は曾て吳陵軒が手許に連中の句集の保存されてありしこと著しく而もこの棚あそこの隅とは縦令形容的の言辭なりとするも、出版人らしき處なく點者らしき態度にして疑ひもなく吳陵軒エコール柄井八右衛門氏なること歴然たるものゝ如し」と説かれてある。そして岡田三面子著書にもその理由が審に説かれてなく而も一吳陵軒の何人なるや知れざれど或は川柳と同一人にはあらざるか」と疑問を擧げられてゐるのを指摘し、尙ほ進んで、「吳陵軒一名木綿之助と稱せしとあれば川柳翁の幼名勇之助と

合致しいよ／＼その説の謬らざるを知るべく」と證明されてあつた。若し、白庵氏の説くが如く、初代川柳と吳陵軒が同一人であつたとすれば、それは實に、川柳史實上の一大發見であると思ふ。

だが私は、さう信ずるには尙ほ多くの疑問を持つ一人であると言つて、私自身も柳樽と吳陵軒との關係を一考した時、第六感的に「或は同一人ではないか」と疑つたことのある一人であるから、さうした意見に對して一笑に附する程の無理解者ではないのである。そこで私は、以下少しく此の問題に關して、私のもつ賛否兩様の意見を述べて、同じ研究者諸氏の御參考に供したいと思ふ。

(二)

先づ順序として川柳と吳陵軒は同一人ではないか、といふ疑問點から出發せう。それには白庵氏も擧げた初篇の序文から一考してみやう。

さみだれのつれ／＼に、あそこの隅ここの棚より、ふるとし
の前句附のちりものをさがし出し、机のうへに詠する折ふし

書肆何某來りて此儘に反古になさん本意なしといへるにまかせ、一句にて句意のわかり安きを舉げて一帳となしぬ、なかんづく當世俳風の餘情をむすべる秀吟等あれば、いもせ川柳樽と題す

干時明和二酉仲夏

淺下の麓 吳陵軒可有述

この序文を読んで、最初に誰もが考えることは、吳陵軒が五月雨のつれ／＼に瓦版の萬句合をとり出して眺めてゐるところへ、書肆の星運堂がやつて來て「やア是は面白いですネ、是非上梓してみたい」と懇願したので、その希望にまかせて、萬句合の中から一句立にして分り易いものを選び出し、それを柳樽初篇として上梓したのであらう——といふ解釋である。この序文をそのまゝの文意として受けとる時は、それに相違ない。少くとも此の序文の解釋としては。——

最も、劍花坊氏は此の序文を「自分には、それほど本氣には爲つて居なかつたけれど、書肆が來て勧めるので、終にかうした本をこしらへた、との言草は、江戸の作者が必ずきまり文句にしてゐた」と穿つた解釋をしてゐられる。或はさうかも知れぬ。

それは兎に角、まづ私をして疑はしめたのは吳陵軒の態度だつた。若し、吳陵軒と川柳とが別人でありとすれば、この序文に現れたる吳陵軒の態度は、すこし獨斷すゞ且つ僭越でもあると見做される。吳陵軒は二篇以後の柳樽に於て、隨所に川柳を「川叟」と敬稱してゐる。その點から推しても、吳陵軒は川柳

に對して長上の禮をもつて臨んでゐたことは看取される。少くとも師弟の關係でなくとも、先輩と後輩との間柄ほどの意味合はあつた筈である。「ふるとしの前句附のすりもの」は恐らく川柳評の萬句合を指すのであらう。然れば、その萬句合を持つほどの吳陵軒である以上は、その間の消息を推知するに難くはない。

その吳陵軒が、判者たる川柳の許可もなしに、而も「此儘に反古になさん本意なしといへるにまかせ」と獨斷で上梓すべきことを許し、殊に判者としての川柳をさしおいて、僭越にも「一句にて句意のわかり安きを舉げて……なかんづく當世俳風の餘情をむすぶ秀吟等あれば」と、自ら判者らしき態度を表示してゐる。かうした態度は、自己が判者か、若しくは、判者と同じ識見を持つのでなければ、表示することの不可能な態度と見なければならぬ。

吳陵軒が川柳と別人でありとすれば、この態度は不可解である。二篇以後に於て川叟として奉るほどの敬意を持つなれば、なぜに初篇の序文に、川柳と自分の關係、萬句合と柳樽との關係を明瞭にしておかなかつたか、といふ疑問である。それが同一人であつたとすれば、上梓するのに何彼の事情が伏在したのであらう位の想像は出来るが。——

(8)

次に問題となるのは「いもせ川柳樽」である。二十二篇に、「とし／＼やなぎだ」と題するも此道のなかだちともなり好士

考士のむつまじきをねがふ事」と吳陵軒自身がほのめかしてゐるやうに、恐らく吳陵軒自身——柳樽自體——を媒體として斯道の興隆を希ふための、寓意であらう。いもせ川は縁を意味しそれに柳樽を配したのであらう。その意味はどちらになつてもいいが、然し、こゝに何人にも見逃すことのできないのは、この中に川柳の二字を挿入してあることである。或は、國家安康の如く、無理にそれを牽強附會する誹謗は免ぬとしても、明に川柳の二字が割り當てゝ挿入されてゐる。それが意識的でなくとも、後人の研究者が、それを見おとす筈がない——ほど左様に巧みに挿入されてゐるのだ。然も、前述した「いもせ川柳樽」の意味と相照應して考えると、そこに何かの暗示を含むことが、仄かに看取される。

若し、川柳と吳陵軒とが同一人でありとすれば、この川柳の筆名を挿入した動機——と言ふよりは稚戯に類する常套手段は微笑の下に諒解されるが、別人でありとすれば、吳陵軒は斯く意識的に挿入したものであらうか、無意識的になしたものであらうか、心理學的に追窮して行けば興味のある點である。

私は、前後の事情を常識的に綜合して、意識的行爲と見る一人である。然しそれは、どこまでも常識の範圍に於てである。若し、意識的行爲でありとすれば、吳陵軒は川柳の別號であるといふ疑問を濃くする譯である。

殊に、二篇には「柳多留」が「家内喜多留」に改められてはゐるが、その下に「江都前句判者川柳」の名義がのせてある。斯く二篇に川柳といふ判者名をのせ乍ら、何故に初篇には、そ

れを明にしなかつたか、と疑へば疑はれる點がある。初篇には「いもせ川柳樽」として暗に判者名をほのめかし、その初篇が案外に江戸の人々にもてはやされた結果、二篇には川柳なる判者名を明にしたのではないか——とも想像される。それが同一人であつた場合には、尙吏、その間の微妙な心理作用を推知することが出来得るわけである、然し、それは何處までも想像であつて、明證ではない。

(4)

それから吳陵軒といふ人物に就てである。これだけ川柳界に大きな貢獻を遺し乍ら、その人の作品は木綿の筆名をもつて相當のこつてゐるが、その人物に就ては殆ど徵すべき點がない漸く、柳樽の序文と作品とを通じて、その人の風采を想像するにとどまる。ただ此所に見免すことのできないのは、二十篇と二十九篇との序文である。二十篇には同好者の雨譚が

「昔々三十年も昔より、開き毎に上名護屋をはさず、おのづから名にしおひたる翁あり、連中いかつてこれをいへばこりやうけん」とわびて笑ふ」

と記してゐる。この文面から推すと、吳陵軒は開卷毎に高點をちか得た才人であり、同時に相當の年齢を経た圓滿らしい人物だつたと想はれる。そして吳陵軒の意味も思ひ合せて首肯れる殊に、二十四篇の川柳翁の肖像畫と對象して考えてみると、何だか、吳陵軒は、あの肖像とぴつたり合致するやうな、氣がするのだ。(この一項は後の否定の部で詳説する)

又、二十九篇には書肆星運堂の序文がある。

「遺叙」

連歌に古式あり、俳も夫より出て、一卷の首尾、三句のわたり付てふことのありて、道にたゞし、今の前句は一章に問答あつて、孝貞忠誠にかんじ、はた、たはれたるには、冊子に向ふて獨り笑を催し氣を養ふべしと、古吳陵軒のぬし常にのたまひしを思ひ出して——後略

書肆星運堂は筆名を菅裏と稱した、同じ道の好者である。この出版元であり、同じ道の好士である菅裏をして、斯く遺叙と題して、縦令それが單純な文章にすぎないにしても、川柳そのものの本體を、臆ろげながらも示し得たのは何を意味するか。思ふに、菅裏は日頃吳陵軒に就て、その説を聞き、教を受けてゐたが故に、斯く遺叙と題して序文をものしたのであらう。そこには出版業者としての、ある種の宣傳効果を窺つた意圖はなく、ひたすら、親炙した故人の言説を再現したものとするべき點が多く含まれてゐやう。特に、菅裏が吳陵軒に對して常に尊敬の念を以て接してゐたことは、その「常にのたまひし」とあるところを見ても、認められる。

吳陵軒は斯く、前句に就ても獨個の意見を有し、出版元であり同時に同じ道の好士たる菅裏に、斯く尊敬を拂はしめてゐる菅裏が若し、吳陵軒を通じて川柳に接してゐたとすれば、川柳が吳陵軒の先輩である以上は、川柳からも何か作句上の心得を聞かされた筈である。聞てゐれば、吳陵軒の遺叙もさることながら、川柳の寸感でも別にのせべきではないか、と訝しまれる

柳樽と吳陵軒——吳陵軒と川柳——川柳と柳樽——柳樽と星運堂——と斯う考えてくると、菅裏が川柳に一度も面接したことがない、とは想像し得られないからである。

殊に、吳陵軒、川柳相ついで歿し、斯界漸く寂寥を感じ、目標を失つて動搖混亂の兆ある時、遺叙と題して頂門の一針となすなれば、吳陵軒より、その先輩であり、權威者であつた川柳の遺叙の力が遙に効果を齎らしたのであらうことは疑を容れない。それを推知せぬほどの菅裏でもあるまいに——と思はれる。こゝに於て、吳陵軒なる人物は、人間的には圓滿に發達した町家の相當な生活者であることを想はしめ、川柳的には、常に高點を獲得した腕を持ち、且つ、一個の川柳觀（前句附觀）を有し、それを傍人に説示し、尊敬されてゐた人物——であることを認めせしめる。これを川柳と吳陵軒の名をとり換へたら、即ち、二十四篇の東橋描くところの肖像畫となるのである。

(5)

次に、吳陵軒の判者振りの態度を一見しておく必要がある。寡聞の私、川柳が直接又は間接に、後進のために垂れた判者としての言を、未だ一度も見聞しない。だから川柳翁に關しては知悉するところがないが、吳陵軒は判者らしい態度を、柳樽の序文の中にあらはしてゐる。今その中の二三を拾つてみる。

吳陵軒反古張の團扇を入れてヤツといふ（八篇）

當夏書肆星運堂のぬし心願に依つて不忍率納句合催し千二百員の寄句の内四十吟の秀逸をあらはすなり（九篇）

星蓮堂のぬし當春相撲會を取結び、番勝六十員の秀吟を爰に顯さん事を乞ふに任せ(十篇)

其他にも二三の斯うした類例がある。又、二十三篇吳陵軒の追善會の奥の方に、如狸の添書した七句の前書に

故人木綿門葉追善に記す

とあり、明に、木綿の門葉の存在を示してゐる。同じ意味で十一篇には吳陵軒自身が、物故した同好者の二十人に對して、其の「秀吟をかきあつめ顯はし」してゐる。勿論、この追善の意味は門葉を指すのではなく、同好の士を悼む意志であつたことは察し得るが、斯うした企擧と態度は、やはり吳陵軒の判者らしい態度を意識せしめるに十分である。

(6)

今度は、川柳と吳陵軒とは別人物であるといふ點に進んでみよう。まづ、第一に誰しもが氣づくことは、兩者の死亡した年が違ふといふ、動かすことのできない根據である。

吳陵軒の歿した日は確實に斷定することは出來ぬとしても、先づ、他に明證のあらはれない以上は、二十二篇の辭世吟がある日附を、忌日としなければならぬ。その二十二篇には

辭世 五月廿九日 木綿居士

雲晴れて誠の空や蟬の聲

とあり、明に、天明八年五月廿九日の歿と見てよいわけである。川柳の死去は誰もが知るやうに寛政二年九月二十三日である。若し「風やあとで芽を吹け川柳一が、その辭世吟と確定するな

れば、最早や、川柳と吳陵軒とは同一であるといふ方が如き問題は、即座に解消する譯である。何となれば、歿した年、月、日も違えば、その辭世吟まで異つた人物が、どうしても同一人であると想像する事すら許されぬ程、解決は明であり、簡であるからである。

も一つ蛇足を加へるならば、吳陵軒木綿の追善會は「申七月廿八日」に開催されてゐる。即ち、木綿は五月廿九日に歿し、その翌々月の七月廿八日に追善會を開催したのである。とすれば、寛政二年九月二十三日まで生きてゐた筈の川柳に對して、生き乍らの追善會を催ふした結果となる。いくら洒落好きの江戸人であつても追善會の取り越しはなすまい。(最も葬式を取越した人は近年にもあつたさうだが——)而も、川柳の追善會は二十四篇の玉柳にある通り立派に菅江が記述してゐる。即ち「ころは寛政辛亥年九月廿二日菅江序す」とあり、その文中に「年ごろ川柳の翁俳諧にふけりて、としと萬句合の批判に及ぶ、その聲謂つべし獅子吼に等しと、しかるをこぞの季秋獅子吼聲をおさめて世を辭す、今年季秋諸連會して、かの翁の追福のために」

とあり、その圈點の部分と、寛政辛亥九月廿二日の日附とを照應して考えたら、何人と雖一目瞭然として這般の消息を氷解するであらう。

殊に、この菅江の序文の一節に就て注意すべきは、さきに述べた吳陵軒の人物と態度が廿四篇の川柳肖像に髣髴するといふ問題である。あの一文では肖像に似たる圓滿相を持して、こり

やうけん／＼などと諱けるやうな好々翁を想見するが、この序文の「とし／＼萬句合の批判に及ぶ、その聲謂つべし獅子吼に等し」といふところから、進んで「されど獅々吼歿してふたゝび判の詞をくはふる人なし」「諸連獅々吼の餘波をしたひて」の文脈を辿つて行くと、川柳翁の判者としての態度が毅然たるものであることが推察される。よし、この序文が故人追福の意をもつて多少とも敬意を以て扮飾されてゐやうとも、兎にも角にも菅江如き當時の人物に對して、斯く、尊敬されてゐたのは、判點の上に儼然たる一眼識を有してゐたことは勿論、一家の創見を以て、よく判者としての途を譲らなかつたといふ——川柳その人の特質に依るものと見做ればならぬ。こゝに於て、將して此の一個の儼然たる判者川柳がよく「ごりやうけん／＼」と諱けて萬座の人を微笑せしめた人物と、同一人でありや否や——と考えれば、蓋し、思ひ半に過ぎない點があるだらう。

(7)

よし又、吳陵軒と川柳とが同人でありとすれば、縱令、出版上の事情が含むにしても、自己の別號である吳陵軒の名を以て自己に對して「川叟」と僭稱せしめることは、常識的にも不可能だと信するし、又、四篇の中にある「一萬或は二萬の句あつまる事此考士の妙とやいはん徳とやいはん」と讚美せしめるのも、いくら自畫自讃にしても、些と桁外れだと思はれる。

(8)

又、吳陵軒が筆名を木綿と言つたのは事實であるとして、そ

の木綿の名が櫻木連の中にのつた初見は十一篇卷頭から六句目引はづればづれて堀の女房也

が、それである。その前に連に屬せず木綿の筆名だけの句は散見する。だから木綿は最初は櫻木連の一人だつた事は疑がない。十二篇にも一句のつてゐる。ところが此の木綿の筆名は、柳樽の篇を重ねて行く間に、あちらこちらの連の中に移動してゐる。今その概略を拾ふと次のやうである。

十四篇 亥年角力句合

第一回	櫻木連	
第二回	櫻木連	山水連
第三回	櫻木連	
第四回	山水連	
第五回	山水連	
第六回	櫻木連	
十六篇	若菜連	
十七篇	櫻木連	
十八篇	山水連	
十九篇	櫻木連	八重垣連

斯うして木綿その人が、斯く、あちらこちらの連に屬してゐることは、恐らく、住所の關係、句會の關係、人物の關係その他いろいろの必要上又は便宜上、移動したのであらうと思はれるが、若し、一步進めて、この木綿は各所屬毎に別人であつたとしたら、いつたい此の説明は何うすべきか——決して兒戲に類した問題ではなく、實に、木綿對川柳問題に關聯して複雑無

比なる問題を惹起するであらう。

又、木綿と川柳とが同一人でありとすれば、一世の判者たる川柳が、別號を以て、各所に轉々として所屬を變更するが如きことは、萬あるまいと想像する。

()

又、一面から考へて、若し、吳陵軒と川柳とが同一人物であつたとしたら、二十二篇の木綿居士の辭世のあとにある「二代吳陵軒」なる人物は、いつたい誰であるか。

同じく、二十三篇の木綿追善會の終にあるところの

言の葉の茂る手向や一めぐり

語涼軒

の句者、語涼軒なる人物は、單に吳陵軒の語呂にすぎない人物であるのか、否か。

斯うした疑問も同時に氷解せしめなければ、吳陵軒と川柳とが同一人であるといふ斷定は尙早であると思ふ。

(10)

故に、白庵氏の如く、前述した二三の觀點から、この問題を手輕に解決しやうとする事は、極めて危険であり、且つ、困難であるのみならず、同一人物であるとするよりは、別人であると思ふ方が、前述したやうに、可能率に富むのである。縱令木綿之助と勇之助とが語音相通しても、木綿をモメンと訓みしかユフと訓みしかさえ、未だ確認されてゐないのであるし、淺

下の麓も地理的に分明してゐないし、況して、出版上の序文よりの相像に立脚して簡單に解決を急ぐことは、最も、注意すべき點であらう。もちろん、常識的な一事象から、想像もしなかつた眞理を發見し得たことは史上に散見する。だから、どういふところから斯うした史實上の閉ざされた暗黒面が、スル／＼と解決の光明に照されないと限らないから、能ふ限りの力をつくして、その研究に努力すべきであらうことは申すまでもない。

ただ、前條の數點を推して、同一人物であるといふ斷定には殘念乍ら贅意を表し得ない。

私も、この問題に就て頭を悩ました一人であるから、尙ほ若干の語るべき材料を持合せてはゐるが、それは何所までも想像であつて、明證でないことを遺憾とするものである。今、その乏しい中から若干を選んで、同じ悩みを分つ諸氏の御示教を仰ぐ所以である。(昭和八年一月七日稿)

轉 居

▼首藤竹楓君は神戸市神戸區下山手通八ノ一八ノ二佐伯方へ▼竹内機見女は大阪市天王寺區勝山通三ノ四八へ▼松野えいを君は大阪市市河内郡小坂町小坂七〇六へ▼梅田桃源君は大阪市東區北久寶寺町中橋角グリフィン喫茶店へ▼根上柳村君は石川縣小松町寺町江指方へ▼北山悟郎君は大阪市東區南久寶寺町三丁目へ

各地柳壇



＝れ創を句るあちのい＝

本社四月例会

四月五日夜

於道頓堀俱樂部

赤玉の風車がクル／＼廻轉を始めた。赤い灯青い灯の川面からほろ温い風が湧く。そんなところのカフェーにジャズ、饗笑のメロデーが交錯する。交通標示器は赤から茶、そして青に點滅して人と車の線を織る。愈々春だ春、春、道頓堀の春の宵。

句會は三巴、静太兩氏の珍顔を加へ。席題最初の試みとして新案の投票互選を行ひ、理想的互選として好評を博す。

席題「専門」の選者山雨樓氏、三光の句に短評を加へ参考に供し、舛樂氏、枕元の選後感を述べてユーモアを撒く。

散會十時過ぎ。春の句會は佳句を生み秀吟を残して喜ばしく閉ぢる。(二南記)

出席者

路郎、綠雨、豆秋、鶴峰、春光、夏光、秋光、冬光、舛樂、紅、鮎美、變人、白峰、二南、琴人、三巴、おさむ、紫石、坊茄子、文蝶、星城、素月、無鬼、一久、鐘生、卜居、遊歩、晚春、比古、葉平、町二、山雨樓、比左夫、里十九、夢裡、いわを、掉二、麗光、静太、水車、夕鐘。

兼題 幸福

幸福な女の鼻が低いなり
幸福な裾へほつ／＼春の泥
幸福を笑へぬ男になつてゐる
金のこと云へば幸福うちこわれ
味噌汁を黙つてかへてる朝の心
幸福な家の時計は進みがち
幸福を裏切られたるアパート出
幸福の五分々々に居る老夫婦
静太、鮎美、比左夫、二南、町二、麗光、山雨樓、いわを

幸福の棲家が親子九人ゐる
LIONの戀をみて居る人だかり
(人)幸福へなんにもならぬ試験管
(地)幸福のあかりを知り死に近し
(天)幸福のお膳は缺けてきこよし
(軸)子を持つて教科書に名を書け
(同)何が幸福か阿呆らしいこが君
(同)春を春と感ずる日さへありがた

席題 肩

肩揚のあたりになふ丸い線
肩揚に氣がつき引子手を離し
肩揚の二人おかしき事ばかり
肩揚の頃なつかしき繪封筒
肩揚のとれたばかりへ嫁く噂
見違へた娘肩揚とれてゐる
肩揚へ流石十七八の線
肩揚に出戻りの姉見くびられ
肩揚をとつた娘をしかるなり
肩揚を包むシヨールの背が高し
肩揚の娘が持つてゐる寒椿
肩揚をとつて妹らしくなれ
肩揚と見えぬ姿で橋に居る
煙草の輪兩手ではらふ肩身揚
肩揚をおろした日なり日記帳
肩揚のないを叔母は見逃さず
肩揚を取れば小鳩は胸を張り
肩揚に似付かぬ娃の太り様
肩揚へ春陽をうけて哇づたり
久しぶりもう肩揚の娘は居らず
肩揚の方がハッキリ返事をし
肩揚もおろして泣いた兒が歸る

山雨樓 葉平 素月 春人 晚春 路郎 琴人 二南 山雨樓 鮎美 夢裡 紅鬼 文蝶 鶴峰 静太 麗光 山雨樓 比左夫

肩揚をとつて女になつた顔
 春の陽を浴びて肩揚の娘が歌ふ
 肩揚の娘の想像のはなやかさ
 肩揚の顔の桃色櫻色
 肩揚の押賣が来る今朝の膳
 肩揚がとれて腰から女めき
 十四年八月肩揚をとり
 (軸)肩揚を無視して太り選手なり
 席題 受 驗 町
 明日受驗今宵の壁の黒ずみて
 受驗の子袴を二廻しめ直し
 颯爽とパスして歸る階行社
 寺の鐘胸一ぱいの受驗日
 受驗日を父は欠勤して出かけ
 受驗室靴音今は隅に居る
 どの字も浮いて時の經ち行く
 縮め手の手くばりばよし家主の子
 受驗日の朝燈明を子が上げる
 受驗生壁に物問ふ如くある
 就職の着飾つて来る殘驗場
 受驗場疲れた中に自分も居
 自信ない受驗場への長廊下
 受驗から歸つた弟だまりこみ
 まだ戀を知らぬ乙女へ受驗の日
 弟に似た心も交る愛驗生
 受驗生又心の配な事を聞き
 受驗生の目に聲え立つ時計臺
 答案を書く鉛筆の尖りすぎ
 校門を出て答案を父尋ね
 受驗日を明日に父子の宵寝なり
 (佳)受驗者へ眞白き壁が押迫り

素同同文同同鐘同山雨樓同變同人水麗光三比夏素白三二冬一選
 月蝶生樓人車巴古光月峯南光

(同)不安續き受驗生の汽車
 (同)愛驗生ホットする眼に春の空
 (同)傘さしてひびいて受驗の子
 (同)合格をするぞと破れ靴をはき
 席題 專 門 山雨樓選
 外科専門病室のほがらぎ
 専門の事も忘れて四十過ぎ
 専門へつかれきつて老眼鏡
 金看板一枚だけの家傳藥
 専門醫手遅れですと取合はず
 専門にされて算盤おいてある
 専門の話がでせぬ喫茶店
 専門のウイキンド寒い風
 専門家とこころのぞくだけ
 専門家の花に反いて居る
 専門へまかし切つたる咽喉佛
 専門は空巢であつたよい男
 専門の用語覚へる湯にひたり
 女專卒業父にそむいたハイヒール
 専門醫す切開をすると言ふ
 専門の技師へみんなの輪をつくり
 (人)専門の人の眼鏡の度が強い
 (地)三時間考へ抜いて角を打ち
 (天)外燈は赤専門醫すつけてゐ
 (軸)ちを仕替へ器用に直し老ける
 席題 枕 元 山雨樓選
 枕元おあいそ書と水があり
 山莊の朝霧枕元に流れて
 枕元博士と云ふを信じさせ
 醒むれば看護疲れの妻の居る
 カンフル注射へ黙殺されてる
 紫石 水車 點美 變人 夏光 同峯 白峯 三巴 豆秋 夢裡 素月 掉二 文蝶 春光 春月 素居 貼平 葉二 掉美 貼二 町二 山雨樓 豆秋 比古 白峯 無鬼 靜太

枕元父へ輪血の我となり
 あいさつは後へまわして枕元
 枕元の湯飲みにゆがむ幻想
 枕元初ひ産と言ふものを掛け
 枕元の一方差も子の心
 枕元向ひての輪へ置く土産
 枕元子に行儀よく座らされ
 枕元立てる女の嬌態
 枕元からの財布があるばかり
 枕元這ひ出した蜘蛛悦ばれ
 枕元おとなしく子の喉が鳴る
 枕元大事に伏せてた日記帳
 枕元洗つたシャツが置いてあり
 枕元つこへも行かずに居る
 枕元がりの子のれ息なり冷える
 枕元皆んな寄つて来て黙り
 銘仙の柄見せに來る枕元
 居催屋らしと知つた枕元
 下宿屋に娘のありて枕元
 今迄の不幸をゆるす枕元
 枕元の煙草とる手のうそ寒き
 枕元そうつと通る風があり
 枕元の通りおひやと煙草ぼん
 (軸)枕元も一度電報打つて見よ
 席題 閑 人 互
 閑人にされて會社を戀しが
 爪伸ばすことに閑人氣をつか
 閑人の行術不明をさわぐ春
 閑人に將棋とうゝ負けまい

鐘文豆紫 同同葉同 おさむ 同山雨樓 同いわ 同晚秋 冬紫 町三 夕坊 遊步 掉二 水車 一久 里十九 星城

葉琴比無白夏卜里夢靜麗二遊鮎互變山琴葉比素夏春紅冬艸鮎三坊
平人古鬼峯光居十九裡太光南步美還人樓人平古月光光光樂美巴わな
子

人報
幽選

雅

鮎 美選

鮭

鮎雅

店

雅遊

鮎變人
美人選

變

雅同
幽

月白

雅晚
幽春

な

雅同
幽

新

川柳加茂川句會 (京都)

四月十日夜於仲源寺

席題 夕 べ 黃子

司郎報

(60) 夕べの風が青春をよぶ
(同) 東れ髪夕べの庭に帯持ち
(同) 夕空にじつと心なみつめてみ
(同) 昔の猿にも夕べは楽しけれ
(同) 妹の化粧の匂ふ春の夕べ
(同) 祈る夕べめく青きカーテン
(同) 春の夕音會の灯がゆれる
(70) 夕暮に逢へばエプロン濡れる
(同) 泣く子供此の夫へたそがれる
(同) 療養所夕べの庭に叱られる
(同) 馬を洗ふてゐる村の夕べ
(80) 子と呼ぶ聲に犬が走る夕べ
(90) 駄菓子屋へおこぼ祭の夕べな
(同) 呼ばれたる兒が鶏を呼ぶ夕べ
(同) 郷愁や春の夕べのパスにあふ
席題 丘 迷

明選 迷 光 樹 麗 司郎 新 水 虎 悲 香 朝 迷 光 麗 波 樓 良之祐 白 扇 冠 岐 同 朝 香 同 悟 樹 豐 次 同 白 扇 黃子 朗 光 選

憎むなら憎くめと笑ふ巻煙草
憎んで憎んで淋しい我身よ
憎まれぬ男四十賀にゐる
憎くタイの好みも憎い戀敵
憎むこと忘れて妓賣れてゐる
憎むこと忘れる酒があるなり
地主の塀を憎む喧が行く
善人の憎みは題目を唱へ
憎まれてゐるが正座にすわられ
憎しみの心暗さへ椿落ち
俺だけが憎まれて居て酔はされる
(五) 繼母を憎む水道音を立て
(同) 二階から憎い男へ笑ろてやり
(同) 憎しみを忘れて空はすみわち
(同) 春雨を憎む夜行の遠出番
(同) 憎しみのとけぬ握手に脂じみ
(人) 憎まれてゐるを猪口の數に知し
(地) 憎まれてゐる新夫婦面白し
(天) 憎む氣になつてたも膝へ乗せ
席題 願 紅壽郎選

香 朝 啓 秀 昌 一 欵 乃 紅 壽 郎 冠 岐 八 步 富 美 三 同 公 黃 子 朗 波 樓 竹 雅 六 祥 香 朝 八 步 豐 次 豐 次 波 樓 悲 虎 豐 次 黃 子 朗 悟 久 香 朝 良 之 祐 八 步 同 富 美 三 紫 明

お願ひへお役人様ツンとする
双方の意見が違ふ保護願ひ
(轉) 脇息へお願ひをする膝を寄せ
席題 戰 新
日旗〇〇隊のときの聲
戦ひの只見る瞳には愉快なり
戦ひに疲れた足へ鶏が逃げ
火蓋切る戦地まだらな雪の山
壯烈な空中戦を平氣で見
戦ひはまだ續く紙芝居
戦争があるなしの論茶を入
戦ひにきつと勝ちます手
一點をうばひあつての補回戦
戦ひの前に無氣味な雷をき
戦ひをよそにゴルフの白き手
戦ひもすんだ兵士の目の凹み
戦線の或る日なつかし花が見え
戦つて戦つて寝て故郷の夢
戦ひの夢に露營は寝鎮まり
(轉) 大軍へ切り込むだの勇氣も出
策題 花盛り 司郎選

啓 秀 樹 一 紅 壽 郎 紫 明 啓 秀 黃 子 朗 麗 光 樹 乃 之 字 良 之 祐 豐 次 樹 一 乃 之 字 新 水 八 步 黃 子 朗

禁札へ木魚が響く花盛り
 (真)幻をおふ瞳あり花盛り
 (同)乳しほる人の眞上花盛り
 (同)満開にもう散々行く花も有り
 (同)花盛りに人生觀の相違なり
 (同)花盛り男性的に酔ひつゝ
 (同)心地よき歩調も峯の花盛り
 (同)花盛り酔へばわするゝ事は
 (人)満開の下にすまい顔撮つて
 (地)其の道はお馬ボツ／＼花盛り
 天)花盛り解放的な風に乗る

木公
 波樓
 黃子朗
 富美三
 樹
 迷兆
 竹雅
 麗光
 昌一
 ゆきら
 迷兆

共稼ぎ家主はほめて 晩に 来る
 題 ゴムバンド
 選見送りの土産に急ぐゴムバンド
 ゴムバンドの延ばしなり縮めたり暇
 買物の錢へヒツチりゴムバンド
 よう肥^ふた丁権へのろいゴムバンド
 ゴムバンドで現金手に受ける
 ゴムバンド都會で買ふた土産物
 裾分けへあつてよちたゴムバンド
 (軸) レツテルの被合はゴムバンド
 題 乳 紅

錦紅木同元木紅元木
選石馬山馬山馬

夜櫻 妓がつらく砂埃り
夜櫻 へ下の方から月が出る
（佳）夜櫻へ何所やら水の落ちる音
（同）髭剃つたとこへ夜櫻誘はれる
（同）夜櫻に見る足元は亂れが
（軸）雪洞をさげて夜櫻から戻り
席題 珍 客 駒
珍客へ母まゝと飛んでくる
珍客へ子供の藝のありつたげ
珍客と兩戸を閉めて語り合ひ
珍客をつれて道頓堀の宵

同豆鶴詩南人綠詩駒同豆同
秋峰郎面子選雨郎人秋

川柳社
塗青句會
(大阪)

乳バンド女給ミルクで子を育て
乳兄弟土橋で話してゐるなり

章 木
黑

(同) 珍客へカメラが急ぐ船がつき

南面子

二月二十三日夜
題靴
熊谷紅山
元

ダンサーの歸れば母の乳が出る
牛乳が來たらしい女房起きる音

木元
馬山

(軸) 珍客へまだ夕立が止まず夜
席題 白足袋 公

二選 駒人

船員はマストへ登る靴を脱ぎ
靴ぬけばかり焦がれてる臺所
早發ちの靴は宵から磨かれる
演習を終へて宿舎へ靴をぬぐ
又今日の遅刻へ靴の紐が切れ

富士 章 啓 錦 木
士 洋 石 馬

(佳)子の愛ゝ母瘦せるほゞ吸て呉を
 (同)呑み足つた子を寝ぢけり手内職
 (同)牛乳を呑んで長男瘦せてゐる
 (秀)空乳へ孫なか／＼に聞き別わか
 (軸)佛飯を供へて妻の乳が張り

紅富錦木元
士石馬山

庭先で干す白足袋に花曇り
白足袋と穿き替へて出る衣裳部屋
かつぼれが白足袋を脱ぐうしろ向き
三味の手で揃ふ白足袋輕う上げ
(佳)白足袋をはいて悔を聞いて居る

綠豆同南面子詩郎秋雨

船長の靴エナメルは、夏に光り、冬に雨の交差。良
長靴の靴エナメルは、夏に光り、冬に雨の交差。良
(佳)まろ／＼の意見に成る靴を履き、
(同)除隊兵編上げ履いて禮に来る
(軸)送り出す妻へ元氣な靴の紐
題 共稼ぎ 木 馬選

川柳 雑誌社 天王寺句會 (大阪)
四月十三日 於鶴峰居 福田
遠來の珍客酒井駒人氏を迎えて、
ふさわしい和やかな句會でした。
兼題 夜 櫻 緑

峰報
櫻月に
雨選

年頃の娘は家に歸つて笑ひこけ
年頃になって社長は信用し
年頃のはつきり物を言はぬなり

同
峰選
詩人
豆秋
南面子
公二

共稼き昨日と同じ早さを出啓
共稼き貯金の高へ微笑みぬ富士洋
共稼き隣へ家賃とすける章
共稼き何か可笑しい事が出来錦
遊べない事に決めてる共稼き章
石

夜櫻に母の背中で寝てしまひ
夜櫻と若いツバメを見くらべる
夜櫻に篝火欲しい山の端
夜櫻へ久々に出る女連れ
夜櫻のつめたい井戸の水を汲み

鶴峰詩郎南面子公二鮎美

年頃の姉へ今日から二の替り
年頃が舞臺に立つてすぎてゐる
席題 笑ひ聲 豆
インフレが廊は晝も笑ひなり
笑ひ聲残して闇へ消えてゆき

駒人 綠雨 秋選 南面子 詩郎

花曇り隣座敷はよく笑ひ
子をあやしむつまじそな笑ひ聲
笑ひ聲つくねんと聞く二階借
(生)壁一重のけてゝ笑ひ聲
(同)笑聲へ手を振りながら寝る
(同)嬉しげな笑ひ聲肩たたかれる
公 鶴 二 峰

川柳 御池橋句會(大阪)

四月四日 村松夢裡報

兼題 雪 夕立が晴れて雪の森を出る 青兒
水道の雪へ素足白う立ち いわな
雪垂る水着の色をあてやかさ 一羊
兼題 和 尚 静寂へ和尚のせきが聞へて来 夢裡
お彼岸を控へて和尚肩がこり いわな
和尚様に成りたい小僧の理想なり ひでし
(軸)寝る子の顔を和尚は見て歸り
兼題 相 性 相性の欄を見て置く年となり ひでし
相性のつつか違つた朗かさ 夢裡
相性の悪い同志が好きになり 一羊
相性の肩がすれ合ふ戎橋 青兒
兼題 藤 棚 藤棚のベンチへ風のある夕へ 青兒
藤棚を越して長唄聞えて来 いわな
陶然と来た藤棚に風があり かほる
兼題 仲 仕 云ふ丈を云ふて仲仕向を替へ 夢裡
車押せば仲仕の禮の町重さ ひでし

盃を無骨に出した仲仕の手 青兒
晝休み仲仕は何も考へず かほる
兼題 萩之茶屋句會(大阪)
三月二十八日夜 奥野禿山報
兼題 沙干狩 互
貝一つ探つて彼女は呼んでゐる 九文錢
足型を残して歸へる沙干狩 窮巢
沙干狩砂利に日傘の戀も居る 銀波
沙干狩指の間へ輕るい砂 禿山
兼題 顔 禿 殘念な顔がとなりの魚籃覗き 九文錢
泣き顔になつて子等から離れる兒 銀波
面影へ想ひが過去を追ふて行き 窮巢
兼題 酒屋 かんびんと小錢酒屋へ行く暮し 銀波
妾宅の旦那の來たを知る酒屋 九文錢
行先きも云はず酒屋に酔つて居る 同

兼題 猿 見物へ飛び付きさうな猿芝居 禿山
猿曳きの春を忙はしく暮して居 同
驚ろかす太鼓だしぬけ猿廻し 銀波
猿廻しは峠を越して泊りとし 九文錢
店先へ猿おけるなり 断はられ 同
兼題 轉 頼杖が何時か轉寢してしまふ 九文錢
豆腐屋の鈴に轉寢起される 銀波
轉寢へ子供押さへる妻の聲 禿山
轉寢つくづくぼうしと目くれる 窮巢
兼題 餅 柏餅丁稚は一つ貰ふだけ 九文錢

柏餅香りと空へずんと晴れ 窮巢
夏の聲柏餅から粽から 同
案内状飲めぬ一人は柏餅 銀波
奢つたは誰れとも訊かず柏餅 禿山
ボンビアン開ける手つきの柏餅 同

川柳 高知句會(高知)

二月二十一日夜 於アラシ楼 中澤濁水報

兼題 主 婦 エプロンに主婦の勤もなれて居り 春
珍客は主婦の手際を賞めて酔ひ 十歩
派手な妻主婦ともならで老けてゆき 紫白
町内に範を見せてるもつひ髪 春夫
主婦として貯金もしたい給料日 濁水
主婦の寝る刻を知つて火消靈 珍景
(人)エプロンに主婦の素直 桂風
(地)主婦の會皆不景氣に勝つ 珍景
(天)主婦とて只一錢も無駄にせず 朗水
兼題 赤ン坊 赤ン坊は世辭に重たく抱かれる 柳
赤ン坊へ夜中の炭火いこつてあ 青果
赤ン坊が笑つた事でみんなたち 春水
(人)赤坊の一步へ家内皆たたり 珍景
(地)にこゝ旗と抱つた兒童展 朗水
(天)赤ン坊へ枕屏風の繪が笑ひ 濁水
兼題 石 炭 ストープへ課長石炭焚きに來る 白選
石炭へシヤベルを挿したまふ雨 兼子
石炭の艶へ思想が變つて來 春夫
(人)石炭を運ぶ車が鈍に見え 青果

(地)石炭が今朝も落ちて急カーブ
(天)戦雲へ落着きかへる無烟炭

兼題 座敷半

珍景 柳風 景

生きてゆく姿の中の座敷半
座敷半お家騒動なご想ひ

紫白 水選

座敷半へ白洲の花の咲き變り
青葉に同情が寄る座敷半

青果 津景

珍客へまた騒ぎ出す座敷半
座敷半太平樂な歌が洩れ

北津 朗水

落着けば無駄にも見える座敷半
座敷半母は涙で膳を入れ

同子 兼子

座敷半母へ案外おとなしく
座敷半母は隣りで縫ひつけ

桂風 紫白

(人)座敷半忠義な下女に暇をやり
(地)座敷半こんどは唱歌やつてる

兼紫 紫白

(天)死んだ兒の名を呼んで座敷半
(軸)座敷半ぶちこわされた内祝

濁水 兼紫

川柳 八束例会 (鳥根)

四月八日夜

於亂笑別館 六郎報

兼題 パス

天痴人選

ラッシエヲパス一杯の人が乗
バスガール春らしく戀をひろつて

兼人 兼人

銀バスへしろきまひるの風光る
下りた客バスは煙で捲いて逃げ

兼人 兼人

憤激も薄らぎゆきぬバスに揺れ
ストッパへ疲れるを見よバスガール

兼人 兼人

春が来てそこのバスは塗り替へ
天職にしてバスガールは肥え給ふ

兼人 兼人

(秀)バスが来て嬉し子供手を揚
(同)乗合へ皆満足して顔

兼人 兼人

(同)陽を浴びて無表情なバスが行く

法泉子

(同)銀バスに揺れて青春おどる

兼人

(同)銀バスと疲れた家並み夕暮

兼人

(同)並木みなバス見送りて和み

兼人

兼題 水平線

兼人

曇天は水平線をみだして
心中へ水平線の夜は不気味

兼人

水平線三年の今日も同じなる
水平線をこる様に日が暮れる

兼人

海水浴フット水平線を見つけた
春は春は水平線に溶けぬたり

兼人

水平線朝の活気となる紅さ
病院の窓から曇る水平線

兼人

ドライブへ水平線が伸びて来た
横断飛行水平線を圓く見て

兼人

(人)水平線故國へ最後の煙が消え
(地)青春婦水平線以下の戀

兼人

(天)黙々と水平線のサラリマン

兼人

兼題 破

兼人

社長室給仕が破る決議文
なつかしい君の破顔も久し振り

兼人

日本海破局の前の沈黙よ
襟裾に心の破れ見すかさず

兼人

破れ目に素肌があるよ菜葉服
失業と破れ畳と破れ靴

兼人

秀才の眼が落ち込んで落ち込んで

兼人

秀才も苦しい家計にうづもれて

兼人

秀才の鼻をかすめた香水よ

兼人

秀才も君も産業豫備軍か

兼人

兼題 若葉

兼人

風そよぎ若葉にもゆる戀心
櫻若葉青いカーテン開けてあり

兼人

無心に遊ぶ子等に若葉が揺る
憂鬱も出給へ青葉が待つて居る

兼人

競馬場をめぐり若葉となりました

兼人

兼題 エプロン

兼人

エプロンをぬいでほがら夕飯
校庭にエプロン並んで日本晴

兼人

エプロンへ新妻のにはいたゞ
幾人の母とはエプロンだけが知る

兼人

いそがしいことをエプロン云々
口紅のあととエプロンの哀愁

兼人

エプロンは新調も若奥様の春
エプロンの白さも拗れてある如し

兼人

兼題 汗

兼人

畑打ちのもう一息と汗を拭き
汗ばんだ銅貨に午後の日がまぶし

兼人

作業服尊い汗で光るなり
汗の結晶へ洋館が一つ建ち

兼人

川柳 ABC 吟社例會 (鳥根)

三月二十八日 八東支部報

兼題 雜 誌 六 郎 選

いっしかに末の子維誌の友となり
眞繰る維誌の音だけ夜のしゝま

維誌の中の勿忘草が枯れてなる
(カマササキ)

母一人子一人維誌へ頭寄せ
維誌のグラビヤ版に春の想ひが續く

(秀) コック部屋講談維誌が爆れて
(同) 獨身が探ぐる獵奇よ古維誌

(同) 春の芝生、維誌と俺と若く生
兼題 訪問 天痴人選

訪問へかすかに病友うなづきて
アスファルトを軽くけつて訪問着

人妻となる日も 近し 訪問着
(秀) 訪問機 五分間の空を去り

(同) 訪問の後、ドライブにも天氣
(人) 訪問をすれば先客たち上り

(地) 訪問着なご、夫人の費ひみち
(天) 初訪問用件半ばすまして來

(軸) 朗らかな春人絹の訪問着
兼題 席題 一周 法泉子選

一周の小池日百合まだ違ふ
北極の空を廻つて一周機

もう一周スパイク土を食つて居り
一周機消息を断つて五六日

半分の駄菓子へ犬の一週り
(佳) 地球を一周し沈黙! ベンは大きき

(同) 優勝馬一周ごとに殺氣立ち
兼題 席題 一周 法泉子選

一周の小池日百合まだ違ふ
北極の空を廻つて一周機

もう一周スパイク土を食つて居り
一周機消息を断つて五六日

半分の駄菓子へ犬の一週り
(佳) 地球を一周し沈黙! ベンは大きき

(同) 優勝馬一周ごとに殺氣立ち
兼題 席題 一周 法泉子選

一周の小池日百合まだ違ふ
北極の空を廻つて一周機

もう一周スパイク土を食つて居り
一周機消息を断つて五六日

半分の駄菓子へ犬の一週り
(佳) 地球を一周し沈黙! ベンは大きき

(同) 優勝馬一周ごとに殺氣立ち
兼題 席題 一周 法泉子選

(同) 來そうにも水車小屋一周り
(同) 一周りして公園の戀去れる

(同) 尖道湖一周! アスリート、微笑
兼題 線路、成 互

線路も走つての特急の突進!
成功を祈つて母は老いてなり

宮様のお成へ頭を下げてなり
成ると云ふ自信も持たず乗り込

炎天へ線路工夫の脊が光り
ルンペンに線路が長い春となり

線路たゞ黙々と雨に濡れ
友情と別に成續へ好敵手

成金の庭石苔が生えてあらず
園體は線路工夫へ旗を振り

成續へ無口な父の笑となる
兼題 大地吟社例會 (出雲)

四月二日夜 於尼線之助居 緑之助報
兼題 蓄音機 田鶴緒選

蓄音機畫のガラスの春の雨
ポータブル彼女の脚、踊り度き

(佳) コーヒーのはひの中の蓄音機
(同) レコードが春のリズムを乗

(同) 蓄音機うつらな街の風が鳴る
兼題 意 外 緑之助選

情痴の瞳へ意外な町の人通り
意外な戯に表戸が軋る

春の戀感な耳を持つ彼女
兼題 煎餅 華 村選

煎餅を嚼んで晝きぬ戀
煎餅へ言譯がある男の子

煎餅へ言譯がある男の子
兼題 煎餅 華 村選

煎餅を嚼んで晝きぬ戀
煎餅へ言譯がある男の子

煎餅へ言譯がある男の子
兼題 煎餅 華 村選

煎餅を嚼んで晝きぬ戀
煎餅へ言譯がある男の子

煎餅へ言譯がある男の子
兼題 煎餅 華 村選

煎餅を嚼んで晝きぬ戀
煎餅へ言譯がある男の子

煎餅へ言譯がある男の子
兼題 煎餅 華 村選

煎餅を嚼んで晝きぬ戀
煎餅へ言譯がある男の子

煎餅へ言譯がある男の子
兼題 煎餅 華 村選

煎餅を嚼んで晝きぬ戀
煎餅へ言譯がある男の子

煎餅へ言譯がある男の子
兼題 煎餅 華 村選

煎餅へ春めきと知る 兒の欠伸
兼題 夜 業 比紗緒選

儲けるは誰夜業の灯に踊り
夜の底に飽光りて灯を上げる

夜業とは悲しい女の宿命よ
(人) 夜業の針を燈に集めて春の雨

(地) 針に指温む春の夜兒の寢息
(天) ふるさととは遠し夜業の灯に疲

兼題 三日月 羅 門選
三日月を浴びて青春の夜を語る

明い街の感觸に溺れて三日月
胸下駄の響きも 輕き三日月

絶交の夜を三日月が悲劇じみ
(人) 彼女の秘密三日月はあゝ向き

(地) 純情の泪を嗤ふて三日月
(天) 三日月と女が明るい十字街

兼題 忘られぬ人 互 羅 門選
ひとことと去りゆかむ人と三日月

夕焼に浮べ消えやらぬ名の人よ
兼題 川柳 松 江 例 會 (鳥根)

四月三日夜 於天神ミドリ喫茶店
兼題 コンサート 幹事 奈良井柳人報

コンサート母の腕に寝入つて
(佳) 春の灯はレコードコンサート

(同) 萬國旗とコンサート
(同) コンサート舞臺に花環を取

兼題 春 着 卷 二選
花尻り春着に花が付いてゐる

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

卒業の春着へ姉と違へられ
兼題 春 着 卷 二選

川柳 加古川句會 (兵庫)

加古川支部報

二月十九日午後四時 御旅支部の翠夢氏を迎へ有意義に句會を終り、名残惜しくも零時三十六分の列車に君を送る。

席題 トロツコ 光 哉選

トロツコが打ちすてられた冬の空
トロツコが子供で動く晝休み
(人)トロツコがばば鮮人村が出来
(地)屈托もなく押すトロの弾み
(天)父が彼處でトロツコ押して

席題 心 美也 光選

いつはつた心と思ふまいとする
心にもない事云ふて御辭儀をし
(人)冗談が俺の心につきあたり
(地)身も心捧げつきた指を切り
(天)このからだこの心とは逆なり

席題 行商 二選

行商のも一度富士へふり返り
(人)行商の疲れた顔へ夜の風
(地)儲けたと仲々冬はぬ行商人
(天)行商は去年の冬を出たつきり

席題 落書 山選

落書の一人大きく丸を書き
落書がして見たくなるぬくい罎
(軸)叱られた仇落書となつてゐる

席題 夢 夢選

夢に見た田舎の父がひよつと来る
夢に醒め弱い心の吾と知り
夢でない夢草の肌ざはり
(人)夢を見たつもりで父は諦めり
(地)よい事も夢二日過ぎ三日過ぎ
(天)揺り籠にゆられて春の夢輕し

席題 桃色 永し

夢に見た田舎の父がひよつと来る
夢に醒め弱い心の吾と知り
夢でない夢草の肌ざはり
(人)夢を見たつもりで父は諦めり
(地)よい事も夢二日過ぎ三日過ぎ
(天)揺り籠にゆられて春の夢輕し

席題 草鞋 春

土地訛出して草鞋の紐を解き
變裝の草鞋に足を食はれた日
(佳)草鞋履きやつぱり住み慣れた
(同)踏みしめる草鞋とつぱり水

川柳 高知句會 (高知)

三月二十一日 於アラジル樓

席題 第三者 六 絃選

理屈言ふ奴へ三者になりきれず
真相を知るははるかな第三者
同情をすることはして第三者
第三者だから公平だと言はれ
判決へ意見が異ふ第三者
行詰る智恵を預かる第三者
(佳)キヤスチングボードを握る樂白
(同)馬鹿と見るなそれよし第三者
(同)第三者でふ餘裕吸ひつけて
(同)第三者あからさまには言はれじ
(同)適切に評する第三者腹が立ち
(人)法廷に第三者なる好奇心
(地)三者ふと餘り出過ぎ事を知り
(天)第三者笑へば笑ふ顔を持ち

席題 草鞋 春

土地訛出して草鞋の紐を解き
變裝の草鞋に足を食はれた日
(佳)草鞋履きやつぱり住み慣れた
(同)踏みしめる草鞋とつぱり水

席題 草鞋 春

土地訛出して草鞋の紐を解き
變裝の草鞋に足を食はれた日
(佳)草鞋履きやつぱり住み慣れた
(同)踏みしめる草鞋とつぱり水

席題 草鞋 春

土地訛出して草鞋の紐を解き
變裝の草鞋に足を食はれた日
(佳)草鞋履きやつぱり住み慣れた
(同)踏みしめる草鞋とつぱり水

席題 草鞋 春

土地訛出して草鞋の紐を解き
變裝の草鞋に足を食はれた日
(佳)草鞋履きやつぱり住み慣れた
(同)踏みしめる草鞋とつぱり水

席題 草鞋 春

土地訛出して草鞋の紐を解き
變裝の草鞋に足を食はれた日
(佳)草鞋履きやつぱり住み慣れた
(同)踏みしめる草鞋とつぱり水

(同)捨てた氣の草鞋を女中解いて
(同)都會今草鞋淋しいものにする
(同)斷髪を草鞋が撫でる峠茶屋
(人)洋服の客面白う履く草鞋
(地)留學へ入は草鞋のまゝに老い
(天)信心の草鞋もう一寸歩かうよ

席題 脇 造酒 三選

脇枕女の脇が崩れかけ
からかへば嬉しう脇がつんと来る
あきらめの出来ぬ男脇面白し
(佳)くすぐられ藻掻く男脇面白し
(同)マラソンは脇に力も見せる
(同)脇ついて詰が淋しい獨者
(同)脇ついた片手に頼毛拔かれ
(同)脇ついて刺戟が愠しい春の雨
(人)手枕にふと母の脇固いなり
(同)失戀の脇へマーナル冷た過ぎ
(地)釣草へ輕うに揺れる白い脇
(天)まとまつた思案へ脇もほつた

席題 脇 造酒 三選

脇枕女の脇が崩れかけ
からかへば嬉しう脇がつんと来る
あきらめの出来ぬ男脇面白し
(佳)くすぐられ藻掻く男脇面白し
(同)マラソンは脇に力も見せる
(同)脇ついて詰が淋しい獨者
(同)脇ついた片手に頼毛拔かれ
(同)脇ついて刺戟が愠しい春の雨
(人)手枕にふと母の脇固いなり
(同)失戀の脇へマーナル冷た過ぎ
(地)釣草へ輕うに揺れる白い脇
(天)まとまつた思案へ脇もほつた

席題 脇 造酒 三選

脇枕女の脇が崩れかけ
からかへば嬉しう脇がつんと来る
あきらめの出来ぬ男脇面白し
(佳)くすぐられ藻掻く男脇面白し
(同)マラソンは脇に力も見せる
(同)脇ついて詰が淋しい獨者
(同)脇ついた片手に頼毛拔かれ
(同)脇ついて刺戟が愠しい春の雨
(人)手枕にふと母の脇固いなり
(同)失戀の脇へマーナル冷た過ぎ
(地)釣草へ輕うに揺れる白い脇
(天)まとまつた思案へ脇もほつた

席題 脇 造酒 三選

脇枕女の脇が崩れかけ
からかへば嬉しう脇がつんと来る
あきらめの出来ぬ男脇面白し
(佳)くすぐられ藻掻く男脇面白し
(同)マラソンは脇に力も見せる
(同)脇ついて詰が淋しい獨者
(同)脇ついた片手に頼毛拔かれ
(同)脇ついて刺戟が愠しい春の雨
(人)手枕にふと母の脇固いなり
(同)失戀の脇へマーナル冷た過ぎ
(地)釣草へ輕うに揺れる白い脇
(天)まとまつた思案へ脇もほつた

席題 脇 造酒 三選

脇枕女の脇が崩れかけ
からかへば嬉しう脇がつんと来る
あきらめの出来ぬ男脇面白し
(佳)くすぐられ藻掻く男脇面白し
(同)マラソンは脇に力も見せる
(同)脇ついて詰が淋しい獨者
(同)脇ついた片手に頼毛拔かれ
(同)脇ついて刺戟が愠しい春の雨
(人)手枕にふと母の脇固いなり
(同)失戀の脇へマーナル冷た過ぎ
(地)釣草へ輕うに揺れる白い脇
(天)まとまつた思案へ脇もほつた

席題 脇 造酒 三選

脇枕女の脇が崩れかけ
からかへば嬉しう脇がつんと来る
あきらめの出来ぬ男脇面白し
(佳)くすぐられ藻掻く男脇面白し
(同)マラソンは脇に力も見せる
(同)脇ついて詰が淋しい獨者
(同)脇ついた片手に頼毛拔かれ
(同)脇ついて刺戟が愠しい春の雨
(人)手枕にふと母の脇固いなり
(同)失戀の脇へマーナル冷た過ぎ
(地)釣草へ輕うに揺れる白い脇
(天)まとまつた思案へ脇もほつた

席題 脇 造酒 三選

脇枕女の脇が崩れかけ
からかへば嬉しう脇がつんと来る
あきらめの出来ぬ男脇面白し
(佳)くすぐられ藻掻く男脇面白し
(同)マラソンは脇に力も見せる
(同)脇ついて詰が淋しい獨者
(同)脇ついた片手に頼毛拔かれ
(同)脇ついて刺戟が愠しい春の雨
(人)手枕にふと母の脇固いなり
(同)失戀の脇へマーナル冷た過ぎ
(地)釣草へ輕うに揺れる白い脇
(天)まとまつた思案へ脇もほつた

翠青素珍春
葉雨水景夫

大阪大川柳會 (大阪)

三月二十四日

丸島利生報

兼題
贈路
郎選

噂では又大臣になつちまい
噂は氣にやむほごに金を貯め
の噂御存じもかへず得意なり
噂なご氣にもかへずやつてのけ
慢じたる美貌彼女は實ると云ふ
産んだとは云ふは嫁は嫁くそう
エシツプを氣にする社長若くし
噂にものぼらぬ程の戀なりき
噂だけたてゝ女の淋しがり
とやかくの噂はあれどよく勤め
エ、マ、マ噂の通りなつて
(人母親の噂に娘切ながり
(地椿門へ時の噂をして通り
(天超然と噂の中に脂切り

兼題 鐵 路

春風に五彩の幟鐵もなし
長湯したこに氣のつく指の鐵
慈愛と母親になり子は太り
ぬがすしコートの鐵も春なれや
綴張の鐵から春のたつもよし
アイロンに吸はれてしまふ鐵も
梅幸もグラスで觀れば鐵ばかり

欽路芳同方同橙同利同同橙芳柳一
川一生正金生一金金

ボケツトの履歴書に皺になるばかり就職へ皺恥かしい年となり仲裁は皺に免じて聞けと云ふ顔の皺つまらなきそう撫でてゐるや
(人) ハンカチの皺の如くに疲れた
(地) 大臣の漫画に皺のつけごころ
(天) ハンケチの皺のばして嘘を云ふ

同き 同同 櫛正路
しよ き

雜吟路

二 郎 選

居ながらにはラザがで諍る天王寺
衰亡の村に榮種の咲くも春
か、鹿の嬌羞に似て 逃げる
鳥類の猶太人なるよげ鷹か
(人)投資せず利廻り許り云ふ男
(地)貞操を値切る男の顔の顰
(天)靴下を表皮の如く脱ぎ棄てる
席題 枕 路

路燈同同方同筑同燈同利路柳湧正
生金 正 川 金 生生秀三甫
耶選
燈利方同路利一
金生正 生生材

（天）枕元さぐるは金でなかりけり
（軸）手枕はいゝが約手はごうゝ氣
（同）おかし_ま枕蹴飛ばし家を出る

川柳 關西土地句會（大阪
雜誌社）

同路正
郎甫

竹原一久報

車厘

二 南 邊

風の無い事から話し船の旅
風向きが變り沈黙すると決め
る向きとは遠し夜汽車の窓の風
(軸)風荒む中に貞操考へる

年頃 二

年頃を病んでゐる娘の寝汗が匂ふ
人生の春を働き老けてゐる
(佳)年頃も同じ母を又泣かせ
(軸)十八の娘の疑ひを持って餘し

興奮 興奮

興奮がさめて手酌の酒もさめ
興奮の下駄片づ方見當らず

外交の悲哀

(佳)興奮を押へ御頭をなして歸り
(同)興奮を丸く圍んで記者は書き
(軸)興奮へ右も左も押し黙り

四月 五

ワシントンの櫻咲く

移し植えられても四月を忘れず
諸らめて見たが四月の空が晴れ

入學式始まる

子の願ひ親の願ひへ來た四月

同 鐘 まさな 二 無 まさな 一 素 久 二 鐘 まさな 一 鐘 まさな 南 二 無 まさな 鐘 まさな

—(69)—

明珠居偶會 (神戸)

三月十八日

西村明珠報

兼題 通 る

互 選

何事もなく巡査只通るだけ個性の通りにペン字あからさま

一 好 繁 堂

取引所寸景

儲けたい人の間を通り抜け境内を通りぬける流行唄何日かしる母と通つた道に出る

竹 華 水 楓

席題 愛 人

互

愛人があつたのしい日記帳愛人の返事を二度にして返へしアトリエに愛人の匂ひまだ残り

春 秋 吉 左 右

愛人と芝生に春の陽がまぶし

幸 堂

せゝらぎを派手に渡りランデヴー愛人は犬をお伴に待つてゐる

明 珠

心置きなく話して愛人朗らかな

同 選

戒めの涙拳の上に落ち戒めに佛壇の扉が閉まつてゐる

春 弘

病人へ母はラザカを戒める

一 好 堂

髪をそつて戒めを聞きに来る戒める兄の涙へついた手だ

華 水

星の窓姉に戒められるなり

吉 左 右

凡人に戒められてゐる凡人

竹 楓

席題 負 傷

互

震する港へ着いた負傷兵負傷兵今更胸がなると言ひ慰める人も負傷をしてゐるなり

麥 刀 子 吉 左 右 竹 楓

笑れながら萬創膏をはる

繁 堂

負傷した顔滿洲の國にある

好 弘

興奮して立ち上る負傷兵

明 珠

負傷兵今日は陸軍記念日だ

春 秋

負傷 兵

同 選

席題 解 解

同 選

辯解の態度を見ての廻り椅子辯解もせずに男と云ふ姿

吉 左 右

女に生れて辯解は口答へ

竹 楓

辯解が次から次へ出る男

春 秋

辯解の女の目なぞ考へる

同 選

辯解をして縁側に瓜をきり

幸 堂

辯解の男の髯が延びて居る

同 選

席題 不 景 氣

同 選

不景氣に十錢店が一つふえ

明 珠

不景氣を叱つてはやる上かん屋

春 秋

逆らふた口も不景氣知つてゐる

吉 左 右

交又點不景氣な書は知らぬなり

華 水

不景氣に六法全書讀み直し

幸 堂

對座吟 A (京都)

司 郎

報

明日／＼とどばしたとても拂ふ金

波 樓

人生の明日と昨日と面白し

同 選

成巧の明日を戀に誓ふたり

同 選

黙々と明日明日を期待する

同 選

こはい夢だつたと汗をふいてゐる

同 選

恩師から冷汗の出る手紙来る

同 選

汗なぞを知らず細く育てられ

同 選

馬の汗皆んな黙つて働いて

同 選

川柳風呂 (大阪)

その三

水谷鮎美報

鼻

同 選

とがりたる鼻で勝氣を見せた姉

夕 鐘

鼻筋のとはつた子あり二號邸

同 選

問題の鼻へソップラノフーんとぬけ

同 選

子を呼んで叱咤の鼻がつまるなり

同 選

鼻の汗勝氣な妻の忙しし

同 選

番臺の娘は女湯の方を向き

同 選

番臺へ時計はぶい音をたて

同 選

湯加減の苦情へ番臺下りて行き

同 選

櫻咲く語番臺眼を病んで

同 選

番臺へ敷島の火をひひつける

同 選

番臺の晝はてまりをわいてゐる

同 選

夜のスチームが幻を吸ふてゐた

同 選

麦かほる夜のふたりへ蚯蚓なく

同 選

なつかしい詠りに更ける歸郷の夜

同 選

夜の夢はまるく聖なる乳房なり

同 選

酔へばたゝ夜の妓の片えくぼ

同 選

道はるし夜の歩調をあはせたり

同 選

湯 渦

同 選

渦渦は青き渦となりてしまひ

同 選

石 竹

同 選

同 選

同 選

同 選

同 選

同 選

同 選

同 選

同 選

同 選

同 選

いかだ詩社例會 (松江)

三月十二日夜 於事務所 玉城莞路報

兼題 微笑 笑 勝 人選

にたりと微笑むモボの獵奇な眼 三 耶

微笑む母に苦勞の皺が見え 同

微笑を投げる女給の生活苦 同

兼題 微笑 磨須雄選

微笑みの中に惱みのある思ひ 三 耶

不具な子へ微笑む母の淋しさう 三 耶

兼題 時計 莞 路選

眼覺の時計を頼る出張日 祥 月

兼題 豫感 磨須雄選

人生の時計の針に刻まれて 磨須雄

兼題 豫感 三 耶選

恐しい豫感神經尖つて 莞 路

ハット寒い豫感が頭かすめ去る 磨須雄

出發へ豫感があつて新婦泣き 勝 人

情夫来る豫感へマダム厚化粧 莞 路

豫感がよくあつてゐる相場市 祥 月

三角な戀 豫感 は裏切られ 莞 路

兼題 春 次 耶選

春が来た日向ぼつこの丸い背 耶 選

春の雨憂鬱とある夜の靜か 三 耶

アスファルト春のリズムといった音 磨須雄

春や春行進曲のもつて来れる 磨須雄

山も野も春の姿に黄昏れる 莞 路

春雨へ相傘で来る二人連れ 磨須雄

栗炊居第五回 (岡山)

三月二十三日 森本素木報

青春が障子の中にみなぎつて 素 木

満ち足らぬ間を青き灯へ運び 同

突き徹す正義はとかくにくまれて 同

我が影よなんと寂しい道だらう 同

桃色の夢の中なる新夫婦 同

戀人があつて青春甘い風 同

兼題 苗 會 (第三回) 幸松四五磨報

四月二日 寫 真 日吉一天選

(人)寫真より合て話さずモガは云い 子 木

(地)いかに伯父の寫真で子木とし 素 耶

(天)此の中に俺がエキストラ 天笑坊

小遺 遺 琴 人選

小遺が無ければ財布おいてある 蝶 路

小遺の不足は候文で出し 曉 星

(人)小遺がまだ有る息子真面目 四 五磨

(地)小遺を送れと學舎に居 同

(天)小遺に母の言葉が着いて来る 蝶 路

兼題 人選

ルンパンの姿に寒く雪が降リ 重 代

ルンパンをして古郷の夢寒く見る 曉 星

ルンパン明したのお湯の有難み 四 五磨

ルンパンと自稱してゐる新學士 子 木

ルンパンは正しく生きて飢へ居る 曉 星

(人)ルンパンは春空をながめる心 友 朗

(地)公園のベンチもせせぎ生きて居る 白 瀧

風 呂 琴 人選

もういゝか首を浮かして母を呼び 天笑坊

(人)首つだけ浮かして唄ふ浪花節 子 木

(地)湯かげんに心の疲れ解て行き 四 五磨

天背を流ふ子供の手親は知る 曉 星

兼題 青 空 人選

青空にちと起き直る床の上 四 五磨

青空を見て遠足の子を起し 白 瀧

(人)戀人に合つて青空をそれでよし 同

(地)青空がさしこんで居る留置場 曉 星

(天)青空へ子を差し上げる健かさ 同

ひかり集 その十五 水谷鮎美報

あおき大空雷ひとつの野いばらと 友の死 卜 居

雞壇へつぼみのまんま散つた朝 同

鳩の眼へ梅の蕾へ雪暗れる 同

蓮がひらく夢それは風の夜だった 同

蕾はかたし神さまに祈りある 同

尼僧の手に蕾はほろり 落ち 同

渡り鳥のきて蕾ついでむ冬 同

落椿つぼみは川に沈みゆく 同

むしばみし蕾につゆがひかるなり 同

いかだ詩社 八重垣吟行 (松江) 同

四月三日 奈良井次郎報

兼題 愛人の頼赤らんで鏡ノ池 互 選

鏡ノ池年増女の物思ひ 勝 二

傳説を其儘受けて池の端 磨須雄

道ブラから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなった。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く読む方法として古本を買へばいい。古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は違ふの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次で公立社の棚をのぞくことな一つの趣味としておすゝめしたい。(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。
御通知次第早速参上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまま營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五六一番

加茂川句會

日時 五月十日(水)午後七時
會場 仲源寺(京都四條堀手東入)
兼題「新緑」三句 司郎選
會費 金 參拾錢
京都市嵐山天龍寺前平岩方
京都支部

畫の會

(日時) 五月十五日午後一時
(題) 「父」三句
(所) 大阪市住吉區平野西之町八三 橋本綠雨

天王寺句會

(日時) 五月十三日午後七時
(題) 「曇」三句
(所) 大阪天王寺區北河堀町六九 幹事 福田 鶴峰

光笑會

(日時) 五月十一日夜
(題) カナメ喫茶店
(所) 大阪市南區疊屋町六 幹事 永田里十九

雜誌「藥業往來」 川柳募集
題 パラソル 十句 翠 選

用紙 五月二十日締切
投句所 大坂市東區粉川町一六
生田 翠 夢宛

道ブラから天牛へ

賣買 天牛本店
大阪市南區日本橋南詰東入
南側(電話南二七四九番)

懸賞川柳募集

題「曲線美」 路郎 選
五月十日締切
その他雜吟を募る

▼用紙 官製ハガキ(化粧柳壇と明記の事)
▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投句所 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛
化粧新聞社

川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋を左の價額でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。
五〇枚綴二冊(送料共)
御申込は本社事務所宛。
(一錢切手代用不苦)

川柳手拭

の染筆 一種 路郎主幹
金三拾錢
(送料共)

Nishincho MEMO

雨 緑

▼前號が内容充實と早く出たので讀者諸君から大變な好評を寄せられました。編輯部も一層活躍して今後も期待に添う様に致したいと思ひます。

▼故小島六厘坊君の廿五回忌を本社主催で五月五日の夜道頓堀俱樂部で催すことになりました。故人の追憶を革めるため京都から齋藤松窓、大阪から西田當百、木村半文錢の諸氏が御出席下されることになりました。尙當日出席者に記念葉書を一組贈呈致します。

▼松山支部の幹事阪井拓水君が廣島へ轉居されたので河合紫石君と交替されることになりました。

▼福田山雨樓君(同人)は四月一日夜行で琴平から松山方面へ旅行されて道後一泊されました。

が時間の繰り合せがつかなくて松山方面の川柳家に逢はず歸阪されました。

▼賛成員藤本卯之助、同人庄健一(萬よし)の兩君は今回六月改選の大阪市會議員に立候補され兩君のために當選されることを祈る。

▼生田翠夢君(社友)は四月二日出雲大社へ参拜され歸途松江驛で支部の廣江天痴人君の出迎ひをうけて三日夜は同君のために支部の歡迎會を催されました。同君に變つて厚くお禮申し上げます(會報を御参照を乞ふ)。

▼熊谷紅君(社友)は三月廿日志摩賢島、四月三日笠置山へ遊行されました。

▼姫田夕鐘君(社友)四月十日郷里德島へ花見に出かけられました。

▼石曾根民郎君(社友)は松本市から京都大阪方面へ旅行されることになりました。時間の都合でなるべく多数お目にかかりたいものと思ひます。

▼松丘町二君(同人)は嚴父の來阪で忙し日を續けてゐられます。

▼奉天へ行かれた江戸みつる君と岩崎柳路君とが三月二十二日初對面されて親しく話されました。どうです。何分着奉早々の事でもあり次回に終日語り合ふ約束で、みづる君は安泰線へ旅行されました。

▼廣江天痴人君は四月十六日赤十字社島根支部第四回總會へ出席されて、開院宮様にお目にかかれたそうです。

▼西條支部では四月十六日支部開設一週年記念會を小嵐山の稱ある武丈で催されました。

▼「かむろ」二周年記念の會を花童子、三休、萬の家、呂久其他の諸君で開かれ、先生宛寄書を書けられました。

▼荻ヶ池支部では四月十五日觀櫻會を催されました。本社が機見女さんが出席されました。大變な盛會でした。そうですが、私は編輯事務のため遺憾ながら欠席致しました。

▼光耀抄で奮つてゐられる坂井道子さんは同趣味の長宗白鬼君と華燭の典を挙げられました。お喜びが申し上げます。

▼田久和法泉子君は松江銀行鳥取支店へ奉職されることになりました。

▼北山悟郎君(社友)は中央進出を意圖されて市内東區南久寶寺町三丁目へ移轉、營業を續けられることになりました。

▼武田玄六君が京都へ立ち寄られたので琴人君が京都へ訪れて幸男、紫明、福造その他の諸君も親しく合つて歸阪されました。また親しく合つた五週年記念柳談會を四月廿一日夜大阪心齋橋筋森永キャンデストラの二階で

催されました。本社が路郎先生琴人、山雨樓、町二の諸君が出席されて講演されました。

▼石川縣下川柳大會を旭吟社の主催で金澤市仙石町町中齒科院で四月二日正午より開催されました。本社の客員窪田銀波樓、安川久流美兩君が講演されました。

▼ふあすうと川柳社の主催で五月の川柳一色紙展を四月十六日より廿日迄神戸大倉山下俳茶堂で催されました。

▼阿部閑生君(同人)は中耳炎で入院されてゐられます。一日も早く全快を祈ります。

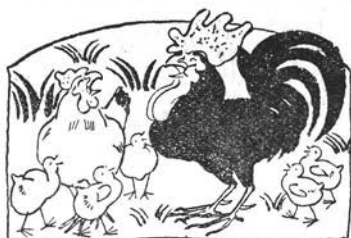
▼吉岡島平君(客員)は本社のため多年表紙畫その他で多大なる御後援下さいましたが四月二日午後二時永眠されました。哀悼の意を表します。

▼龜井愚龍君(前社友、肋膜で重態の由一日も早く全快を祈ります)。

▼西條支部創立一週年記念の寄せ書並びに松江から「生田翠夢君を迎えて」寄せ書を寄せられました。

▼郷里から來客のため三月卅日から四月十九日まで毎日川柳事務と大阪附近案内とで毎日寸暇もない位忙しい日を續きました。

▼本號の編輯は町二、山雨樓、水車、鶴峰、杏三、琴人と私とで致しました。



編輯の窓 二 記

▼新緑の五月、若駄のやうに潑瀾とした本號の出來榮を御覽下さい。

▼記事の豊富さは、自慢してもいいと思ふ。閑生氏の「かた言」は、氏の深に叡智の眼が輝いてなり、平文錢氏の七頁にわたる研究も得がたい考證的文字である。琴人君の「近代川柳進化過程の一考察」は力作で今後續載されるが、第一回分だけで筆者の意氣込の程が知られる。滿を持して待機杏三君は、遂に立つて「騒音」の項を起した。そしてその第一着手として僕の「川柳味とは何ぞ」を探り上げて論ぜられたことは、嬉しい反響と

して愉快である。亂耽君亦「十七音字檢討」に明快なところを見せてゐる。

▼朝鮮の蛭子省二氏から句評を寄せられたので、それを中心に山雨樓君が主宰で水車、丹路、一杉の諸君が集つて合評を試みた。御味讀を賜りたい。

▼地下鐵欄も異色のものが集つた。皆とりどりに面白い。原稿が輻輳したので、次號へ割愛したのもも尠くない。筆者諸氏の御諒恕を御願ひします。尙本號から再び山雨樓君の手で、好評だつた戸籍調が復歸した。これは今後續けたいと思ふ。

▼今月號での愉快なお知らせは、脇枕草紙の筆者梅本屋山氏夫妻の明治二十年頃の肖像畫で、これは同二十三年出版の「狂句百人撰」に掲載されてゐた正に珍品に屬するものである。

▼本誌の條誌として、亦關西柳壇の特異的存在として光つてゐる「たまひし」は、この四月で五周年を迎へたので、これが記念祝賀柳談會を、心齋橋筋森永キヤンデーストアの階上で、四月廿一日夜開催された。路郎主幹

が熱辯を振るはれたのをはじめとして、主催者側の一步、雨迷兩氏、平文錢氏、番傘の水府、塊人の兩氏、本社の琴人、山雨樓の兩君等が交々立つた。私も前座をつとめさせて頂いた。諸氏の講演は皆それぞれの特長が現れて面白く、且大人の風格があつて甚だ結構だつた。只私の話は如何にもお先つ走りの生半可で、背に汗を覺えた。尙當夜川上三太郎氏が東京から駆けつけて一年振りには懐かしい姿を見せられ錦上更に花を添えるの盛觀であつた。氏も亦立つて氏の信念を語られ、十時散會したが柳壇稀に見る盛況であつた。

▼本誌に度々興味ある記事を寄せられてゐる寺川信氏はサマエ映畫作品ニッポン・シリーズ第一篇として關漫花の星國と題する映畫を編輯された。この映畫は日本の精華たる櫻を外部的内部的(思想)の兩面から觀察した交響曲で教育映畫としても出色のものとのことである。一見を御薦めしたい。

▼四月十六日記、鶴町支部會をキンケウ喫茶室で開き、天王寺

支部の豆秋、今里支部の水車、御旅支部の翠夢の諸君が應援に出席、加ふるに松江支部の梶谷巷二君が折よく參加して、意氣大いにより近頃愉快な會だつた由。散會後巷二、翠夢兩君は主幹を獨占して席を改め、歡を盡したといふ。

▼かつて大阪漫畫會の會員として當地に活躍され、本誌にも表紙繪や漫畫を度々寄せられて、お馴染の本社客員吉岡島平畫伯が亡くなりました。哀悼に堪えない。氏と縁故深い大阪漫畫會の會員の方々にお願ひして、漫畫による追悼記を誌上に載せたいと主幹も考へられてゐたが、今月號ではその機を得なかつた。

▼大阪の生んだ天才川柳家、早く時代に目覺め乍ら、惜しくも夭折した故小島六厘坊の二十五回忌が來たので、別記の通り六厘坊忌を營み、故人と親しかつた主幹をはじめ、當地柳壇の大家等の追憶談を承ることになつた。當日は奮而御參加お願ひしたい。

▼本誌への批評や、感想、希望等遠慮なく御寄せを願ひます。

投稿規定

- ▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼「近作柳樟」は全家の雜吟を募る
- ▼「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
- ▼光耀抄は女性作家に限る。
- ▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
- ▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」を封筒に朱記する事。
- ▼締切は嚴守されたい。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十卷第七號課題

五月五日締切

(各題十句以内)

- ▼終點 關本雅幽選
- ▼兄弟 朝田新水選
- ▼土產物 福田鶴峰共選
- 須崎豆秋

第十卷第八號課題

六月五日締切

(各題十句以内)

- ▼髭 蛭子省二選
- ▼海岸 橋本綠雨選
- ▼水谷 鮎美選

每號募集

- ▼近作柳樟^(十句以内) 麻生路郎選
- ▼光耀抄^(廿句以内) 麻生霞乃選
- ▼各地柳壇^(會報)
- ▼文章^(評論研究感想吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に關する件、投句、贈禮廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部 金拾錢
 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 (半々年分以上御送金の方に)
 (は投句用箋を贈呈致します)

料告廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼諸代受領は送金によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集會郵便を差立てます御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指承願ひます▼轉居又は改名等の節は舊併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和八年 四月廿五日印刷
 昭和八年 五月一日發行

第十卷第五號
 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地 麻生 幸二 郎
 發行所 大阪府西成區玉出本通三丁目三六番地 柳 雜 誌 社
 事務所 大阪府市住吉區平野西之町八三番地 電話天下茶屋二五七九番
 振替大阪七五〇五〇番
 電話天王寺一一六七番

店書捌賣

(大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他市内各書店)
 (東京仲見世) 玉森堂(神戶) 米田、寶文館(願館) 石塚
 (京都) 三宅 (松山) 弘文舎 (石川縣) 小松はかりや

(順はるい)

川柳雜誌關係人々

客員										賛助員									
伊藤彦造	末弘殿太郎	淺田清一	赤井清之	藤本卯之助	國枝史晴	長岡半太	長崎柳二	田崎純生	嘉納路平	笠原直方	岡本弘一	大谷雄一	池澤徹居	助員					
蛭子省二	篠原春雨	前田五郎	前田久吉	安長川流	窪田銀波	谷村孝之	吉岡鳥人	米村あ	川上花菱	龜井三子	岡田三子	大谷五花	島山一歩						
										社									
中野柳陽	中島鐵	辻左馬	立井美	谷村八	大友貴	西村山	西村月	石森紀	市場根	生田翠	尼田夢	岩垣本	藤里好古						
三宮岡白	岸上錦	喜多春	北山悟	河合紫	櫻井圓	阿形一	江戶久	越田谷	熊野禿	奥位汀	増松小	桑原雨	村上錦	奈其松					
曉峰	石秋	郎石	魚杉	水紅	山柳	柳迷	郎小	里水	水	三好計	水谷加	楊井南	朝田新	二					
福田鶴峰	永田里九	高橋かほ	太田朝陽	西崎樂	岩崎柳	同	首須藤	平崎豆	平尾變	平日華	姬野夕	白井若	水谷梅	三					
麻生路郎	田里九	高橋かほ	太田朝陽	西崎樂	岩崎柳	同	首須藤	平崎豆	平尾變	平日華	姬野夕	白井若	水谷梅	三					
										編輯局(同人)									
小松支部(石川縣)幹事上野錦水	御池橋支部(大阪市)幹事村松夢裡	松江支部(松江市)幹事奈良井柳人	塗青支部(大阪)幹事熊谷紅	西條支部(愛媛縣)幹事荒井英賀夫	光繼會大(大阪)幹事竹内機見女	萩茶屋支部(大阪)幹事奥野禿山	北濱支部(大阪)幹事谷村稔	今里支部(大阪)幹事吉田水車	奉天支部(奉天)幹事江戶つる	八東支部(島根)幹事平塚亂笑									

工口派來たる べからず 鯨飲派來たる べし

(キング讀本より)

キングの横顔

滿洲國のビラが四方の壁に掲げられてある「歡迎和平信者國聯調査團」とか、中には陸軍中將森連の署名もある。今にもフアツシヨの嵐のまきおこりそうなおつかないビラがあるな。この所全く非常時喫茶店と言ふ感じである。トラピストの彫刻、鐵齋の「歡喜」の額、支那のお面、ふぐ提灯、住吉踊の人形、油繪、そして路郎師自筆の短

冊がE.T.G.・E.T.J.詩人の手によつて按配せられてゐる風景——これ等のものが醸す微妙なるアトモスフヒアは、とても私の拙筆では畫きつくせない所謂ビヨンド、デスクリプシヨンである。

だからその實感を味ひたいと思ふ人はアズスーン、ナズ、われ等のキングを一度おとづれて見るべきである。實感ば川柳家にとつては大切なものだからね

(亂院氏雜文の一節)



南海本線玉出本通三(十五間道路北の辻西)

喫茶
洋酒

キング喫茶室

電話天下茶屋二五七九番

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンと提げて来る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百 事 意 の 如 く 白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
白鶴が縁こはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



大正十三年三月三日第三號郵政認可(毎月一冊一日發行)
昭和八年四月廿五日印刷
昭和八年五月一日發行

川柳雜誌 (第一一二號)

定價金三十錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全